



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

612

232

61
21

文學博士 小野島右左雄著

最近心理學概說

下卷

東京 中文館藏版



61
21

612-232

序

本書の上巻が出版せられてから、こゝに、八ヶ月、梅雨晴れの今日、その下巻を完成し得たことは著者自身にとって何よりの歡喜である。顧みれば、著者は上巻の出版と共に、一つの緊張體系を生起し、倦怠、飽和、相次いで起りつゝも、眞の意味の解消を伴はないで、それは準意識として残存し、去る五月拾日から再び筆を採つて六月末日をもつて一先づ終末點に到達した。この間、僅か四十日にすぎない。が併し、著者の心的體制は、必ずしも、この書によつて起つた緊張體系の解消を意味し得ない。蓋し、この書の起草によつて、更に無限へまで連続すると思はれる數多くの問題に悩まされつゝあるからである。問題は問題として、新に展開することによつて、これが解決を求め行くべき必然性が横はつてゐるであらう。が併し、それにもかゝはず本書は又、本書としての存在を主張し得るかもしれない。

若し、本書が自ら慰め得る點を求めるならば、終始、一貫して、理論を展開し、心的生活の諸事實に解明の第一歩を與へようと意圖され得たことであつて、本書は、心理學概説であると共に、同時に兒童心理學、發達心理學、個性性格心理學、社會心理學、變態心理學、常態心理學、動物心理學、教育心理學等の各種の心理學であるといふ點である。

一書にして多書を兼ねることは勿論、困難ではあるが、本書に記された基礎的知識は、心理學のそれぞれの領域に於ける専門的研究に向ふには必ずや豫想されねばならぬものであると共に、これを一般的に見れば、要するに心理學的常識である。

今や、心理學は、最も逞しい勢で、新なる姿態を整へ、心的體制の特殊法則の解明へ、解明へと躍進してゐる。來るべき時代の心理學が如何なる姿をとるべきであり、又とらうとするであらうか、そして、この種の研究が、如何に、吾々の生活に密接な關係をもつものであらうか、從來人々が豫想しつゝあつたよりも、より以上に、心理學が人間文化に貢献し得るであらうことを著者は期待し、かつ信じつゝあるものである。

終に、本書の上巻について、各方面の學者、友人の諸家から賜つた批評、忠言、讚辭等について著者は衷心よりの感謝の意を表したい。そして、それらが下巻の起草に尠からぬ暗示として働いてゐることを斷りたい。本書上、下、二卷、而も結局、大部となつたことは一つの遺憾であるが、著者は目下、體系を新にする心理學要論を起草してゐる。若し、本書上下二卷を大部と考へられる人々は、近く完成すべき筈の同書によつて補はれんことを希望してやまない。

尙ほ本書の校正の一部は著者の學友諸氏に、索引の作製は牧田計夫君に負ふところが多い、茲に感謝の微意を表す。

昭和八年七月一日

著 者

心理學の教授各位へ。

本書の下巻について教授される場合、心付いた諸點を申し上げます。

(九) 上巻では、参考文献を一つ一つ記載することを省略しましたが、下巻には所々、入れて置きました。が併し、一つ一つ記すといふことも無駄ですから、極く主なものに限つて置きました。

(十) 重要ではあるが、教授上、さまで必要と思はれぬ部分を六號活字としてあります。

(十一) 本書に於ける感情、情緒、意志、思考、個性性格、表現等の諸問題は、心的體制に於て特に重要な問題を含んでゐると思はれますが、教授される場合は、何時でも心的緊張體系の一位相だといふ見解を徹底せられることが特に必要かと思はれます。この意味で個性性格論と、結論第一章を先に教授して、それから、順次に進まれるといふ教授の仕方も面白いやうに思ひます。

著者の心理學要論では、心的緊張體系理論が先頭に來ます。

(十二) 心理學に使用される外國語の譯語を統一することは事實上適譯が見つからなかつたり、實際に色々に使用されたりして、一つの困難な問題です。若し適譯がない場合、原語をそのまま日本語として使用するのも一つの方法でしょう。本書を顧みましても一つ一つの語に適譯を探すといふやうな遣口では仲々、筆は進みませんから、書くにつれて、色々の言ひまわしを使つたところが尠くありません。追々、最も適切な表現が見つければ訂正すべきでありましょ

61
21

う。従来、私も、Die Gestalt を形態とか成態とか、ゲシュタルトとか、いつてゐましたが、形態といふ譯語は、形態學 (Morphology; Die Morphologie) と混同しますから、原語の發音をそのまま、使用せざるを得ません。

Valence; Aufforderungscharakter も誘引性、要求特質、誘意性等の譯語がありますが、どれも適切とはいへないかもしれませんが、さしあたり、誘意性ともすべきでしょうか。

兎に角、多くの場合、原語を入れてありますから、將來日本語としての慣用が確立するまでは原語をも併せて教授さるべきと思ひます。そして適譯が出来次第、それを教へて置かれることが必要でしょう。特に現代の心理學の情勢に於て、それが必要といへましょう。

(三) 心理學要論が出版されましたなら、これを生徒用として、本書上下二卷を教師用とされるのも一つの方法と存じます。

(四) 上卷の誤植を追々、訂正したいと思つてゐます。

昭和八年七月一日

著 者

目 次

第五章 感情情緒論

- 感情情緒の一般的意義.....361
- 衝動意識.....361
- 感情情緒經驗.....361
- 感情情緒經驗の相互關係.....362
- 表象と感情との一般關係.....364
- 感情情緒經驗の區分.....366
- 情緒及び情緒的經驗.....369
- 情緒の意味.....369
- ジェームス・ランゲ説.....375
- ジェームス・ランゲ説の批判.....377
- 代表的情緒の考察.....382
- 喜びと悲しみの心理、恐怖の心理、怒の心理.....382
- 情緒の經過の形式.....393
- 感 情.....397
- 感情的經驗の本質.....397
- 經驗の自我的側面と對象的側面.....398
- 評價的經驗.....398

61
23

快不快の性質.....399

感情の特性及び質の問題.....403

感情情緒の諸相.....410

内面的動作としての感情情緒.....410

感性的感情.....411

調和感情、旋律感情、リズムの感情、形式感情.....411

生活感情.....431

生活感情の意味、生活感情の自己的社会的方面.....431

傲慢と虚栄の心理、羞恥の心理.....433

知的感情又は情操.....435

知的感情の意味、論理感情、倫理感情、道德的水準の發達と
 兒童の倫理感情、宗教感情（宗教感情の意味、不可知的存在
 者の思想の發生の動機（トーテム信仰とタブ）、宗教感情發生
 の根源、宗教感情の廣狹二義、兒童に於ける宗教感情の發展）
 美感情又は審美感情（意味、兒童及び青少年と美的感情）.....

深層感情.....435

第六章 意志動作論

意志動作一般.....465

衝動的體制と意志的體制.....465

準欲求の發生.....466

意志的體制の全景.....466

意圖的動作と自制的動作.....468

要求水準、誘意性と準欲求.....470

要求水準.....471

兒童の發達と誘意性の移動.....472

意志動作の三つの看方.....472

熱望の心理.....474

熱望の本質、願望と意欲、意志に関する諸學説と
 その批判.....474

意志目標と心的飽和.....482

意志的熱望の發生.....482

心的飽和.....483

意志目標の定立.....485

價值と價值意識.....488

興味及びその發達.....491

意圖行爲と實現運動.....493

動機の意味.....493

意圖動作の實現.....494

一義的動作の實現.....495

補充動作.....495

意志動作の形式.....496

61
21

簡單動作形式、選擇動作形式、包括的意志動作の形式.....497

意志の自動化.....501

反應時間と意志研究.....502

 反應時間.....502

 反應の態度と簡單反應時間の種別.....505

 各種の條件と簡單反應時間.....506

 反應時間を基礎とした意志研究.....509

作 業.....517

 作業の意義.....517

 作業線.....519

 作業線に及ぼす諸要因.....520

 クレペリンの作業の消長を規定する内的諸要因.....522

 作業線と疲勞.....526

 疲勞曲線の進路.....527

 作業線と練習.....531

 練習曲線.....534

 練習曲線の型式.....536

 練習の波及.....536

第七章 思 考 論

思考一般.....538

思考の意味.....538

課題の定立.....539

課題の即事的規定性.....541

要求水準.....541

方法的意識.....543

分節化過程.....543

洞察又は見透し.....544

思考場面の情勢.....545

課題の解決.....546

緊張體系としての思考.....546

思考に於ける作用と内容の吟味.....546

 作用と内容.....546

 思考過程の内容.....547

 思考過程の作用.....548

 思考過程に於ける加工過程.....253

思考過程.....557

 思考過程の秩序化の要因の問題.....557

 思考過程と解決の方法.....563

 思考過程と成程の體驗.....569

 生産的思考.....571

61
21

思考過程と想像574

 抽象的思考と想像的思考574

 想像577

 想像の特色580

 発見の心理581

思考心理學の問題の移動に就て585

 思考の本質と様式585

 傳統論理學に於ける思考586

 心理的認識論的問題としての聯合説587

 思考心理學の問題588

第八章 個性及び性格論

個性一般589

 個性の意義589

 個性の形成591

 自我水準の體統592

 自我水準594

 自覺的自我意識595

個性の研究596

 個性の二つの研究596

 概括化的方法一般597

(品等法、テスト法、プロフィール法)599

特質化的方法一般618

(I) 個人の特質づけを意圖する方法619

 (一)人相學、骨相學、筆跡學等619

 (二)精神分析法619

 (三)類型學的方法620

(II) 心理的生物的全場面の特質化の研究623

 一定場面の個人の特質化の意味623

 理象的研究と力系的研究625

 力系的情勢の科學的表現としてのトポロジー626

 トポロジー表現の實例630

 心理的生物的全場面の特質化の主要な方法634

 (A)位相觀察法 (B)自然考想實驗法 (C)探索考想實驗法

 (D)臨界實驗法 (E)繼續的作業場面の實驗 (F)作品による個性研究634

性 格644

 性格の意義644

 主なる性格概念645

 倫理的價值的意味の性格646

 素質としての性格647

 反應様式の類型としての性格650

 人格成分の有機的構造としての性格652

61
21

個性の發達の力系的法則としての性格.....653

性格についての諸問題.....654

性格と一般法則との關係.....654

性格の生成、性格の成熟.....656

性格の改造及び變革.....657

第九章 表現論 ✓

表現一般.....659

表現の意味.....659

狹義の表現運動.....660

表現としての言語.....662

言語.....662

言語としての表現.....662

意味.....663

機關としての言語的表現の三つの側面.....665

(A) 思想の表現としての言語.....665

(B) 社會的制約としての言語.....666

(C) 生活、個性、人世觀、世界觀の表現としての言語.....667

言語的表現の理解.....668

✓ 言語の發生.....671

種々なる言語.....671

身振語.....673

✓ 音聲語.....676

繪言語.....676

書言語.....679

語の構成.....680

兒童と言語.....683

兒童語の四つの研究.....689

遊戯と創作.....693

遊戯の意味.....693

幼兒の遊戯.....696

創作及び創作の意識.....697

幼兒に於ける作品及び作品意識の發展.....698

藝術と鑑賞.....700

緊張體系の理論と各種の藝術.....700

表現としての藝術の理解.....700

鑑賞一般.....701

第三編 結 論

第一章 常態と變態

61
23

心的體制の緊張と解消.....705

常態と變態.....706

主要なる變態.....707

夢.....710

準意識、自動書記、二重人格その他.....711

催眠現象.....713

第二章 社會と個人

個人の社會性.....719

社會を場とする個人の緊張體系.....721

表現と傳達.....722

類似反應、模倣、暗示、言語的傳達、命令.....723

第三章 法則と豫見 理論と應用

心的體制の力系化と定常化.....728

法則と豫見.....732

心理學的認識.....734

理論と應用.....735

索引

~~~~~ 目次 終 ~~~~~



第五章 感情情緒論

The theory of feeling and emotion;

Die Gefühl-und Affektlehre.

感情情緒の一般的意義

衝動意識 (Impulsive Consciousness; Das Triebbewußtsein)

吾々の精神生活の根柢には、缺乏意識——中性意識——満足意識を含む一列の經驗が横はつてゐる。これ先に吾々が衝動論に於て論じた衝動の發展に伴ふて起る意識状態であつて、これを衝動意識と名づけることが出来る。即ち生活體は、その生活機能の普通の活動によつて、若しくは、その變態的活動によつて内部的不均衡状態が生ずると、必然的に、相對的均衡状態へ導かうとして種々の活動を營むものであるが、かゝる場合に於て生活體は個體内部若しくは環境の變化に相應じて一種の主觀的態度を生じ、従つて態度についての意識を生ずる。これ所謂衝動意識に外ならない。然るに衝動意識と稱する經驗は、その生活體の精神生活の發展の程度に應じて種々の高度の分化を生ずる。それ故、吾々は特に、かゝる高度の發展をも豫想して、衝動意識に該當する經驗を感情情緒經驗と名づける。

感情情緒經驗

————— 書 入 欄 —————



感情情緒經驗は個體全體の主觀的態度及び、その態度の經驗で、その個體の心的體制の一部に變化があると、必ずや、その心的體制全體に反應し、個體全體としての主觀的狀態として表現する。それ故知覺や表象等の經驗を若し、外層的經驗であると考へると、感情情緒的經驗は、より中樞的經驗であつて自我の状態として經驗せられる。自我の状態として經驗せられ、全有機體の作用として起るから或は知覺と結合し、表象と結合し、若しくは、その他一切の經驗と結合して、それらを色どり、生活の溫みを與へるのが常である。蓋し、感情的經驗はその他の經驗に比してより、生活の溫みを有ち、意欲に關係し、有機體全體の利害に關係するところが多い。

## 【註】

從來、心理學上、屢々、知(或事を知り考へる、Knowing; Cognition)、情(それが快であるか、不快であるか、Feeling; Affection)、意又は意向(或事へと努力する Striving; Conation)の三部に分けて所謂、知情意の三分法に従つて、精神生活を叙述する傳統がある。この三方面は、いふまでもなく精神生活の重要な方面ではあるが併しこれら三方面を全く獨立分離し得るが如く考へることは謬見も甚しい。純粹なる知、純粹なる情、純粹なる意といふ様なものが存在し得ないことは、恰も、廣りを有たぬ線が無いのと同様である。この種の謬見は誤つた能力心理學の遺物であつて、明ある心理學者の採らぬところである。

## 感情情緒的經驗の相互の關係

感情情緒的經驗は、特に當該心的體制の状態に關係するところが大きいから、個々の場合に就て論じなければならぬが、こゝでは比較的一般の場合に就て述べて置かうと思ふ。

## A. 對比の法則 (Law of Contrast; Das Kontrastgesetz)

[或感情は、より不快なものと對比せられると、益々快となり、これに反して、不快感情は、快と對照せられると益々、不快となる傾向がある。]

例へば、暴風雨いよいよ狂ひ、雷電、激しい夜、氣持ち良い部屋に安坐すると、益々、快は高まり、これに反して、静かな部屋から出て、急に、暴風雨に遭うと、不快この上もない、これと同様に、病後の健康恢復は極めて氣持ち良く、饑餓の後の一杯の食は極めて美味であることが多い。

この法則は、當該個人の心的體制の具合を考慮しないと一般的にはいへないが、大體の傾向から、次の二つの理論を誘導することが出来る。

(a<sub>1</sub>) 殆んど同様なものを順次に見せる場合、快でないものから快であるものに順次に進む方が、その結果として、快を増す傾向がある。

例へば、子供に贈物をする場合、最初から満足する様な、大きな物から與へるよりも、その逆の方が、成功する場合が多い。

(a<sub>2</sub>) 快のものと、不快のものとを交互に與へる場合、一般的に、その方向が快に向つた場合、快が大となる。

B. 若し、同時に種々の感情が起る可能性がある場合、優勢なもので全體を支配せられ、その調子を帯びる傾向がある。



自分が非常な不幸に陥ると、この時の感情はその調子で色どられ、歯痛があつたり、何か癢に障つたりした場合、何を見ても面白く思へない。

C. 各種の感情が、一つの全體感情を作つて、その中に色々の成分があることがある。

例へば子供心に、人の群、大鼓の音、祭禮等の全體の氣分が御祭として、嬉しく感ぜられるが如きこの一例である。

#### 表象と感情との一般的關係

凡そ、表象は、そこに何等かの感情的調子を帯び、或はそれが、時に快と感ぜられ、不快となり、或は、美しく、醜く感ぜられ、更に、複雑な感情情緒經驗では、その中に必ずや、何等かの表象の流れが加はり、それを色どつて多様な姿を呈するのが常である。

一般的に、快の感情情緒が表現すると表象は豊富となる傾向があるが、これに反して、不快な感情情緒經驗の場合には、往々、表象が貧弱となる傾向がある。例へば愉快な過去の經驗に伴ふて啓發せられる感情情緒經驗の場合に於ては、表象は無限となり、従つて、その人は多辯となり能辯となる傾向があるが、不快の場合には無口となることが多い。これと同様な變態的の場合は飲酒の場合に就て屢々經驗せられるところである。例へば、アルコールによつて、最初、想像活動が無限に昂まるが、後になると、麻痺して不快となり陰氣となり表象が停滯せられる。

斯く、表象と感情情緒經驗とは密接の關係を有ち、共に吾々の精神生活の一面を織り成してゐるが、時に、表象的經驗が主となつてこれに附隨的に感情が經驗せられ、時に、全體的感情的調子の中から、次第に表象が具現せられる。例へば、過去に經驗した事を回想する場合、仲々、具體的姿は最初に浮ばないことがあるが、一種の親しさの感情があらはれ、次第に明瞭なる姿として分化することが尠くはない。

さて、感情は表象と結合し、或は分離するが、吾々の經驗する感情に於て、それを起す對象物が可なり、移動することがある。これ感情的經驗も、その當該場面の經驗であつて、その個體の内面的構成と環境的情勢との内面的即事的經驗に外ならないことを示してゐる。例へば、自分が書齋に坐して、讀書してゐる場合、何となく戸外が騒然として、落ちつかないときには、全くやりきれないと嘆じ物みな不快の種となり、一切の物が憎らしく感ぜられるが、突然吉報があるか、但し又、急に新しい思付きをする様なことがあると、凡てが快に轉換することがある。この場合、自己の書齋やその周圍は、昔ながらであつても、感情の移動が起る。

特殊の精神病殊に粘着性精神病 (Haft-Psychosen) にあつては、過去に於て激動を受けた事變が、特定の機會に回想せられ、不意に感情が横溢する姿を表はすことがある。この場合、外見上、恰も感情が移動したかの様ではあるが、事實上起る筈でない感情が、後



になつて再び、出現するのであるから、普通の場合に比べると一種の矛盾を含んでゐるとも見る事が出来るから、特に**矛盾的轉置** (Paradoxical dislocation; Die Paradoxe Verschiebung) と呼ぶことがある。

例へば、或犯罪をしたことのある精神病者が最早や自己の犯行一切を忘れてゐるのに、診察室につれ出され、何かの機會に自己の犯罪について回想を起し、強い病的發作を起す様なことも稀ではない。又ヒステリー患者が嘗て、自分の爲すべき責務を怠り、これを非常に氣に病み、或は頭痛を覚え、身體の各所に變化を感じ強い感情状態が起つたことがあると、後になつて、この事件を回想するだけで、それらの頭痛その他の變化が再現することが尠くはない。これらの事例を通じて考へて見ると、感情情緒的經驗が如何に有機體全體の體制の反應に關係するかが分る。

#### 感情情緒的經驗の區分

感情情緒的經驗はその様相多様であるが、その根柢は衝動體制の性質に基いてゐるから、或は、生活體の成長繁殖的生活の維持に關係して起り、或はその個體の防禦に關係し、時に、理想的價值への具體化に關係して起るのを常とする。(第一章衝動論參照)

例へば、身體器官の何處かの部分に變態があるときの一種の不快の感じ、苦痛の感じ等比較的部分的の感じは一種の感情的性質を有つてゐる。眼に美しさを感じ耳に心持良きを感じずる場合もこの類である、これ一般に**感性感情** (sense-feeling; Das sinnliche Gefühl) と

稱せられる。

然るに生活體が全體として危險に遭遇した場合、若しくは、それから逃れ得た場合を考へて見ると、その個體全體として、有機的身體的變化が顯著となり、心臟の變態、血行組織の變化、胸苦しさ、呼吸や脈搏の變化があらはれ易い、受動的防禦としての心配、能動的防禦としての憤怒、等の不快的基調を有つものから、危險から逃れた場合の自己昂揚の感情即ち快の基調を有つものまで、この中には色々の經驗が含まれてゐる。

更に進んで考へて見ると理想的價值の具體化に關係して快、不快を基調とする一種の感情的經驗がある。即ち、自己の生活や自己の價值は出来る限り高く評價せんとし、自己が有つ理想はこれを同朋へ分ち與へんとし、一定の規準を認識しようとするのは人間の常である。この種の憧憬が具現されると所謂知的の喜びがあらはれる。

さて、これらの感情情緒的經驗を、その主調に従つて、色々に區分し、これに種々の名稱が與へられる。

若し、これらの經驗を、その基本的特質たる主觀的自我的側面の經驗として見ると、これを感情 (Feeling; Das Gefühl) と呼び、快、不快の兩極を中心として考へられる。然るに主として、身體的有機的變化を多分に含み、本能的機制に密接に關係してると考へられるものを、特に、**情緒** (Emotion; Der Affekt) として區別する。怒り、悲しみ、喜び、の如きこの類である。一般に個體全體として危險な



るか、若しくは、これを脱した場合には色々の形をとつて表はれ易い。従つて、情緒は意識の突然の障害に基く場合が多く、各の情緒は始めは、驚嘆に發する場合が主である。即ち、餘り大なる刺激には反應が起らぬが、この不快な状態に打ち勝つと、快調のものと不快調のものに分れるのが常である。

感情情緒經驗にも、これが一度起ると、何等かの意味に於て、保存の傾向があると考へねばならぬ。そこで、感情情緒の經驗の流れが比較的弱く且つ永續的であると、人々は、特に、これを情趣(気分; Mood; Die Stimmung)と呼んでゐる。換言すると、情趣は自我の全状態であつて、保存的感情によつて、一つの統一的な、而も比較的弱い根本基調を成すところの感情であるといふことが出来る。

従つて、或經驗は時に情趣から始まつて、情緒として終ることがあると、共に、逆に、情緒から始まつて情趣として終り、又、屢々情趣の波を形成してゐることがある。

吾々が、次に生活感情とか一般感情とか稱するものゝ根本の調子は情趣であるといはなければならぬ。

かく吾々は感情情緒的經驗の區分をなすことが出来るが、もとより、この區分たるや、相對的、程度的のものであつて、比較的、より、何れに歸屬せしめる方が、適切であるかといふに過ぎない。それ故、吾々は、便宜上、情緒と比較的と呼ばれ得る經驗を中心として述べ、更に、再び、感情といふ名稱に於て包括せられ得る場合

について述べようと思ふ。蓋し情緒的經驗は、比較的原始的形相をも示してゐると考へられるからである。

### 情緒 (Emotion; Der Affekt) 及び情緒的經驗 (Emotional experience; Das Affekterlebnis)

#### 情緒の意味

情緒は生活體の欲求満足過程の程度の記號にも匹敵せられるものであつて、人によつては、これを未解決の衝動複合を含むものと考へられてゐる。従つて、主觀的には態度の意識であるが、客觀的には態度として其處に表現せられる諸變化をも含めて、名づけられる。

吾々が一定の環境に置かれると、特定の身構へ、若しくは態度をするのが自然である。人々の冷笑する場面に置かれると怒る態度をとり、涯しない暗黒の夜道を一人で、旅するときは、時折、戦慄する態度となることがある。この場合、怒も戦慄も、それぞれの態度についての意識であつて、態度それ自體は、そのときの表現であるが、吾々が情緒といふときは、この場合の意識と態度とを含めて名づける。一般的には、これらのものは、一定の場面に直面して即事的に起る意識の突然の障害に基く場合が多い。

吾々が先に衝動論に於て述べた様に心的體制は現在の比較的不均衡若しくは不安定な状態から、相對的に、より均衡な、より安定な状態に向ふことを原則とするから、多少の平均状態が維持せられる



場合、これが破壊せられる怖れある場合、事實、破壊せられた場合若しくは均衡が回復せられた場合等に於て、それぞれの場合に相應して、主觀的態度が表はれ、それに相應する意識的經驗があることは、何人も知るところである。

吾々は、情緒に就て、特に、次の諸點を注意する。

a. 情緒的經驗は本能的機制に密接の關係を有つてゐる。

情緒が衝動的本能的體制に密接に結合し、衝動意識と稱せられるものは概して情緒の未分化なるものに外ならない。米國の行動主義の主張者ワトソン (T. B. Watson) の如きは情緒を本能的反應とし、特に、内臟本能 (Visceral Instinct) の名稱を與へ、怒、恐怖の如きは、よく、これを代表すると考へてゐる。後に述べるジェームス・ランゲ説 (James-Lange theory of Emotion; Die James-Langesche Theorie der Affekte) はもとより、シュナイデル (Schneider) 及びマクデュガル (McDougal) の如き情緒の本能的性質を強調してゐる。(第一章衝動論參照)

b. 情緒は、その主成分として身體的有機的變化を含んでゐる。

吾々が一定の場面で一定の態度をとる場合、それは、必ずしも靜止的ではなくて、一定の力系的變化を含んでゐる、時間的ゲシュタルトである。そして、そこには身體的變化のみならず、血行變化、呼吸變化、脈搏變化、分泌組織の變化等が表はれてゐるのが常である。

c. 情緒的經驗は、比較的短い繼續のもの、やゝ長い繼續のもの等、様々であるが、何れにしても一定の時間的ゲシュタルトをとる。

d. 情緒には、その運動性について種々の程度がある。

原始的な、未分化な情緒は運動性を多分に包含し、運動的要素が少くなるにつれて情緒の構成が強固になる傾向がある。

自然民族、兒童等に於ける情緒の表現を、文化民族、成人の場合に比較して見るとこの間の消息が分り易い。例へば、マレネシア人 (Malenesianer) は、羞恥のことを「額が私を咬む」(Die Stirne beisst mich) と表現し、南洋サルモンシンスラ族 (Die

Salmonsinsulaner) は同様に羞恥を「心臓が身體の中で回轉する」(Sich einem das Herz im Leibe umdrehe.) と表現してゐる。

これらに見られる様に運動的要素が多分に含まれ従つて、情緒的構成が強固でないが、文化民族、殊に成人になると多少、運動的性質が減少する傾向がある。

e. 情緒の分化についても色々の程度がある。

未分化の情緒は多義、複雑であつて、尙且つ不定であるのを常とする。

精神分析派の學者は情緒に未分化の性質があつて一義的でなく、同一事物を同時に (若しくは交互に)、憎み、且つ愛することが出来るとし、これを兩向性 (多價性、Ambivalenz) と呼んでゐる。子供、精神病者、自然民族、等にあつては、情緒が未分化であつて明瞭な形態をとらず、反對性質の情緒が一つの情緒の中に統一せられ例へば反感と同情との二つが明確には分離してないことがある。

この段階に於ては知覺にも極めて情緒的性質が濃厚であつて、情緒が對象を形態化す主要因となり、主と客との分離がなく、従つて對象的と狀態的との分化もなく、事物の相貌即ち面相によつて事物を認知する。物の面相によつて事物を認知する場合、事物其物の性質を客觀的に認識するといふよりも主觀的のものが主調となつてゐる。例へば矢の形を見て、荒い性質あるもの、突くものとの印象を得るが如き、-----の如きを單に線の切れたものと見ないで、物が折れた状態と見るのはこの一例である。

これを人々は名づけて觀相的認識 (Die Physiognomische Erkenntnis) といふことがある。

【註】

「觀相的認識は世にいふ擬人觀 (Anthropomorphism) と同じではない。擬人は事物



を人間化して見るものであつて、この場合、主と客との分離が確然としてゐるのが常であるが、観相的認識では主と客との分離が必ずしも豫想されない、むしろ、その融合の境地から行はれるところに特色がある。』

知覚と同様に表象も亦、未分化な状態では情緒的色彩をもつて表現する。

即ち、未分化の経験にあつては全體が不联接であつて、同質的であり、各部分が平均的に平等的意味を有ち、本質的なものと偶有的なものと分れず、全體の経験が輪廓なく、上位下位の序列なく、一般に、中心化せられてゐない。従つて、或一つの経験があらはれると、それに伴ふ全體の経験があらはれ、全體の一部が破壊せられると全體が破壊せられるやうになる。

この事實を示すものは自然民族又は兒童に於て、或歌を歌ふ場合に経験せられる。例へば、或歌を中途から讀むことは極めて困難であつて、中途から歌はせると全體が破壊せられ、これをよく歌はんとする場合、常に最初から始めなければならぬのは吾々の屢々見聞するところである。これに類する反應は下等動物にも屢々、観察せられるが、こゝに有名な一例を述べる。

砂蜂の一種に穴を作つて生活し、獲物をその針で刺し、穴の中に持ち込むが、その前に穴の中に變化はないかを必ず調査する習性を有つ動物がある。

ファール(Fabre)は、かゝる砂蜂(Sandwespe)に就て興味ある實

験を行つてゐる、即ち彼は、砂蜂が未だ穴の中に居残つてゐる間に穴の入口の側に獲物を置いて見た、さうすると蜂が穴から出てくると直ぐ獲物を見つけ、これを、すぐ穴の入口の所へ運び、穴の中へは運び込まないで單身、今、調査して來た筈の穴の中を一度、丁寧に調査し始める。その留守中、獲物を又、最初の位置へ置いて観察すると、不幸なる蜂は、同じ様に穴から出て獲物を見つけると穴の入口まで運んでそこに放擲しては、穴の中の調査を始める。ファールの實驗では、かく同様の動作を反覆すること實に四拾回であつたいふ。

この種の動作を見るに、これらの動物にあつては、行動全體が一つの意味ある全體を成してゐる。そして少し變化しても全體の意味が異つてくる。而も本能的に行動の経過形式が固定し、そこに全體的反應が存するのみであつて、どこかの部分が破壊せられると、全體が無意味となる。かく全體的反應のみ存し得るか、若しくは全體の反應が破壊せられ無意味となるやうな反應を時に、全體又は皆無反應 (All or None-reaction; Alles oder Nichts-Reaktion) といふ。

これ本能的に既に固定してゐる場合の一つの反應形式であるが、人間の精神生活には他面、融通性又は可塑性 (Plasticity; Die Plastizität) があつて、未分化、同質、不联接なものから漸次に分化し、異質化し、重大なるものと、然らざるもの、本質的なものと偶有的なものととの分化を生じ、中心化を産み、一面に知覚、表象



思考等の明かなゲシュタルトを生ずると共に、他面には情緒的経験も亦、非本質的なものを、本質的なものの下位関係に立たしめる様になり、吾々文化人に表現するやうな喜、怒、悲、心配等の比較的明瞭な形相を示すやうになる。が併し、情緒的経験はその他の経験に比し、主観的性質を多分に有つから、分化しても尚ほ全體的経験としての性質を失はない。

- f. 一般に、情緒が表はれると、それに関する知覚乃至表象等が一時その個人の意識状態を占め、諸他の内容は、壓迫せられるのが常である。例へば怒つた人には、他人の説明することは、ともすると分り難い、その人は直接、怒を起した事柄に支配せられる。
- g. 情緒はその表出 (Expression; Ausdruck) に關係して、二つの主要な方向を有つてゐる。一は禁止 (Inhibition; Hemmung) 又は抑壓の方向であつて、他は、興奮 (Exciting; Erregung) の方向である。

以上、説明したところから、大凡、情緒は如何なるものかといふことは理解せられ得るやうに思ふ。この経験を簡単な言葉で定義することは困難であるが、試みに、情緒とは欲求満足過程の程度を示す記號であつて、主観的には態度の意識であり、客観的には、態度として表現せられる諸變化を含み、従つて、身體的有機的諸變化を主成分とする複雑なる時間的経過の流れとして定義することが出来る。又尚ほ一層、簡單には、情緒とは、身體の本能機制の發相に密接に關係し、身體的有機的變化を主成分とする時間的流れであるといふことも出来るであらう。

そして、情緒が、殊に、強烈となつて表現するときは、これを時に、情熱 (Passion; Die Leidenschaft) といひ、弱くかつ、永續的性質をもつときは前述した通り、情趣である。

## 【註】

「情熱といふ語には然し二つの意味が區別せられる。(1) は強烈なる情緒といふ意味であるが。(2) は意志的習慣中、特に意志の満足、不満足に限り、一定の情緒として高まる感情を伴ふものをいふ。これ情熱といふ語を習慣的素質として考へる場合である。」

ジェームス・ランゲ説 (James Lange theory of Emotion; Die James-Langesche Theorie der Affekte.)

先に述べたやうに、情緒は身體的發相に密接に關係することは事實であつて、それを成分としてゐることは明かであるが、身體的有機的變化を直ちに、情緒それ自身の原因であるとは斷定し難い。然るに、かく、身體的發相を情緒それ自身の根源であると主唱しようとする學説が現はれてゐる。これ、その極端なる思想の一つとして有名であるジェームス・ランゲ説である。

1884年 ウィリアム・ジェームス (William James 1842—1910) は、情緒の發相である身體運動を情緒の根源と考へた。即ち、彼によれば、吾々には、情緒刺激に對する神経系統の生得的又は反射的調整があつて、これらの調整は自動的に、内臓及び骨路筋變化を主とする身體的變化を起し、これらの變化のあるものは吾々に感ぜられる。この知覚が情緒に外ならないとする。従つて情緒は身體的有機的變化



の合成物として表はれるにすぎない。ジェームスの考へによると吾々にある遺傳的な反射機制は恰も共鳴器のやうに、如何なる微小變化にも共鳴するから、外界變化は直ちに身體變化に共鳴する、この身體變化の合成物が情緒であつて、これ以外に情緒を構成する成分はないと主唱した。

吾々の常識上の考へでは、外界刺激に直面すると主觀的變化が起ると同時に又は後から身體的有機的變化があると考へられるが、ジェームスの考へでは先づ身體的變化があらはれ、これ情緒の根源であつてそれは必然的にその變化の知覺引ては刺激の知覺を伴ふとする。極端にいふと、悲しいから泣くのではなくて、泣くから悲しいともいへる。1885 ジェームスと全く獨立に研究して、全く符合した結果を發表したのはコペンハーゲン (Copenhagen) のカール・ランゲ (Carl Lange) である。

ランゲは(一)一定の藥品、例へば、アルコールや阿片を用ふると例へば、身體的有機的變化が高まつて喜びの情緒を起し得ることに着眼し、(二)病的障害殊に一定の血行組織の病的障害の患者に於て一定の病的情緒(例へば憤怒)が昂進する場合があることに注意し、これらの事實を根據として、身體變化殊に血行組織の變化をもつて情緒の原因と考へるに至つた。即ち、ランゲによると情緒運動の起るには二個の要因により、二個の要因は相互に依存的關係にあるとする。

二個の要因とは、(一)は原因としての感官印象であつて、(二)は結果としての反射的に起る血行變化及び、それに伴ふ身體的有機的諸變化である。

そして、多くの情緒、例へば喜び、悲しみ等の主要なる根源は結果としての血行組織の變化にあるが、外界印象が來なければ無記 (Indifferent; Dispassionate) である。そして若し外界印象があつても、これが作用する血行變化等がなければ又、情緒は起り得ない。

ランゲの考へ方は、かく、ジェームスほど極端ではないが大體に於て、その主張は大同小異と見ることが出来るから人々はこれを名づけて、ジェームス・ランゲ説といつてゐる。ジェームスは1890年ランゲ説をとり、これを叙述した。

#### ジェームス・ランゲ説の批判

ジェームス・ランゲ説は身體的有機的變化を餘りに強調した極端な學説であるから、この學説が出ると共に、數多くの批評が學界を賑やかしたが、吾々は今、吾々の立場から、その長短を批判して吾々の考へ方を進める便宜に供しようと思ふ。

#### 第一、ジェームス・ランゲ説の短所

A. ジェームス・ランゲ説殊にジェームスの掲げた身體的發相は種々異なる情緒に於て同一の場合がある。従つて情緒が種々異なるが如く身體的發相は種々でない場合がある。

涙が出る場合にも、(1)喜ばしくて、(2)怒つた餘り、そして又



(3)悲しくて、出る場合があり、震へる場合にも、(1)寒くて震へる場合、(2)恐ろしくて震へる場合、(3)熱心の餘り震へることもあらう。

B. ジェームスは有機的變化を餘りに重く見てゐる。

即ちジェームスは精神を意識的名辭で解釋し、有機的變化をその原因と見ようとする。情緒的經驗を見るに當つても同様であるが、元來、情緒的經驗は精神物理的事變であつて、有機的變化だけでもなく又、意識的經驗だけでもない筈である。

C. ジェームス・ランゲ説では、情緒の成分をなす運動（血行組織變化分泌變化等）と、情緒の除去運動、情緒誘導運動との間の區別を立てず、すべてみな、情緒の構成又は成分の運動と見て立説されてゐる。

然るに缺乏の情緒があると、それを満足さす運動が起るが如き、痛のときの涙の如き、怒れるとき拳を握るが如き運動は情緒の成分の運動とは多少の區別がある。

D. 或有機的變化は情緒の主成分であつて、時に、内部の情緒と外部の動作との間に類似性はあるが、何時もこれが一致するとは限らない。然るにジェームス・ランゲ説は、これを同一と見て立説してゐる。

この外、情緒は實驗的研究に於て、先づ情緒現はれて、身體的變化これに次ぎ、この間に時間的間隔があるとして、ジェームス・ラ

ンゲ説を否定せられることがあるが、身體的變化を若し、分泌變化、血行組織の變化等の情緒の成分運動に限り、單なる外部運動と區別すると、この論難は必ずしも當らない。

ジェームスの學説が出て、論難、屢々起るに至り、ジェームス自ら自説を變容するに至り、1894年これを公にした。

その要點は次の二點に要約せられる。

(1) 情緒を起す際に現はれる表象や知覺に感情的調子があることを認め、従つて、表象や知覺に一次的感應があることを許したから、情緒を説くに當つて、身體的變化だけを主とせざるやうになつた。

(2) 情緒の起因となり、源泉となる表象や知覺は單獨物體に關係して起るのみならず、その物體の存在する全體の環境に關係すると考へるやうになつてきた。

例へば最初、或物體は反射的本能的運動を起すものであるが、經驗が進むにつれて、その物體は全體の環境の一部として作用し、そのために、全體環境の中にある他の要因の影響を蒙り、最初とは全く異つた運動をするやうになることを認める。

この考へ方をもつてすれば、既に生得的に定る神經組織による運動が二次的に經驗的に複雑化されることがあつて、この二次的に複雑化されたものも亦情緒の中に包含せられ、最初の共鳴説の考へ方は全く影を潜めるに至つてゐる。



この二点を許容すると、**ジェームス説**は、有機感覚以外に情緒を認め、身體的發相以外に情緒其物を認めざるを得ない破目に陥ることは明かである。

**ジェームス・ランゲ説**は新奇の如くではあるがこれに類する思想は古來尠くはない。殊に、**カール・ランゲ**の血行運動説の先驅として考へられる **ニコール・マールブランシエ** (Nicole Malbranche (1638—1675)) はその代表的なるものであつて、情緒の一内容として有機感覚を考へたのは古くは **アリストテレス** (Aristoteles) 近代では **デカルト** (Descartes) **スピノザ** (Spinoza) を始めとして、**モーズレイ** (Maudsley) **ロッチエ** (Lotze) 等、數多い。19世紀の初頭解剖學者 **アンレ** (Henle) は情緒を定義して、情緒とは身體變化に伴ふて起る觀念であつて、筋肉組織の感覺又は氣分として意識に表はれる變化であるといつてゐる。

かく先驅者はあるが、その最も極端なる形として現はれたのは **ジェームス・ランゲ説**であつて、この意味に於て、**ジェームス・ランゲ説**の前に **ジェームス・ランゲ説**はないといつてもよからう。

## 第二、ジェームス・ランゲ説の効果

A. **ジェームス・ランゲ説**は情緒的體驗の主成分として、有機感覚を着眼せしめた。吾々の情緒意識 (Emotive Consciousness; Das Affektbewusstsein) は到底、有機感覚の成分なしには充分良く、これを理解することが出来ない、若し、有機感覺的又は運動的

成分を除いて考へると、情緒其物を、極めて抽象的に考へることになる場合が多い。

そこで、情緒意識を示すに有機的運動感覺の言葉をもつてすると比較的明瞭な場合がある。

例へば、「心配に壓倒せられる」「惡運に粉碎せられる」「悲しみで心臓が張り裂ける」といふが如き、若しくは、怒りの狀を示すに、息がとまり首を締められたときに表はれる有機感覺で示し悲哀の狀は重い物を持ち上げたときに表はれる有機感覺で示すが如きこの一例である。

かく **ジェームス・ランゲ説**で強調する有機感覺は近年、可なり着目せられ、藥品と有機感覺殊に血行組織變化、分泌の變化との關係、乃至は分泌と情緒乃至性格との關係は興味ある研究領域を構成するに至つてゐる。

勿論これらの領域に於ける研究は **ジェームス・ランゲ説**には直接の關係はないが、この學説が、有機感覺を重要視する端緒となつたことは忘れられない事實である。

## 【註】

「英國の生理學者 **シエリングトン** (Sherrington) は犬の情緒實驗をなし、ロシアの生理學者 **パヴロフ** (Pavlov) は犬について唾液分泌の條件反射の研究をなし、**スタイナハ** (Steinach) は月經期分泌の研究で有名であり、近年(1920年) **キャノン** (W. B. Cannon) は **ハーバード** (Harvard) 大學に於て苦痛、饑餓、恐怖及び憤怒の場合の身體變化を研究し怒り及び恐怖に於て **アドレナル腺** (Adrenal glands) が興奮



せられ、アドレナリン (Adrenalin) が直接血液中に分泌せられることを研究した。この外、甲状腺分泌、松葉腺分泌等の内分泌の研究は殊に近頃盛んである。」

**B. ジェームス・ランゲ説は、情緒の本能的性質を強調したことは又忘れられない點である。**

**マクデュガル (Macdougall) ワトソン (Watson) 等を始め近年この方面を強調する學者は尠くない。**

#### 代表的情緒の考察

さて、情緒が如何なるものかを、もつと知らうとするには、從來の不完全な情緒の分類を擧げて、それによつて考へても仕方がない。それよりも、もつと賢明と思はれる方法は、比較的代表的と思はれる情緒を選択して考へて見ることであらう。

#### A. 喜びと悲しみの心理

喜びは、望ましい事柄が思ひがけなく達せられたときの普通の状態であつて、その徴候として顔面及び、全身の緊張状態が一時上昇するのが常である。一口に、吾々が喜びといつても、この中には色々の経験を區別することが出来る。(a) 壯快である状態、例へば、心持ち良い、スツキリしてゐる、愉快だ、全體として沈靜的の喜びの如きもの。(b) 幸福である情緒状態、即ち、可なり強烈な愉快の状態であつて、軽い興奮があり、かつ、表象の豊富な状態である。この情緒に自らを委ねると酩酊的の氣持となる。(c) 靈喜する態度即ち、喜び溢れて手の舞ひ、足の置く所を知らぬ状態である。(d)

母としての喜びである。我子に對する喜び、やさしさの喜び、子供の將來の喜びはこの類である。(e) 喜ばしい期待である。

かゝる喜びの頂點は、興奮又は酩酊的であつて、主觀的の感じとしては生命の高潮した状態として感ぜられる。そして、その極地は大歡喜の状態である。古來多くの民族は、かゝる状態を求めんとして種々の努力を拂つてゐるやうである。例へば、各種の民族が種々の形式の民族祭を行ひ、飲み歌ひ、舞ふのは、何等かの意味に於て有頂天の状態への思慕に關係してゐるといはなければならぬ。

喜びと、やゝ其の趣きを異にするものに驚愕がある。これは吾々が直ちに、反應することが出来ないやうな急な、豫期しない境遇が現はれたときの反應であつて、協調的の運動を行ふことが出来ないから、身體的有機的の動亂状態を呈するのである。デュマ (Dumas) によると、驚愕は筋肉の興奮の禁止であつて、殊に、眼の球状筋の禁止であるといつてゐる。

悲しみ及び、それに類する經驗は、喜びの反對であつて、喜びが緊張的であるのに反して、一般的に弛緩の状態である。即ち筋肉の興奮の禁止が、とり去られた状態である。

何れにしても、その個體の全精神生活の平均状態に密接に關係し何れも不平均状態を出發點としてゐるが、喜びはそれが恢復せられんとするか、又は、やゝ恢復せられたときの状態に當るが、悲しみは、不平均状態そのものに關係する。これら二つの系列に屬する經



験が、吾々の日常生活に於て、可なり多種多様であることは何人も知る通りである。

悲しみにも色々の形式がある。(a) 憂鬱性。例へば、重ぐるしく緊張しない状態で、尠しく不快味を帯び、沈静の度が強い。(b) 氣嫌が悪い程度の悲しみ。(c) 氣嫌が悪い程度が増して怒を交へた悲しみ。(d) 痛の悲哀。(e) 嫌悪を加味した悲しみである。

#### B. 恐怖の心理

恐怖といふも、その範圍は可なり廣い。戦慄、恐怖、心配、不安イライラする等の經驗は、みな、この系列に入れることが出来る。

一般に、物質的に、若しくは、精神的に不安定であつて、これから脱し難いときにはこの種の情緒的經驗が起るものであつて、それを經驗する個體は、その場面から逃げようとするのが普通である。即ち、その場面に對して消極的反應(一)をする。吾々が幼兒に恐怖を起さしめようとする場合、色々の方法を用ふることが出来るが、若し(1)幼兒の周圍で高聲を發するか、(2)幼兒の支へを不安定にするかによつて當該幼兒を不安動搖の状態に導くときは、恐怖又はそれに類する動作が屢々見られる。ワトソン (J. B. Watson) は好んで、この種の方法を用ひた。マクデュガル (McDougall) も恐怖は逃走の本能に對應してゐると説いてゐるが、動物でも身體的に又は精神的に不安定のときは好んで逃走する。が併し、よくこれを見ると、動物は、二つの方向の反應をする様である。(一)は、自分を隠

蔽し、隠れる場合であつて、(二)は、逃走する場合である。

それ故、恐怖は危険、不安を逃れんとして脱走し得難い状態と結合するものであつて、或災害豫期に當つての精神状態の低下した状態であらう。

マクデュガル (McDougall) の説明するところによると動物が恐怖に當つて自ら隠蔽する場合は人間に於ては恐怖の餘り心臓の鼓動が止まり、息がつまり、運動が麻痺する場合に比較すべく、動物が恐怖によつて逃走する場合は人間に於ては心臓の運動、呼吸運動、その他の運動の早まる場合に比較せられるさうである。

吾々人間に於ても、自ら隠蔽する傾向は屢々觀察せられる、例へば、彈丸か何かは迅速に自分に向つて飛來した場合、本能的に手や足で自分を隠蔽しようとするか、時には麻痺するか又は逃走するかである。多くの動物の中には、危険に臨むと動かなくなり、假死の状を呈して、却つて敵の眼を逃れることのあるのは周知の事實であらう。

一般に恐怖すると息はつまり、冷感が起り、心臓の鼓動は時に高まり、時には、やゝ麻痺し、汗が出ることが多い。

恐怖が病的になると恐怖症状となる。最初は何となく恐怖を感じてゐるが、後には、種々のものが恐怖の種となることがある。針を無暗に恐れ、物品に接觸することを恐れ、血を恐れ、家畜をも恐怖する様になる。汽車に乗ると熱が出たり、試験を恐怖したり、高所



に登るのを恐怖するのは屢々見聞する事實であらう。

勿論、恐怖は直接の場面に關係して起るのみならず將來の豫想に關係しても屢々起る。吾々の日常經驗でも、何かの危険（身體的に又精神的に）が豫想せられると恐怖を経験することがある。

**スタンレー・ホール** (Stanley Hall) は色々の方面から恐怖を研究したが、男子にあつては7歳—15歳に増加し、女子にあつては4歳—18歳の間増加の傾向があるさうである。

勿論生活年齢が増すにつれて恐怖効果も同一である筈はない。年齢が増すと天體、雲、血、世界の没落、象等が恐怖効果を減じ、雷、電光、盜人、器械等がその恐怖効果を増し、性的成熟期には、風、暗黒、水、家畜、虫、幽霊、死、病氣等が恐怖効果を有つといはれるが、元來、恐怖はその他の現象と同じく當該個體の内面的情勢と、その場面の情勢との内面的即事的効果であるから統計的結果から概括的にいふことは出来ない。

### C. 怒の心理

怒の經驗も多種多様である。例へば憤怒、激怒のやうな場合は、怒が可なり強烈に表現せられた場合であるが、怨恨後悔、義憤、イライラ、嫌惡等も何等かの意味に於て怒に共通する要因をもつ一系列の經驗である。が併し吾々は怒をもつて、その最も原始的のゲシュタルトと考へる。

怒が如何なる場合に起るかといふ問題は當該個體の内面的情勢、

それが居る場面の情勢、その場面に働いてゐる力等によつて規定せられるから一概にはいへないが、極めて一般的にいふと、運動の自由に對する妨害となる感覺的環境が怒を起す原始的刺激になり易いといふことが出来る。怒によつてその個體の餘剩エネルギーは、その妨害に打ち勝つ様に集中せられ、この意味で怒は刺激と明白なる反應との間に介在する豫備的反應ともいふことが出来るであらう。

**ワトソン** (J. B. Watson) が觀察するところに、よると、赤坊を怒らしめるには、手を動かさうとするとき、その手を掴み、足を動かさうとするとき、それを掴んでも、時に鼻をつかんでも呼吸を妨害してもよいといつてゐるが、これ自由運動を妨害することによつて怒を起さしめた一例である。

怒が表現せられると、心臓の鼓動は強く、呼吸は早く、血液は感覺的、神經的、筋肉的機制に集中せられ、従つて血液は消化器官を去る傾向がある。**キヤノン** (Cannon) によるとアドレナル腺 (Adrenal glands) が興奮せられ、アドレナリンが血液中に流れるといつてゐる。

一般的に、怒の表現は破壊的傾向あるものとして、口を閉ぢ、齒を合せ、手を挙げ、拳を握る等の形をとる。

怒は、その本性上、争鬪的で、自分の欲する活動が禁止せられることによるが、その型式から見ると攻撃的型式と防禦的型式とがある。動物に於ては、怒は主として破壊、又は威嚇に向けられてゐる



が、人間に於ては、破壊に向けられる場合、破壊せずに一定の痛を與へんとする威嚇の場合の外に、怒が冷笑と結合して繊細なる形をとつて表現されることがある。

原始的な怒は経験によつて變化する。それ故、怒の関係する対象物も變化する。成人の多くの怒は自分に價值ある目的を保ちこれを達することに關係するのみならず、自尊心を傷けられても起るやうである。

そこで、吾々は怒の本性をもつと吟味するために、日常経験で、如何なる場合に怒が起るかを考へることとしよう。

例 1. 私が、昨日、急いで帰宅しようとしてみると、或自動車が危険にも、私の身體の横に近く突進して來たから道を譲つたために、眼の前にある電車に乗ることが出来なかつた。次の電車に乗らうとしたら、何れも満員で、二、三臺、待たされ腹立たしかつた。

例 2. 私は、友人に、數學の或問題を證明して見せようとした。ところが昨日出來た管の問題が、何のはづみか、一生懸命にやつても解けない、遂に、その問題もいやになり、その友人さへ嫌になつてしまつた。

例 3. 私は部屋の鍵を何處かへ見失つて、何處を探しても見當らない。腹立しくも、女中や家族のものまで當り散した。

例 4. 昨夜、私が讀書してゐると。近所の家にラヂオをやつて、とても勉強する氣がしなくなつた。再三、氣をとり直して讀書しかけたが、とても進まない、いやに、怒りつぽくなつた。

以上、試みに擧げた様な経験は、考へると枚舉に違がない。そしてこれらの経験を通じて共通な點は、(一)何か目的を達しようと思

つてゐること、(二)然しそれが思ふ様、出来ない。何か妨げられてゐるといふ二點が見られる。(一)は原始的怒に於ける自由運動に當り(二)は妨害刺激である。

然るに、吾々が、此處に注意しなければならぬのは、意欲する、不可能であるといふ二つの事實が、そこにあつても或場合には怒の経験とならぬことがある點である。

從來かゝる場合を説明するに意欲や願望がその強度に於て弱い場合は怒にならぬと考へ、意欲や願望が強いと妨害も強く感ぜられて怒になると説かれるのが普通であるが、果して、さういふ事實が眞理であらうか。

試みに、吾々の日常経験を考へて見られるとよい。如何に人生の重大事件に關する願望の様な場合にも、それが妨害せられて常に怒になるとは考へられないであらう。それと反對に、非常な微細な事件で、外形的に見ると微細な妨害であつても、怒や腹立しさを起すことは屢々である。それ故、人間がそれに向つて努力してゐる目的が重大だから、それに妨害が出来ると必ず怒になるとは結論出来ない。實に怒といふ経験が起るか否かは、その個人の内面的情勢と、その個人の居る場面の情勢と、その場の力の方向とによつて内面的に即事的に決定せられるといはねばならぬ。

さて、怒が、意欲する、而も、それが出来ないといふ場合の如何なる場面に表現するかを研究しようとするには、こゝに或目的を與



へ、それが仲々到達出来ない様な場面に、或個人を入れて、怒が、如何なる場合に表現し、如何なる姿として表現するかを詳細に観察しなければならぬ。

**ウオルフガング・ケエーラー** (Wolfgang Koehler) は類人猿の情緒表現に就て、かゝる場面を巧みに考察して劃時的の叙述的研究を公にしてゐるが、人間に就て非常に興味ある研究をなしたのは著者の嘗ての學友であつたロシアの白系婦人 **デンボー女史** (Tamara Dembo) が **クルト・レヴィン** (Kurt Lewin) の指導の下に伯林大學心理學研究所で行つた怒の研究である。

【註】

「デンボーの研究は「力系的問題としての怒」(Der Ärger als dynamisches Problem) として 1931 年 8 月、伯林大學を中心とする心理學研究誌上に發表してゐる。

怒を生起せしめる問題として、(1)  $3\frac{1}{3}$  m. の距離から直徑 15 cm. の輪を小さな瓶に投げかける作業と (2) 一定の區割せられた空間に居つて、僅かに一つの椅子を利用することによつて、一定の距離にある花をとらしめる。但し足を區割せられた空間から出すことを禁ぜられる。この場合、(1) 身體を屈して花を採る。(2) 椅子を中間に置いて足だけは出さずに採る。この二つの解決が出来ると第三の解決方法を考へさせる。ところが、その方法はないから、當該個人は怒り出すに至るのである。輪投げの場合は、作業が仲々困難だから幾回も反覆してると怒るに至る。」

**デンボー**の實驗では色々の興味ある問題を明かにしたが、こゝでは、吾々は、その一つ一つを考へる餘裕はないので、彼女の研究だけに限らず、一般的に述べることにしよう。

(一) 先づ、一定の實驗的場面で問題が與へられるとすると、第六

十八圖 I のやうに被験者 (VP.) は目的物を + としてそれに向ふのである。

(二) ところが問題が困難であると第六十八圖 II に示してあるやうに目的物の周圍に線を生じ、これを内部的の障壁として感ずる。

(三) さうすると問題その物が嫌氣を生じ一として作用しかける。(第六十八圖 III)

(四) 更に進むと、今度は問題だけでなく、被験者の居る場面全部が障壁と感ぜられその周圍を一が取りかこむ、(第六十圖 IV) I から IV に進むにつれて、緊張 (緊張とは反對力の働いてゐる程度を示す語) が強い、そしてその個人には、振子運動的に不安動搖が起つてくる、この不安動搖が情緒的經驗の基礎となるものであつて、この基礎の上に、色々の情緒が形成せられる。

(五) 問題が困難で解決出来ぬと、その場面から逃げ出ようとする。(第六十八圖 V)

(六) 尚ほ普通の解決方法でないこれに代ふべき補充的方法を考案する。

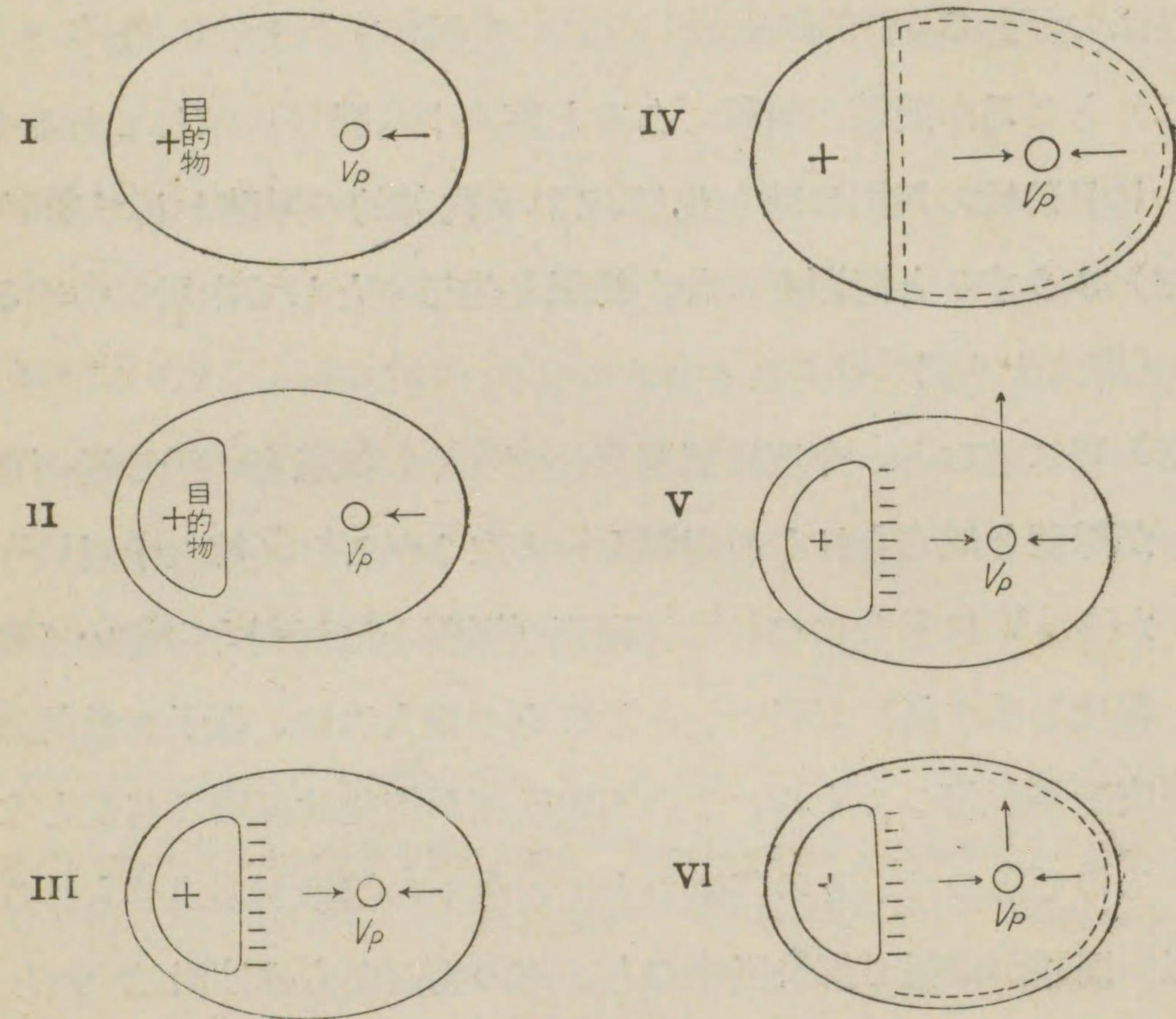
(七) 自分が直接妨害の障壁に突き當らうとする、それを破壊しようとする。(第六十八圖 VI)

(八) 問題提出者の惡口をいひ、又はこれに突き當らうとする。

(九) 怒の爆發として表現する。



第六十八圖



かく怒はその場の情勢、その場の力の方向に規定せられること大であるが、運動の自由の妨害のみならず、精神の自由が束縛せられたときそれから逃れ出る一切の方法が封じられると怒として爆發する場合が多い。それ故、意欲し、その意欲することが不可能でも、その場面から逃避出来易いか、或はそれに代るべき解決方法が思付き、かくて不安が除去せられ得るやうな場合は眞の怒として爆發するに至らない。吾々が諦 (Resignation) と、いつてゐるものは、安價

な補充的解決方法で満足するか、若しくは當該場面から身體的に逃避し得なくとも精神的に逃避したとして安住するものに外ならない。

かく見るときは、最初に述べたるが如く怒の原始的刺激は運動の自由の妨害であるが、然し只に運動の自由の妨害のみならず自己の心内に於て妨害として感ずるものは、みな怒を起すことが出来る刺激となるのである。只かゝる場合、怒になるか、ならぬかは、かゝる妨害を妨害として感ぜない適當な方法があるか否か、若しくは、それが妨害を逃れ得る場面なるか否かが重大なる要件となるのである。

【註】

「怒のみならず、一般の情緒的經驗で、比較的純粹な情緒的表現と情緒動作と情緒的色彩を帯びる經驗とを區別することが出来る。

(a) 純粹の情緒的表現

全く明かにその中に情緒があらはれてゐるもの。例へば身振、叫ぶ、足で地面を打つが如き場合。

(b) 情緒動作

情緒の起る場合の目的物、その場面に主として關係して起る動作で情緒表現の印象を與へるもの

例へば、物體を破壊したり、粉碎するが如きものであつて、これらの動作は只情緒表現として起り、目的を達する手段として起らぬものである。若し目的を達する手段として、それらの動作が起ると、それは合理的理性的動作として區別すべきである。

(c) 情緒的色彩を有つ經驗



例へば、倦怠したとき既に相當やつた仕事を繼續さすと、「まだやるのですか」「もうやめてはいませんか」等の言語的表現となつて表現せられる。」

### 情緒の経過形式

吾々は先に、情緒をもつて時間的経過の流れとして考へた。實に情緒は様々の時間的姿態をとつて吾々の精神生活にその色彩と光澤とを與へるものであるが、然らば、それは如何なる経過の形式をとるものであらうか。

この問ひに答へるがためには種々の情緒の表現の経過を、その類似性によつて考察し分析しなければならぬ。それ故、仲々の難問題であつて、今のところ、充分なる結果は望まれない。

それで、時に、人々は、情緒表現の際に表はれる生理的變化の曲線を研究することによつて、情緒経過の形式を推定しようとする試みをすることがある。

ヴント (W. Wundt) が、かゝる立場から、情緒の経過形式の圖式を示し、これを彼の心理學書の中に記述して以來、人々は、それを情緒の眞の経過形式であるかの如く考へ、屢々、引用せられてゐる。が併し、もとより、この種の形式は當座の試みとしてのものであつて、具體的の情緒経験を考察する場合、可なりの參酌をして見なければならぬ。

一般に、心理學的事實として心理學書に記載されてゐる事實の眞否は學者の思辨によつて決定せられるといふよりも、具體的の経験

に合致するか否かでなければならぬ。

即ち、檢證の鍵を與ふるものは、具體的事實に外ならないのである。この意味に於て、これらの形式も亦、果して抽象的思辨的なものか、若しくは、具體的事實の普遍性か、といふことは、自ら研究の進歩と共に明かにされるであらう。これらの問題は暫く措き、ヴントの示した情緒の経過形式は如何なるものであらうか。即ち、ヴントは、水平軸を中心として興奮的か沈靜的かによつて、大要四個の形式を區別する。

#### I. 急に上昇し徐々に下降する型式 (AA')

これ第六十九圖 I に該當するものであつて A は興奮的であり、A' は沈靜的である。この型式は一般に外部印象によつて起るとせられ、A は急に喜悅するの状を示し、A' は急に恐ろしきものを見た場合の情緒とせられ、吃驚、驚愕、期待の失望、激怒などが擧げられる。

#### II. 徐々に上昇し、急に下降する型式 (BB')

これ、第六十九圖 II によつて示され、主として、内部的動機によつて感情が發展せられる場合に當り、殊に、B 即ち興奮的の型式は、満足、希望等の情緒に當り、B' 即ち沈靜的の型式は、心配、苦悶、疑惑、悲哀等の情緒の型式とされる。

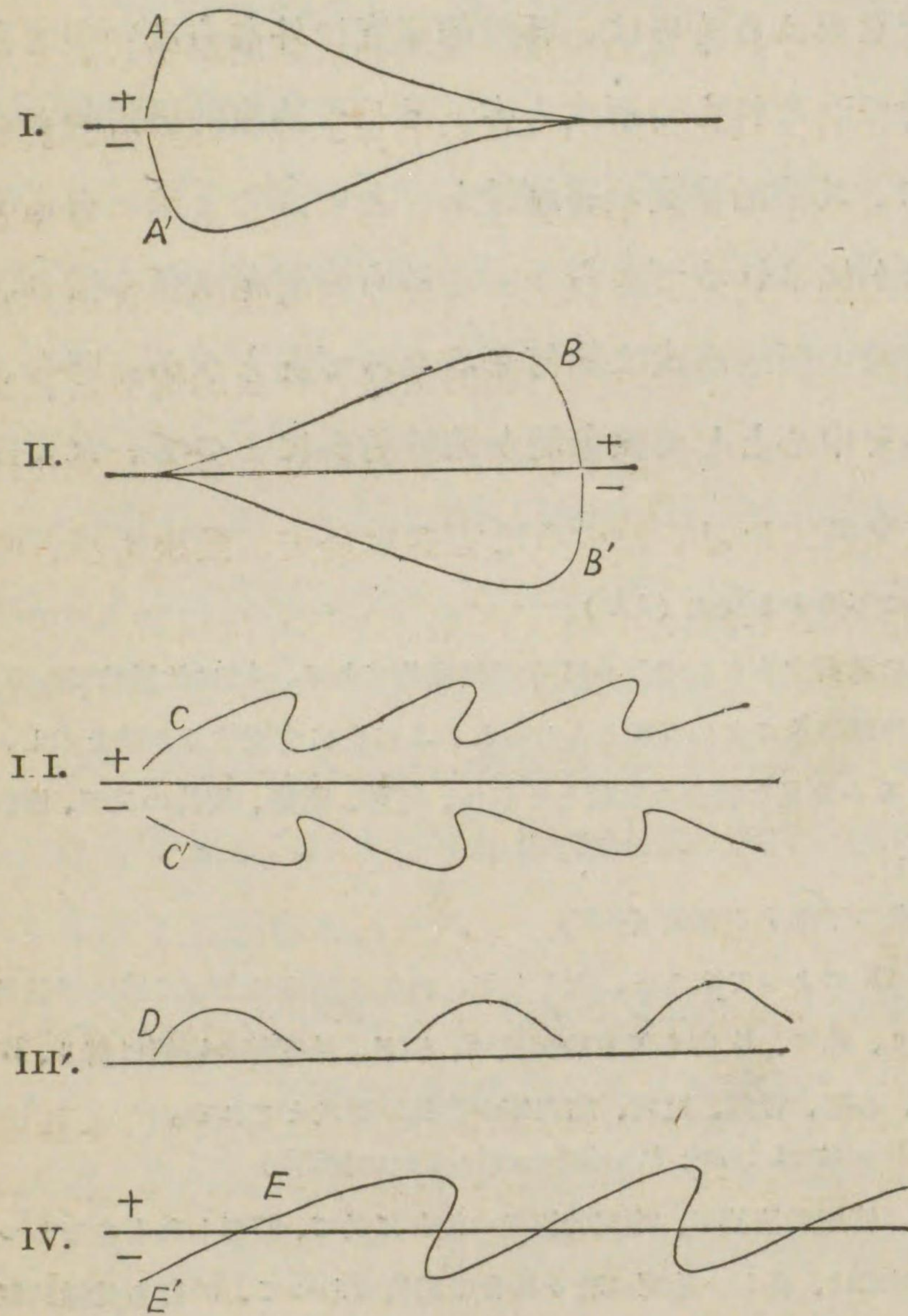
#### III. 波動的型式 (Remittent type; Remittierende Typus)(CC')

これ、BB' の如き、情趣的情緒が、時間的経過の流れに於て、變形したものであつて、c 即ち興奮的の型式は、嬉しい希望に耽る場合の情緒であつて、c' 即ち沈靜的の型式は、不安、若しくは心配の情緒である。

然るに、第六十九圖 III に示した様な cc' 型式は又、時々特殊な變形をとり、情緒の中間が恰も斷絶したが如き姿を呈することがある、これ、第六十九圖 III' になつて示されたところの間歇的情緒 (Intermittent emotion; Die Intermitterende Affekte) である。例へば、啜り泣くが如き場合に於ては、情緒の山が、所々にあ



第六十九圖 ヴントの情緒經過形式



情緒といふ。ヒステリーの情緒状態は正にこれに當り、吾々に於ても、希望と心配とが交互にあらはれ、或は興奮し、或は沈靜することは屢々、経験せられる事實である。

さて、以上のやうな四型式は、**ヴント**に於て、可なり圖式的に取

つて、その中間には、情趣的のものが織り成して、恰も情緒がないかの如き形相を呈する。怒の如きも時々かやうな形式をとることもある。

IV. 動搖的型式 (Oscillating type; O zillierende Typus) (EE')。

吾々の生活に於て情緒が長く繼續すると動搖する傾向がある、殊に外部知覺によつて、或情緒が長く續くと興奮的型式と沈靜的型式とが交互にあらはれ動搖することがある。これを動搖的型式の

扱はれてゐるから、具體的の情緒を考へるに當つては、可なり、そこに參酌を加へて見なければならぬが、兎も角、情緒が特に、その時間的經過の形式に於て特色づけられ得るといふことは察知されると思ふ。かゝる形式而も圖式的形式よりも、吾々に、もつと重要なことは、個々の具體的の情緒が、時間上、如何なる具體的の經過形式をとり來るか、それが、その個人の内面的情勢と外面的情勢とによつて如何に變化するかといふ問題であるが、それは、吾々が先に代表的の情緒の叙述に於て暗示したやうな方向に於て、將來もつと吟味されなければ明かにされ難い。

### 感 情

Feeling; Das Gefühl.

#### 感情的經驗の本質

吾々が先に論述した情緒的經驗は、もとより一つの感情的經驗に外ならないが、これ要するに特殊な經驗である、即ち個體の本能的機制の發相に密接な關係をもち、身體的有機的變化を多分に含み、強く當該個體の意識を支配し、複雑な時間的の經過の流れを形成するのを常としてゐる。

然るに人間生活を廣く見ると、稍々、未分化なものから高度に發展してゐるものまで、感情的經驗の様相は極めて多様であつて、その未分化なるものは情緒の或物と、その姿が殆んど區別せられない



が、分化したものは、稍々、その趣を異にし、かつ、情緒といはれるものの中に相交錯して表現されてゐる。それ故、吾々は、廣く感情經驗一般について、その本質的な方面を摘出するに努めて見よう。

考へて見ると、感情は、經驗の自我的側面であつて、自我の價值的評價的經驗としての性質をもち、従つて又、他の意識的狀態に比べて見ると、より生活の温みをもち、意欲生活に密接に關係し、個體の利害得失に交渉する點が多い。そして、その基調として、快、不快の兩極をもつのが普通である。順次、これらの點に説明を加へて置かう。

#### 經驗の自我的側面と對象的側面

吾々個體の經驗は一定の環境に於けるそれであつて、自我極とその對極との間に體制づけられた經驗に過ぎぬから、若し、知覺的經驗をもつて經驗の對象的側面に位するものとすれば、感情的經驗は寧ろ、自我的側面に屬する經驗といはねばならない。感情が時に個體の主觀的反應といはれるのは、即ち主體の狀態を、より反映することを意味してゐるのである。

#### 評價的經驗

感情が個體的自我的側面に屬することは、これ、同時に評價的經驗としての性質をもつてゐることを意味する。

一般に評價し、價值づけるといふことは、一定の要求水準が存す

ることを意味するものであつて、この種の水準に關係して始めて一定の評價が生れる。誰でも知つてゐるやうに、個體の原始的欲求は主として有機的欲求であつて、有機體の存在と安寧とに關係して、それ相應の要求の一定の水準があるから、それらに關係して、或は快となり、又は不快となるのが常である。

#### 【註】

「學者によつては、感情を分つて、衝動意識の發展としての快不快と、適應刺激、不適應刺激に相應する意味の快不快とを區別し、自ら得意がつてゐるものも尠くない。勿論この種の區別も時折、適切ではあるが、併し、何れも欲求水準乃至要求水準との關係に於ける評價的經驗たる點に於ては變りはない。著者はこの意味に於て要求水準の意義から、結局、如上の區別をさまで重要視しない立場をとる」

一般的に、準欲求 (Quasi-desires; Quasi-bedürfnisse) が發生するにつれて、要求の水準にも異同が起つてくる。要求水準が個人的に相違してゐるだけ、價値の意識が異つて表現せられる。

#### 【註】

「倫理學上、意志の善惡正邪を裁斷するものを、良心 (Conscience; Das Gewissen) といひ、その起源が時折、問題となるが、これを心理學的に見ると、如上の評價的經驗としての感情を土臺として成つたところの價値評價の結晶に外ならない。」

#### 快、不快の性質

快、不快の色合を有つ經驗を、時々感應的調子 (Affective tone) をもつてゐるといひ、この立場から感情を感應といふこともあるが、こゝに吾々の問題となる快不快の性質は如何なるものであらうか、吾々は、この間に答へるに先つて、從來の諸説を吟味しながら考



へ方を進めて見ようと思ふ。

快、不快の性質については異説が多い。

第一、快、不快は、感覺的經驗の屬性であるとするもの。この考へ方をする學者もないことはないが、余り、重く見られない。例へば、**チーエン** (Ziehen, T.) の如きは、快、不快をもつて感覺の屬性と考へたが、**キユルペ** (Külpe, O.) によつて論難せられてゐる。**キユルペ**によると感情自體にも質や強度や持続性があるから、若し感情が感覺の一屬性にすぎぬものとすれば、この性質を零とすると感覺も零となる筈だが事實さうではないと。この論議の適否は別とするも、今日、眞面目に、感情を感覺の一屬性と考へる人々は稀である。

勿論、快不快を感覺の屬性とするといつても、感覺の質や強度や持続性の如き本質的屬性とは區別する場合が多い、即ち快不快は感覺の屬性ではあるが、何時も不變に現はれるのではなくて、時々現はれる、この意味に於て、非本質的屬性だと考へるが如きこの一例である。そして、この考へ方を説明するために色々の假説を引合に出され勝ちである、例へば、**神経細胞**は、**エネルギー**を貯蔵し、この貯蔵量が**神経細胞**に用ひられる量は時々、變化する、不快は感覺過程が過度に**エネルギー**を用ひつくした場合に生じ、快は**エネルギー**の貯蔵量はその使用量より大なる場合に生じ、使用量と貯蔵量との平均は感應的調子を起さない。この場合に於ては、感覺の屬性として快、不快が出現しないと考へるのである。この種の考へ方は勿論、一部の眞理を含んでゐる。即ち、快不快も何等かの**エネルギー**過程に關係するといふ點に於ては正しいが、それだからといつて感情は感覺の一屬性との結論は出ない筈であらう。

第二、快、不快は一種の感覺であるとするもの。

この考へ方にも種々の差異がある。

- A. 快、不快は嗅、味、視、聽の如く、明瞭な感覺過程であつて、快不快にも特有な**神経**及び**傳達路**があると考へるもの。
- B. 不快をもつて、痛感覺の微弱なるものとする。即ち痛**神経**の微弱な興奮が不快であるとする、が併し、弱き痛と不快とを必ずしも、同一とはいへない。

C. 快、不快の**神経**が、凡ての**感覺器官**に共通にあると考へるもの。

かく種々の區別はあるが、要するに感情を感覺の一種と見る點で、感情感覺の存在を主張するものである。

惟ふに、名稱上、感情感覺を用ひることは許されるとするも、感情と感覺との混同は許されない。

第三、快不快を、感覺とは獨立な要素的過程とするもの。精神生活の要素探求の聲が盛であつた時代には、感覺と感情とを二つの獨立な要素過程と見られた場合が多い。

第四、快不快を特殊な判断とするもの。

快不快は感覺に對して與へる判断だとするものである。勿論快不快は一種の評價的經驗であることは間違ひないが、判断といふが如き形をとるとは斷言出来ない。

以上の考へ方は各、その特色はあるが、何れも充分であるとはいへない。然らば、快不快の主要なる性質は何處に求むべきであらうか。

A. 快、不快は何等かの意味に於て、その個體の存在する環境に關係し、これと獨立には起らないで、何時も、その場面の屬性として出現すると共に、その個體の内面的情勢に基てゐる。換言すると、何時も、自我極と、その對極との關係で表現されることである。

今、不快の起る場合を吟味すると、

- (1) 缺乏……鎮められ得ない欲求、満足せられない欲求……主體の無視された状態。
- (2) 傷害、過度の緊張……主體の脅威された状態。



快は欲求の満足及び満足の豫想に關係し主體の欲求の促進に基礎をもつてゐる。

それ故、環境の場面の情勢、對象が主體の欲求を促進するか妨害するか、のみならず、自我極を中心とする内面的場面の情勢も亦、快不快の場を形成する主要な要因となる。

B. 快、不快は相互に兩極をなし、これを同時に經驗することは出来ない。

C. 感情は自我極と對極との相關的經驗であるから、個人によつて快不快は異つて出現する。

D. 快、不快の經驗の持續は、その經驗の質を變化する。

これら快不快の性質から見ても、快不快を感覺の屬性とすることは困難で、例へば、快不快は同時に經驗し得ないが、これ、感覺の屬性とせられる強度、持續性、質の如きものと大いに異つてゐるといはねばならない。そして又、感覺は對象の状態を反映する點に特色があるが、快不快は、むしろ主體の状態を、これと異つた意味に於て反映してゐると見なければならぬ、この意味に於て快、不快を感覺と異つた經驗としても、これを單なる要素過程とするわけにはゆかない。蓋し、快不快は要素分析的には得られ難いからである。快、不快が評價的經驗であつても判斷といふやうな明瞭な形をとつてゐないことは前述の通りであるから、吾々は、快、不快をもつて、自我極と、その對極との關係によつて表現せられる特殊の經驗の相と

して解釋する。

### 感情の特性並びに感情の質の問題

吾々は感情をもつて、自我的側面の經驗であり、かつ、評價的經驗であつて、快不快の調子をもつ點を、強調した。これらの意味に於て、感情の特性並びに感情の質についての問題は所詮、明かとなるが、從來、心理學上、この種の問題が色々の視角から論ぜられ、かつ、多少の異論がないことはなかつた。されば、吾々は、こゝに、これらの問題を概観することとしようと思ふ。

嘗て、感情の特性は色々の名辭で示されてゐる。主なるものを舉げて見ると。

#### 第一、主觀性 (Subjectivity; Die Subjektivität)

感覺に比べて、感情が自我的側面に屬する經驗といふ意味を主觀性といふ名稱で示されてゐる。が併し、この主觀性といふ言葉は誤解が起り易い。といふのは主觀性といふことは別に經驗の主體に依存するといふ意味に使用され得るからである。

そして又、主觀性といふ標準だけでは、若し、適當に解釋された場合でも不十分である。何故かといふと、有機感覺や、運動感覺といはれてゐるものの中には、それが對象の状態を示すか、自己の状態を示すか判然しないで、いはい、未分化の状態と與へられてゐる場合が尠くない。この場合でも、評價的經驗として見るとき、多少それらの間の區別がつき得るかもしれない。

#### 第二、普遍性 (一般性、Universality; Die Universalität)

感覺や知覺は、或特定の内外刺激にのみ結合するに對して、感情は思考、意志、判斷等すべてに結合する意味に於て、普遍性があるといはれることがある。

#### 第三、現實性 (Actuality; Die Aktualität)

知覺や感覺は現實に經驗せられると共に、過去に經驗したものと再生的に經驗せられる、ところが感情は、常に現實的であつて、再生せられた感情は新しい感情にすぎないと考へられる。

オストワルド・キユルペ (Külpe, O.) は第一の主觀性を不適切として、第二、第三の規準をもつて感情を考へようとしてゐる。

#### 第四、兩極性 (Bipolarity; Die Bipolarität)



感覺や知覺に於ては、相反する二つの間に徐々に相違する程度上の差があること、例へば白と黒との間に多数の灰色の經驗がある如くであるが、感情は、快か不快かの兩極をもち、この兩者を混合することが出来ない、この特性は**ヴント** (W. Wundt) や、その門下、**チッチエナー** (Titchener, E. B.) 等の好んで採用するところである。

#### 第五、明瞭性 (Clearness; Die Klarheit)

感覺や知覺は、これを注意すると益々明瞭になるが、感情はこれを注意の對象とすることが出来ない。(チッチエナー)

#### 第六、複合質 (Complex-qualities; Die Komplexqualitäten)

感情は全體内容の調子であつて、その部分の配列の變化によつて條件づけられてゐる、それ故、感情は、全體が複合をなすところにある、これ複合質であつて、**クリューゲル** (Krueger, F.) 等によつて唱へられてゐる。

これらの外、感情には空間性がないこと、鈍麻し易いこと等の特性が時々挙げられることがある、勿論これらの特性は吾々の感情生活の一面を指示してはゐるが何れも感情の特性といふべきか否か問題である。ともかく、感情は、如何なる場合に於ても、經驗の自我的側面であつて、評價的經驗にして、快、不快の調子としてあらはれるところに顯著なる特色あることは間違ひがない。この故に、一般性をもち現實性をもち、明瞭性をもち、複合質をもつのではあるまいか。

さて、吾々は、感情の快、不快、即ち、質の問題についてこゝに論及する必要に迫られて來た。

感情の質は勿論多様であるが、これを色どつてゐる主要な方向は快……無記……不快の一方をとると考へることが出来る。これを感情の**一方向説**又は**一延長説** (One dimensional theory of feeling; Die eindimensionale Gefühlstheorie) といふ。

#### 感情の質に関する諸學説とその批判

##### A. 感情一方向説又は一延長説

感情一延長説は、上に述べた様に、快——無記——不快の一延長を主張するものであるが、同じく一延長といつても、詳しくいへば二つの形式がある、一は**單一説** (Singular

theory of pleasure and displeasure) ともいふべきものであつて、凡ての經驗を通じて、如何なる快も質として同じく、同様に如何なる不快も質として同じと見る立場である、數學の問題を解決したときの快も、食事の快も質として同じく、又、侮辱せられたときの不快も、身體具合が悪いときの不快も、其他困難な場面に出遭つたときの不快も同質であるとするのである。それ故、それぞれの感情は僅かに強度の上で異なるか、末梢的か中樞的かといふ點で異なるか、乃至は個人の全體で感ぜられるか、表面で感ぜられるかによつて相違するのみだと考へるものである。若しこの考へ方の代表者を求めて見ると、**ハルトマン** (Ed. v. Hartmann) **エビングハウス** (Ebbinghaus)、**ヨードル** (Jodl) **キユルペ** (Külpe)、**デュル** (Dürr) 等であらう。二、は**複稱説** (Plural theory of pleasure and displeasure) ともいふべきもので、あつて快に無限の質がある如く、不快にも無限の質があるとして、それらの中に大體快、不快の方向を求めたものであつて、**リップス** (Lipps, Th.) の如きはその代表者であつて、**シュトウンフ** (Stumpf, C.)、**チーエン** (Ziehen, Th.) の如きも同様であらう。この兩説中、何れを妥當とするかは立場の相違によつて定るところであるが、快がすべて同一であり、不快がすべて同一であるといふことが證明せられない限り、複稱説の方がより妥當であるかもしれない。何れにしても、快不快の一延長説が現在のところ、多くの學者によつて採用せられてゐることは確かであらう。

##### B. 感情の三方向説又は三延長説

然るに古く、**ヴント** (Wundt, W.) は、その感情説に於て、**三方向説** 又は **三延長説** (Three dimensional theory of feeling; Die dreidimensionale Gefühlstheorie) を唱へ、一時、かなり學者によつて採用せられてゐたが、その學説の妥當でないことが、論議せられるに至つた。

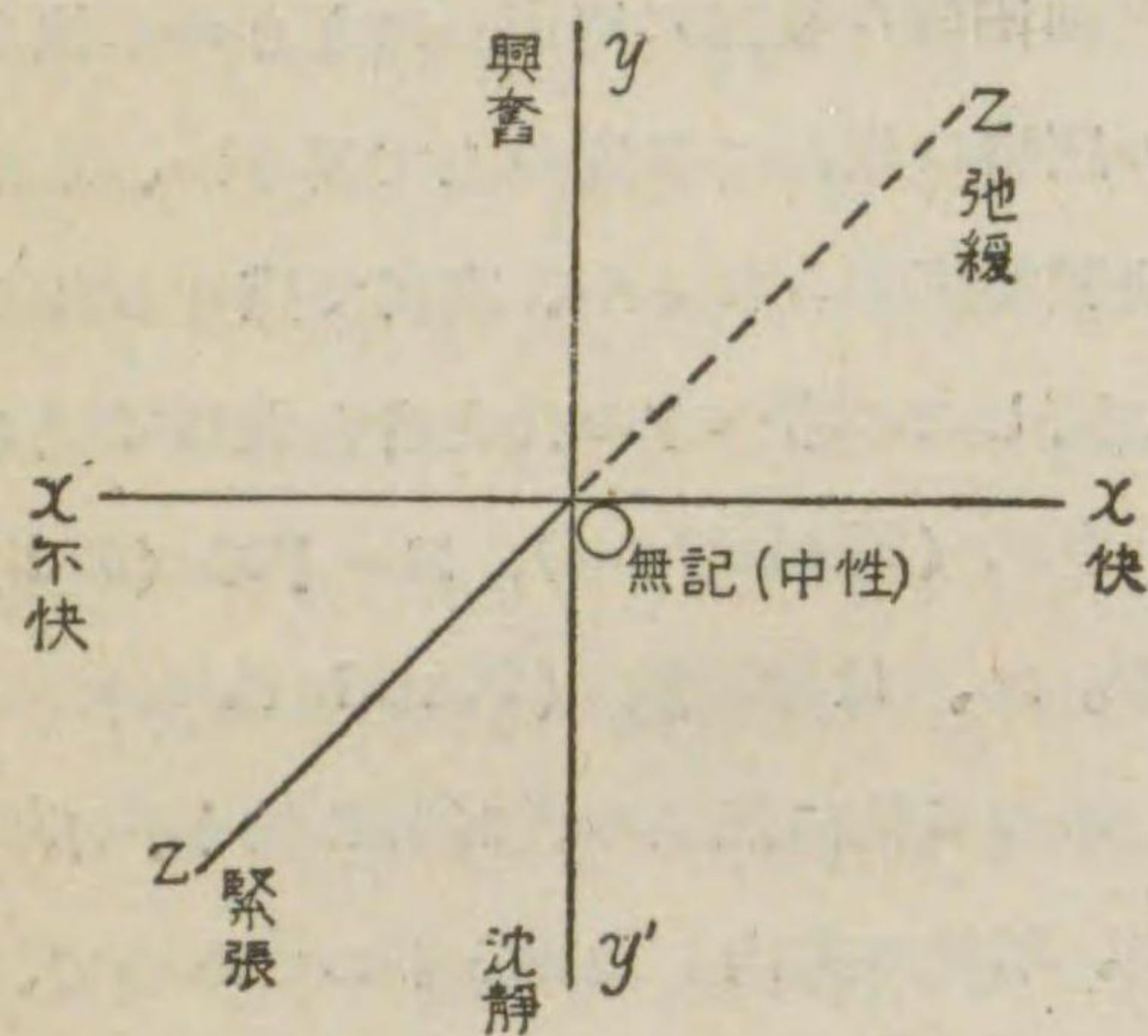
三延長説とは快不快 (Pleasure and displeasure; Lust und Unlust) の外に、興奮沈靜 (Exciting and subduing; Erregung und Beruhigung) 及び、緊張弛緩 (Strain and relaxation; Spannung und Lösung) の二方向があるとする學説である。

快不快は味又は嗅の知覺のときに見られ、興奮沈靜は、視覺的刺戟や聽覺的刺戟を受けたときに起り易く、緊張弛緩の状態は、刺戟を豫期してゐるとき、豫期したものが實



現したとき例へば筋肉感覚に結合して起るが如きものである。ヴントは、これを一原点三軸の圖式で示してゐる。(第七拾圖参照)

第七拾圖 ヴントの三延長説圖式



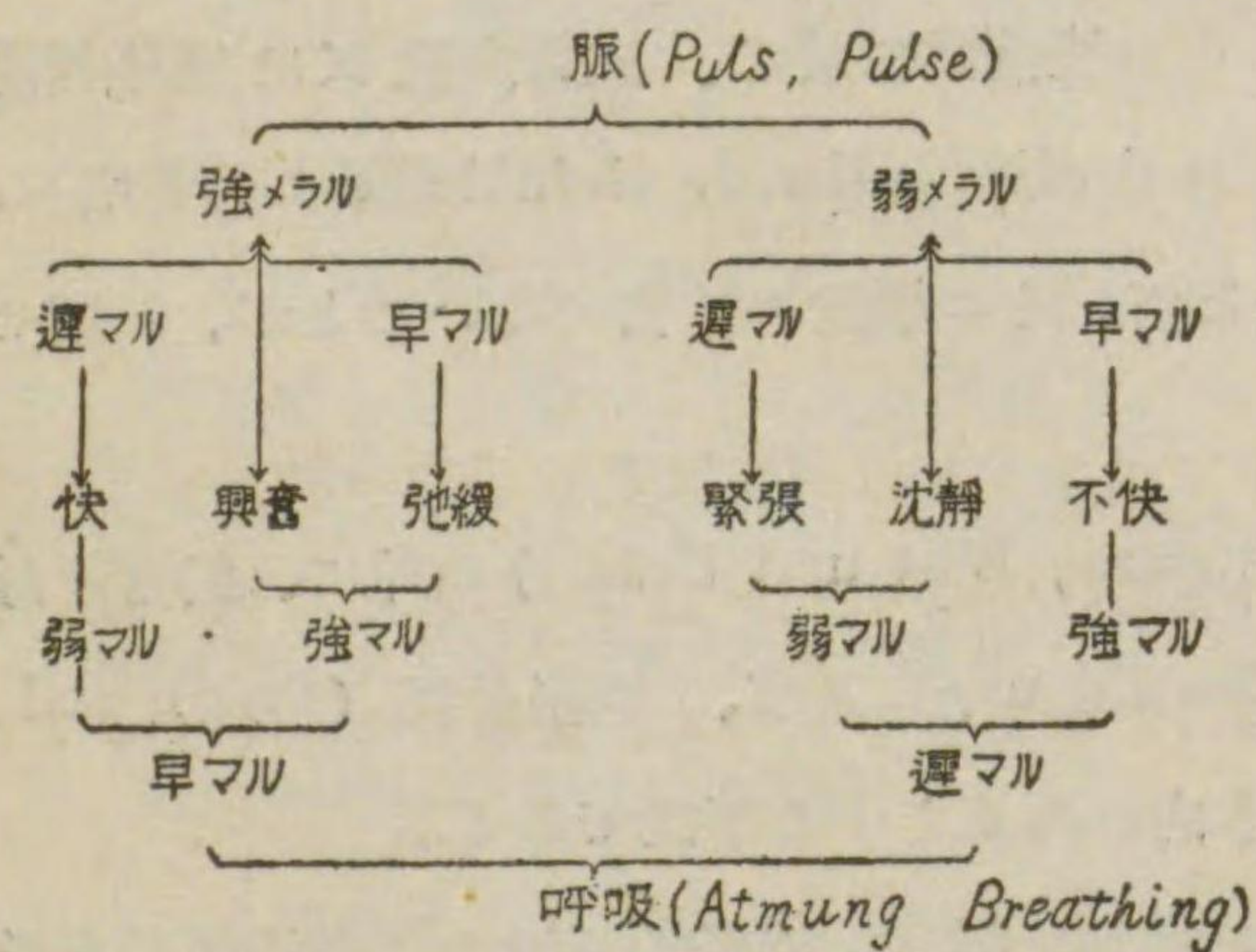
ヴント (Wundt, W.) によると、如上の三方向は要素的根本感情の方向であつて、複雑なる感情もこの三方向の結合から成るのである。そして、これらの三方向の結合に際して、或は快不快が主調となり、他の方向がこれに参加し(例へば喜び、悲しみ、満足、不満足) 或は、緊張弛緩が主調となり他の方向がこれに加はり、(例へば、希望、心配等) 若しくは興奮沈靜が主調となり、他の方向が之に加はる(例へば、いらいらしめる感じ)とし、

かくの如く、すべての感情をこの種の立場から説き盡さうとした。

さて、ヴントの三方向説の立説の根據は何處に横はつてゐるだらうか、いふまでもなく、感情生起の場合の生理的變化殊に脈搏、呼吸の變化であつて、彼はその結果に基づいて、六種の感情の區別があるがと考へたのである。

今、その結果を圖示すると第七拾一圖である。

第七拾一圖 ヴントの感情の生理的表出の結果



一般に感情の起る場合の呼吸、脈搏、血液變化、筋肉作業能變化、無意運動等の生理的變化を記録して、この記録を基礎として感情を分析せんとする研究法を一般に表出法 (Expression method; Die Ausdrucksmethode) と名づけられてゐるが、従つてヴントは表出法を應用したのである。

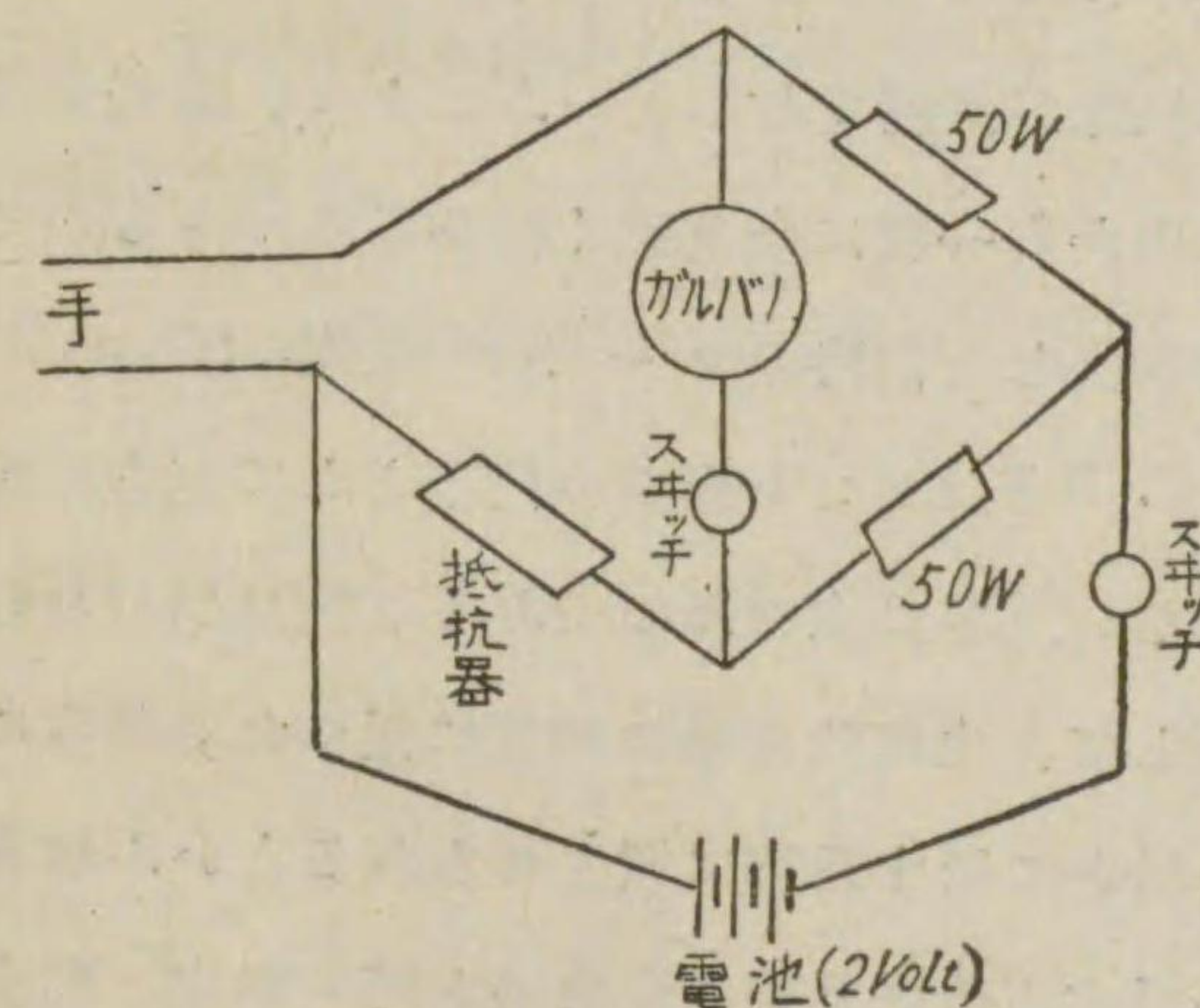
吾々は、ヴントの結果を批評するに當つて、新しく感情研究法としてのこの方法に説明か加へる必要を感ずるから、便宜上、

以下それらの點に觸れて然る後に、再び、當面の問題に立ち返つて論ずることとしようと思ふ。

表出法に於て、脈搏變化を研究するには脈搏計を用ひ時間線を記録する装置、例へばジャックエー氏時計 (Jaquet chronometer) をもつて圓筒廻轉器上の煤紙に時間線を記録し、同時に脈搏曲線を記録する様にするのである。呼吸變化の曲線をとるには呼吸計を使用し、血液變化の場合には血壓計を、筋肉作業の場合には握力計等を、用ひ無意運動の記録には、自動記器がある。この外、近年、ガルバニック反應法 (The method of Psycho-galvanic response or reflex) が用ひられることがある。この方法は皮膚の電氣抵抗が感情情緒の結果として減少するといふ假定の下に、手を特殊の電流計を挿入した電流上に置かしめ、その個人に刺激を與へ、その際の鏡電流計上の歪曲によつて變化を讀まうとするものであるが一つの研究法であるとしても、尙ほ多くの問題を含んでゐる。

第七十二圖

ガルバニック反應法の模型圖



さて、ヴントの三方向説の根據としての表出法の結果は果して確實なものだらうか、吾々の知る限りに於ては、この點に關する從來の研究結果は必ずしも一致してゐないのである、僅かに、やゝ一致點を求められるのは、快不快の方面に就てのみであるが、それとても必ずしも確かとはいへない、今、ざつと概括的に示して見ると、第七十三圖表の通りである。

この不完全なる圖表の示すが如く、殊に、緊張弛緩、興奮沈靜の場合の結果は不一致である。考へて見ると同じ様に緊張といつても種々の場合が區別せられる。例へば、豫期の緊張と短期的仕事の緊張とは大いに異つてゐる。そして又、緊張はやゝもすると興奮と結合せられ易い。

かく、現在のところ、不明の結果を土臺としたヴントの三方向説は尙ほ早急なる斷案といはねばならない。即ち、若し、ヴントがいふが如く三方向が存在するとすれば、三



第七拾三圖表

| 快                                   | 不快                | 緊張                                              | 弛緩                 | 興奮                 |
|-------------------------------------|-------------------|-------------------------------------------------|--------------------|--------------------|
| 脈速度<br>{ 遅マル(色ヲ見音ヲ聞ク快)<br>早マル(味)    | 早マル               | 早マル(M. Kelchner)<br>遅マル{(Gent)<br>(Alechsieff)} | 不一致                |                    |
| 高サ 増加                               | 減少                | 減少(Lebmann)                                     |                    | 増加                 |
| 長サ 増加(不規則)                          | 不規則的減少            | 長クナル(Meumann)<br>(Zoneff)                       |                    | 小                  |
| 呼吸速度<br>{ 遅マル(氣分趣味ノ快)<br>早マル(感覺的ノ快) | 不一致               |                                                 |                    | 早マル                |
| 呼吸ト吸氣ノ割合<br>$\frac{I}{E} > 1$       | $\frac{I}{E} < 1$ | $\frac{I}{E} < 1$ . (Suter)                     | $\frac{I}{E} > 1?$ | $\frac{I}{E} > 1?$ |
| 腕の容積 増大                             | 低下                |                                                 | 大                  |                    |
| 筋肉運動 大                              | 小                 |                                                 |                    |                    |

方向を示す生理的曲線に截然とした區別がなければならぬからである。

そこで、吾々は**ヴント**の三方向説の生理的根拠が薄弱であるといふことゝ、緊張弛緩興奮沈靜等はやゝ複合的經驗であるといふ理由から一般に余り重く顧みらるべきものでないと考へねばならぬ。果せるかな、數年前逝去した當時のコーネル大學 (Cornell university) の教授**チッチエナー**(Titchener, E. B.) はヴント直系の門下として三方向説の吟味に従ひ、遂に、これを放棄せざるを得ない立場に立つたのである。彼は二つの方面の研究を企圖した。一は所謂表出法を應用して、生理的曲線の研究に従つた。然るにその結果、快不快外の生理的曲線は快不快の場合に示す曲線に還元せられるといふ結論に達した。即ち、緊張曲線は不快曲線と同一形式、弛緩曲線は快曲線と同一形式、興奮曲線は快曲線と、沈靜曲線は不快曲線と同一曲線に屬するといふ事實を發見した。

二は、所謂、**印象法** (Method of Impression; Die Eindrucks-methode) を應用したのである。

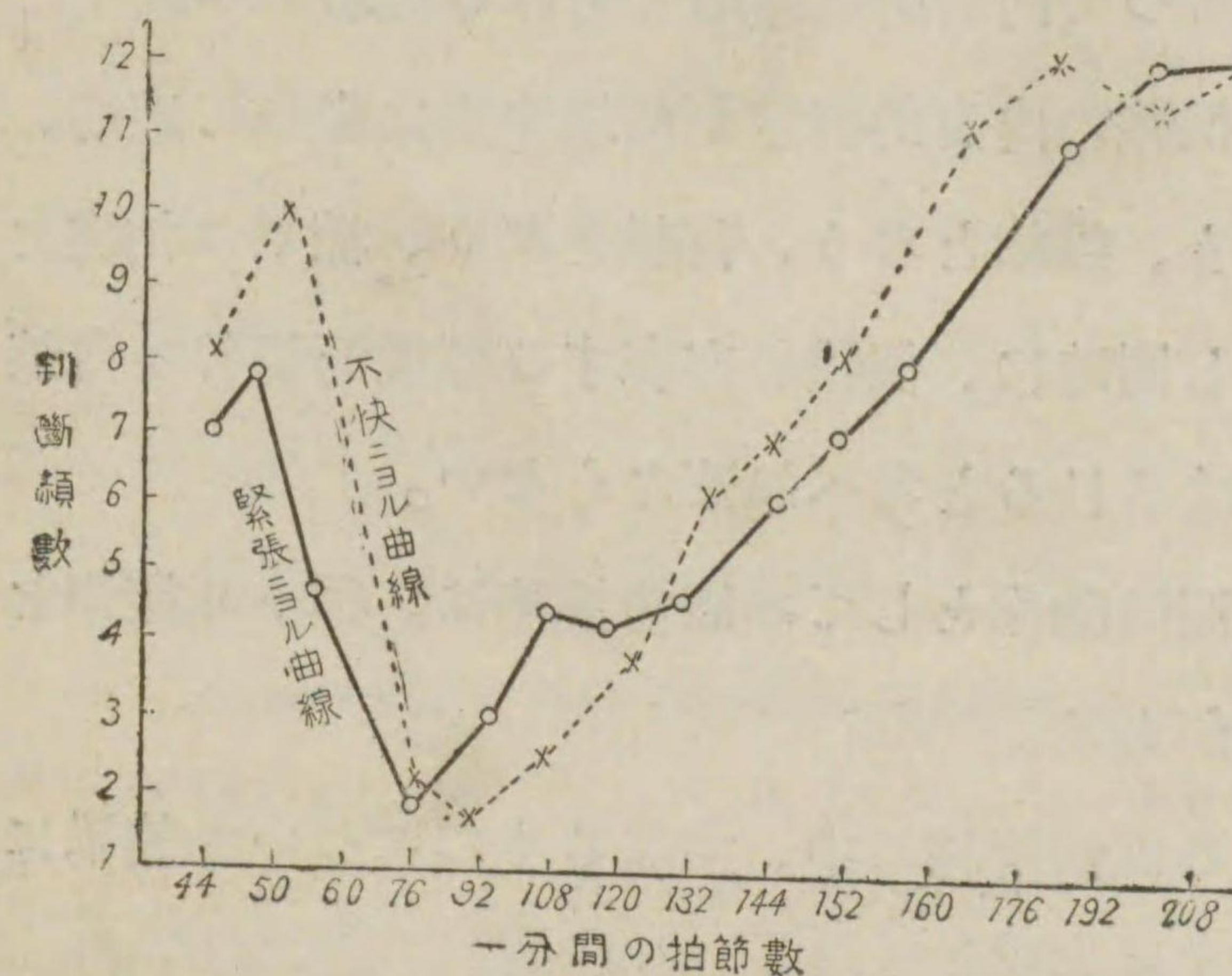
印象法とは、一定の客觀的刺激を與へ、それに対して、如何なる感情状態 (例へば快なるか、不快なるか、調和なるか、不調和なるか、等) が起るかを内省報告せしめ、そこに得たる結果を統計整理して感情を研究するが如き方法であつて、先に述べた表出法

と併せて傳統的の感情研究法のとされてゐる。が併し、一口に印象法といつても色々の場合がある。その最も簡単なのは、**選擇法**(Method of choice; Die Wahlmethode)であつて、例へば、數個の物體を與へ自己に快なるもの不快なるものを選択せしめるが如きこれである。

若し、各種の物體を一系列とし、これを一個宛、露出して、被験者の欲する時間だけ繼續し、後に、それらについて内省せしめる様な場合を**單一露出法** (Method of single exposure) 又は**系列法**(Serial method) と稱し、被験者に、刺激を對として與へ、對相互に對して内省判斷せしめて研究する場合には、これを**對比較法** (Method of paired comparison; Die Methode der Paarweisevergleichung) といふ。印象法は視聽その他種々なる刺激について應用することが出来る。

さて、**チッチエナー**は、色彩系列、音系列、音律動等に對し、(1) 快なるか、不快なるかに就て判斷せしめ、その結果を統計整理し、(2) 次に緊張なるか、弛緩なるかに就て判斷せしめ、その結果を統計整理し、(3) 更に興奮なるか、沈靜なるかに就て判斷せしめ、同じくその結果を統計整理し、それらにより、各方向についての判斷曲線を描き比較考究した。

第七十四圖 判斷の分配曲線



[第七十四圖 はメトロノーム (拍節器) を用ひて實驗せる結果を示す一例である。]

これらの研究結果、各曲線は大體に於て、快不快の場合の判斷曲線によつて代表せられ得ることを認めるに至つた。

そして、その門下、**イエス** (Hayes) はこれらと殆んど、同様な研究



をなし、同一の結果に達したから、**テッチエナー**は、感情について一方向説を固持するに至つたのである。

### C. 感情二方向説又は二延長説

感情の二方向説は感情の質として快不快の外に**安静**(Quiescence)と**不安**(Restlessness)とを認めるものであつて、**ロイス**(Royce)が代表者である。**ロイス**は感情を快不快とすると混合感情を説くことが出来ないと考え、かくて、快不快の外に安静と不安とを認め更に、これらの四種の感情の混合として、快で安静、快で不安、と、不快で不安、不快で安静を主張する。

が併し、この説も、**ヴント**の三方向説と同じやうに、余り、顧みられてゐないといふ方が適切であらう。

## 感情情緒の諸相

### 内面的動作としての感情情緒

吾々は感情情緒をもつて、個體の内面的情勢と、外部的環境的情勢との全體的制約性をもつて内面的に體驗せられる經驗の一樣相と考へ來つた。それ故、個體の内面的構造が發達するに従つて感情、情緒の様相も微妙となり、繊細となり、複雑となり、様々の相違を呈するのである、が併し同時に、個體の存在する環境的情勢の當該個體に對する關係が反映されると考へねばならない。

この意味に於て、内面的動作としての感情情緒は、種々の様相をとつて出現する可能性がある。

今、吾々は、種々なる感情情緒の中、主なるものについて簡単に説明を加へることとしよう。

## 感性的感情 Sense-feeling ; Das sinnliche Gefühl

吾々の感情が、比較的、感官知覺に結合して生起する場合には、特に、これを感性的感情といふ。味覺、嗅覺、觸覺等に関係して、或は、それが快であつたり不快であつたりするのはこの類であるが、視覺や聽覺に結合して起る感情の中、特に、物體の簡単な關係について起る感情を特に、**簡單美的感情** (Elementary aesthetical feeling ; Das aesthetischen Elementargefühl) と呼ばれることがある。

一般に**調和感情** (Feeling of harmony ; Das Harmoniegefühl) **旋律感情** (Feeling of melody ; Das Melodiegefühl)、**リズムの感情** (Feeling of rhythm ; Das Rythmusgefühl) 及び、**形式感情** (Feeling of form ; Das Formgefühl) これである。

### (一) 調和感情 Feeling of harmony ; Das Harmoniegefühl.

調和感情は不調和感情と對立する。

調和、不調和の問題は主として色彩についての感情と、音についての感情を中心として論ぜられ、音の場合には、協和、不協和が問題とせられる。

#### (1) 色彩の調和、不調和感情 (Feeling of colour harmony or disharmony ; Das Harmoniegefühl od. Disharmoniegefühl der Farben.)

色彩の配列は一般的に、それが如何なる形狀に表現せられるかに



よつて、その現象形式を異にすることは勿論であるが、形式から來る成分を除外して、從來、人々の注意を喚起したものは、二色配合の問題である。

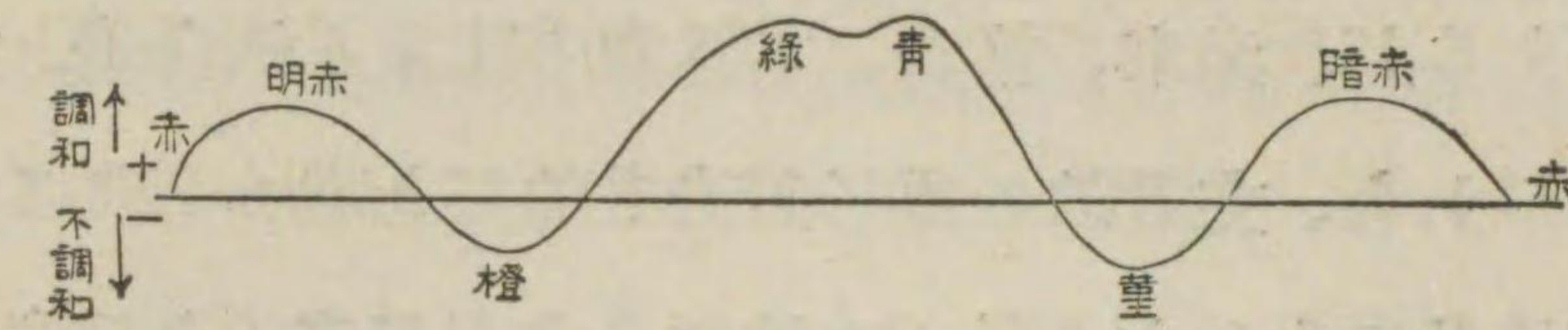
一般的に、二色配合について、良く調和し、心持ち良い感じを興へられるのは、對比色相互、即ち補色相互の配列か若しくは、その近傍に位する色相互の配列と考へられ、これに次ぐものは陰影の差を有つ相近き相互の色彩の配列である。

最もよく調和し、従つて快感を起すものが一つの頂點であるか、若しくは多くの頂點があるかは問題であるが**ブルツケ** (Brücke) は一つの山と考へ對比色相互と考へたやうである。**ゲーテ** (Goethe) **シエヴリユール** (Chevreul) **コーン** (Cohn) 等も、ほゞこれに近い考へ方をしたやうである。

が併し、對比色相互の色彩の近傍の色彩でも、時によく調和することがある、**ヴント** (W. Wundt) その他の學者は寧ろ對比色の兩側の色彩中によく調和する色があると考へてゐる。そして、かゝる相違が生ずるのは、色彩を見るの態度の變化に基くとしてゐる。即ち二色を比較的孤立的に見ると對比色がよく調和するが如く感ぜられ、二色を一つの全體として見ると對比色の兩側に位する色でも最もよく調和するものがある。若し、吾々が色彩印象に對した場合、相互に孤立した二色を見るのが自然でなく、一對の色彩を見るのが自然とすれば、最も調和する色彩は出發點となつた色彩の對比色とでは

なくて、むしろその色と對比色の近傍の色の中に求むべきであるかもしれない。

第七十五圖 赤色を中心としたる色彩調和



第七十五圖は、赤色を中心として、それと調和する色彩を示した略圖である。

三色調和結合の根本原理は色彩圓の等距離の三點に位する相互の色彩であるといはれるが、事實上この原理を多少、離れても調和する色彩がある。例へば、畫家はともすると、この原理を離れて而もよく調和する色彩を描き出すことは周知の事實である。紫と黄とシアンプリユとをもつて、又は、カームンロートと黄緑とウルトラマリンとで相互に調和するものが描かれてゐることがある。要するに、これらの問題は、如何なるものが描かれてゐるか即ち形式の問題と極めて密接の關係が横はり一概にはいはれない。

## (2) 音の調和 (Feeling of clang-harmony; Das Klangharmoniegefühl)

音の調和、不調和を特に**協和** (Consonance; Konsonanz) **不協和** (Dissonance; Dissonanz) といふ。一般に音を同時 (又は繼時) に鳴らし滑かに和し、そこに一つの統一體としての感を興へ分離がないときには協和と稱せられ、然らざるときには不協和といはれる。理論



的には音の同時的結合としての高低についての調和の程度として、協和不協和の二面が存在するのである。

音の協和、不協和を決定するの條件は、客觀的條件と主觀的條件との両面があるが、元來、協和、不協和の現象それ自體、主觀的なものであるから、主觀的の感じが決定的だと考へられるが、古くは、客觀的條件のみを主に見、次第に、主客兩條件を探られ、近年、主觀的條件の重味が一部の識者によつて考へられてゐる。

【註】 協和の條件

- A. **ピタゴラス**(Pythagoras) **オイラー**(Euler) 等は二音の振動数の比が簡單であることを協和の條件としてゐる。
- B. **ヘルムホルツ**(Helmholtz) は原音と上部音との間に唸が少いほど協和だとする。
- C. **ヴント**(W. Wundt) は客觀的條件に對し主觀的條件を加へてゐる。

(c) 客觀的條件

- (1) **差音**(Difference tone; Differenztone)の数が少いほど協和である。
- (2) 規則正しい音程のとき協和である。
- (3) 原音と上部音とが類似するほど協和である。

(b) 主觀的條件

- 1. 二つの音の相違が或る程度までは同化と感ぜられ、これを越すと異化となる。
- 2. 二つの音が合して一つと感ぜられること。

- D. **クリューゲル**(F. Krueger)は唸の存在の程度と差音の数とを重要視してゐる。
- E. **リップス**(Th. Lipps) は振動数の割合が簡單であると、これを聞いてみると無意識的に拍子が出る。かゝる場合、協和であると考へてゐるやうである。
- F. **シュトウンブ**(C. Stumpf) は二つの音が合して、統一體を作り、一個の音とし

て感ぜられるとき協和だと考へ、音樂的でない音程を不協和とし、音樂的音程の中でも、オクターブ(1/8) 五度(3/2) 四度(4/3) を完全協和とし、三度(3/4) 六度(3/3) をもつて不完全協和とした。

この種の程度の決定は氏の多くの實驗的研究に負ふところである。

G. **シーショアー**(Seashore)は協和不協和の條件として次の三個の標準を採用してゐる。

|   |                               |                       |   |   |
|---|-------------------------------|-----------------------|---|---|
| 協 | 和                             | 不                     | 協 | 和 |
| { | 1) 合 致 (Blending; Agreement.) | 不 合 致 (Disagreement.) |   |   |
|   | 2) 滑かな事 (Smoothness.)         | 粗 な 事 (Roughness.)    |   |   |
|   | 3) 單 純 (單一音に類似する度; Purity.)   | 豊 富 (Richness.)       |   |   |

協和不協和が、主觀的標準によつて決定せられる限り、主觀的態度の相違によつて、何を標準として判断するかによつて異なる場合が多い、それ故、新に研究する場合は、先づ如何なる標準に依るかを決定して置く必要がある。

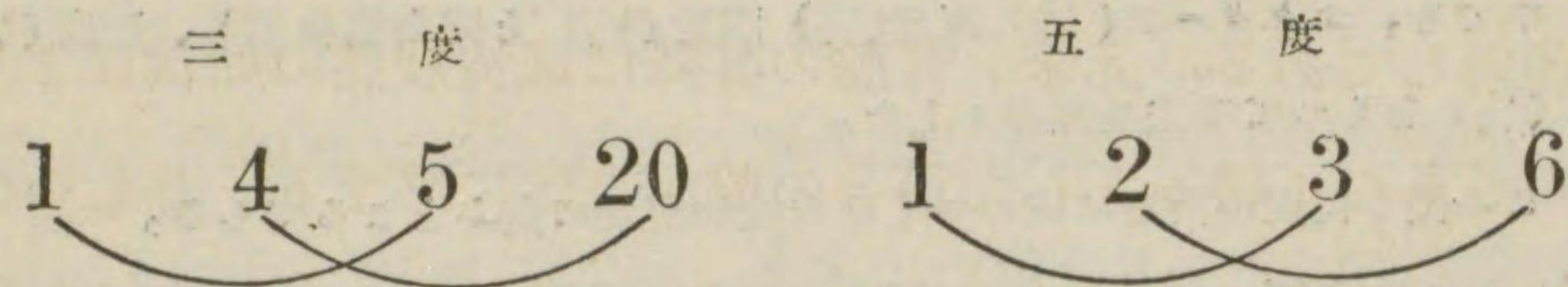
三音若しくはそれ以上の協和、即ち**和絃**(Chords; Akkord)について考へて見ると c:e:g=4:5:6. の形をとるところの**長三和絃**(Major triad; Durdreiklang)はc音が主調となり、威嚴あり而も温順的の感情を起し、c:e<sup>b</sup>:g=10:12:15 の形をとるところの**短三和絃**(Minor triad; Mollldreiklang)はg音が主調となり、強烈、不安の感情を伴ふ。

【註】

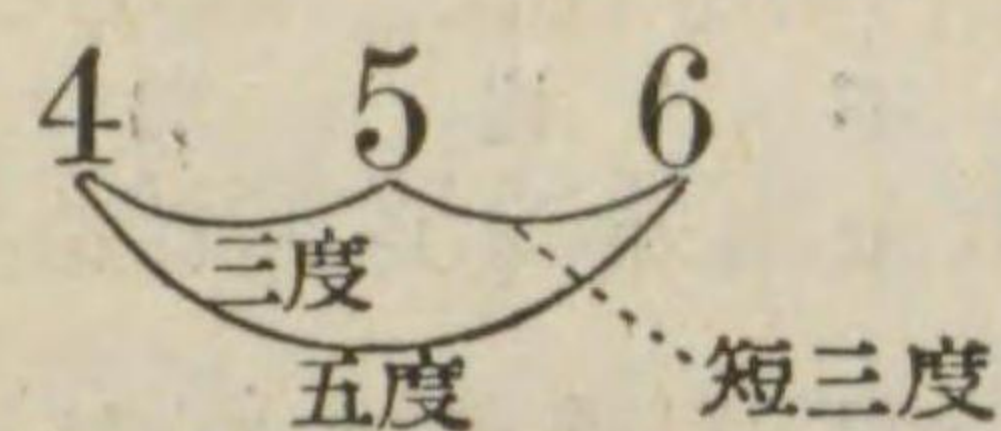
同時に音を鳴らし音結合が起る場合、高音部に主音があらはれ結合するもの(直接的結合)と低音部に於て結合するもの(間接結合)とがある。若し高音部で結合すると興奮的に感ぜられ、低音部で結合すると安定的の感を伴ふのが普通である。



例へば、三度は理論上低高兩音部に結合點をもち、五度も同様である。



長三和弦 4:5:6 となるとこの中に三度、短三度、五度を含み、



の如し。結合する場合、差音が根源となり、一オクターブ降つて  $C_1$  が主調となる、 $C_1$  は調子が低く、かつ安定的である。

然るに  $C:es:g=10::2:15$  に於ては差音が一致しないで、これらの振動数の割合の数字の最小公倍数60に當るところに於て結合點がある、この點は  $g''$  であつて、全體として強烈、不安定の感じがある。

( $g-h-d'$ )—( $c-e-g-c'$ ) は崇高な感を伴ひ、( $c-g-h$ )—( $c-e-g-c'$ ) はや神秘的に感じ ( $c'-e'-gis$ )—( $h-e'-gis$ ) は多少悲哀的であらう。

### 【註】

音の調和即ち和聲の問題はピタゴラス (Pythagoras) 以來、多くの人々が研究したが、ピタゴラスとユークリッド (Euclid) との主なる研究を繼いで、オランダの僧侶、フクバルト (Hucbald) が、協和音を音樂に利用しようとして、紀元一千年頃オルガヌム (Organum) と稱する和聲法を考案した。これが漸次發達して後に和聲的音樂となつたが、東洋に於ても四千年來、音の組合せ方が研究され、漢時代かなり盛んとなり、京房の如き研究家を出し、隋唐時代の和聲音樂が出来てゐる。これが日本に移入せられ、雅樂となつたが、我國では余り、和聲法は發展しなかつたといつてもよからう。

### (二) 旋律感情

Feeling of melody. Das Melodiegefühl.

書 入 欄

旋律とは高低の音が順次に時間的結合として現はれる場合の俗にいふ節廻してである。元來、音聲の昇降は感情状態の如何によつて起るものであつて嬉々とした場合の聲が自然に昂まり、悲しい時の聲は自然に低くなり、又、愉快な場合には飛ぶやうに大きく昇降し、愛慕の情に根ざす聲は、滑かく、細かく變化する様に、單なる感情の結果、自然に生ずる聲音の抑揚は旋律の最も原始的形式であつて、未開人、原始人の歌ふ聲音は多くはこの形式をとつてゐる。

これ、前の音と後の音とが繼起的に統一を保ちつゝ、表現せられ所謂旋律の本源的形式を成してゐる。

かく旋律は人間の精神生活の感情情緒的方面の音聲的表現に起源があるが、特定の旋律として固定せられるには、そこに何等かの理由がなければならぬであらう、今こゝに主なるものを擧げて見ると、(1) 人々は模倣することに興味を覺え、屢々、鳥獸の聲音の昇降を模倣し、かつ又嘗て聽いたことのある聲音變化を再認すると心持ちよく感ずること、(2) 音の昇降はこれを變調 (Transponieren) することが出来るから、或る音結合を他の高度で變調する、(3) 人々は、或高低結合の統一を美的形式で創造し、これに記號を附して再び繰返して歌ふことが出来るやうにしようとするがこのやうな動機も加はつてゐる。

これらの理由のあるものが働いて特定の旋律が發展するに至るものであらうが、この中でも、自然的發達に比較的委ねられる場合と

書 入 欄



特に、人爲的に構成せられる場合とがある。

自然的に發達したものは、従つて、全然、感情的であつて、數理的音階の基礎に立つてゐないのが普通である。

原始的音樂、殊に、或音群の反覆から成るものは、この代表的なものであるが、俗謠もこの種のもものが一步進歩したものと見ることが出来る、民謠もこの意味に於て屢々、國民的特性を表現することが多い。例へば、アイルランドの民謠は尻上り型であり、情緒的型式を多分にもつのに、スコットランドのそれは尻下り型であることが多い。俗謠、民謠に於ては感情情緒が何等束縛を受けなくて自由奔放に表現せられるが、時々、旋律が特殊な形式によつて束縛せられることがある。中世のヨーロッパの寺院儀式に於ける音樂の如きは、旋律が隔離的、出世間的かつ眞剣さを有ち、聴くものをして、特異の感を起さしめる。

人爲的に音階の調和の原理に基いて發達した旋律にも、徹頭徹尾調和の原理に終始するものと、大體、調和の原理に基くが、微細な部分に於て、この原理を離れて自由奔放に奏せられるものがある。

前者が、即ち和聲的音階 (Harmonic scale) であつて、チューン人や支那人の音階はこれである。然るに所謂旋律的音階 (Melodic scale) と稱せられるものは後者であつて極めて感情的である。我國やラテン系國民に於ては時折この種のもが見られる。

### (三) リズムの感情

#### Feeling of rhythm; Das Rhythmusgefühl

吾々は時間的に聯接される強弱若しくは長短が一つの統一的なゲシュタルトとして意識される場合これをリズム (時律; 律動; 節奏; 間拍子; Rhythm; Rhythmus) と呼んでゐる。

強弱の印象が時間的に聯接せられ一つの統一的ゲシュタルト (Die Gestalt) を構成する場合、強弱のリズムであつて、長短印象のそれは長短のリズムである、ヨーロッパの詩歌のリズムは主に強弱的形式をとるが日本の詩歌では長短の形式が屢々見られる。

そしてリズム刺激は感覺的若しくは運動的であつて、例へば視覺的にも運動的にも觸覺的にも與へられるが殊に聽覺的運動の場合が最も顯著である。

そして一定のリズムとして感ぜられる場合は、そこに、一定のリズムの感情が見られる。

一般的に有機體にとつて、リズム的なものは最も自然的であつて非律的なものは避けられる傾向がある。自然の運動がリズム的であると最も經濟的で最小のエネルギーで最大の効果を擧げ得られる場合が多い (歩行、其他を見よ)

吾々に於ても、自然のリズムに合ふものは快と感ぜられ、然らざるものは不快と感ぜられることが多い。

【註】(1) ボルトン (Bolton) は呼吸、心臓の運動とリズムの關係を研究してゐる。

(2) 日本詩歌のリズムに關しては、相良守次著日本詩歌のリズム参照。



そして、それ自身、強弱若しくは長短の時間的联接として與へられる場合にリズムの意識が現はれるのみならず、同様なものが時間的に與へられる場合でも、自然にリズム化され、群化が発生することがある。これ所謂主觀的リズム化(律動化)の現象であつて、視覺的刺戟、觸覺的刺戟乃至は聽覺的刺戟等によつても生ずる。

舞踊その他の藝術等に於て到る處リズム現象は見られるが、舞踊では形式美が多分に參加しリズムと、それに對する感情との關係を明かに規定することが稍々困難である。ところが音聲はこれに比べて明瞭な形でリズムを示してゐる。ビュロウ(H. v. Bülow)などが音樂の始めはリズムであるといつてゐるやうに、原始的音樂ではリズムは最も有力なものとして存在し、かつ可なり複雑なものがある。

【註一】 近年メイヤース(Meyers)は未開人の音樂に非律的なものがあると唱へてゐるが、この場合、最初リズム的なものがあつて、それが他の要因によつて混亂されたのか、最初から非律的なのか決定されない。

【註二】 若し、發達といふことを簡單から複雑へといふ意味に解釋すると近世に於けるヨーロッパのリズムは、未開人のリズム、東洋人のリズムに比べて退化してるといへるかもしれない。

リズムが簡單になるといふことは或リズム感情が特別の意味を有たなくなり、かくて退化することを意味するものであつて、リズム感情退化の原理は文化人に於ては運動作用を用ふるといふよりも感覺的となり、従つて、舞踏の退化となり、之れに伴ふリズム感情の退化を起し、一面には多聲音樂(Polyphonie)の發展に伴ふて音樂の内容的質的方面が複雑化し旋律的要素が強められると共に、リズムは、極めて明瞭な形式を有つてゐるものだけの固定化を起すやうに考へられる。

然るに、單聲音樂(Monophonie)では、これに反して、リズムそれ自體を多様化す

方向に發展するやうである。この場合にあつては、リズムは單に、それを聴く場合リズム的なものが、非律的なものに比べて、把握され易いといふことに留らずそれを運動的に體驗して、リズムの有つ意味を體驗するのである。例へば、急速なリズムは興奮的であつて感情生活が昇揚した場合の運動として體驗せられ、反射的にそれについての經驗を伴ふ、かくて、各種の情緒がそれぞれ特有のリズムを有ち怒には怒のリズムが存在し、恐怖には恐怖のリズムが附隨し、快、平靜等のリズムが生起するやうになるのである。未開人にあつては、よく、これらの、リズムと、それに伴ふ特有の體驗とが結合してゐるから、遂には、各種のリズム感情の豫期すら起るやうになる場合がある。文化人にあつても、かゝる方面がないことはない。リズムを嬉ぶと共にリズムを運動的に内部的に模倣する傾向が生ずる場合、藝術品などを鑑賞することが容易なる場合は枚舉に遑がないであらう。

さて、リズムの形式には如何なるものがあるであらうか、吾々は先づ強弱リズムから考へ可能なるリズム形式の中、主なる場合のみに限つて例示することとしよう。何となれば、強弱リズムの可能なる形式は、二綴字的詩脚に四つの場合があり、三綴字的詩脚に八つの場合があり、四綴字的詩脚に十五の場合があるといふやうに多數考へられるが、主なるものは、或少數なるものに限られるからである。

二綴字的詩脚の基本形式は弱強(短長)格、と強弱(長短)格とである。

【註】

二綴字的詩脚にはこの外、強強格、弱弱格も存する筈であらう。吾々は今二綴及び三綴だけについて述べることにする。

(1) 弱強(短長)格 Iambus; Der Jambus



上昇的、興奮的、急進的（間隔時間短くなる傾向）

(2) 強弱(長短)格 Trochee; Der Trochaeus.

下降的、沈靜的、徐行的（間隔時間長くなる傾向）

三綴字的詩脚で主なるものを挙げると。

(3) 弱弱強格 Anapaest; Der Anapaest.

最も興奮的、活動的、争鬪的、攻撃的。

(4) 弱強弱格 Amphibrach; Der Amphibrachys.

興奮を和ぐ、輕快、歩行運動的、彈性的。

(5) 強弱強格 Cretic; Der Kreticus.

鈍重的。

(6) 強弱弱格 Doctyle; Der Daktylus.

多少興奮的。

日本詩歌に於けるが様に音數によるリズム、例へば、五七五、七七、のやうにリズム單位として五音をもつものや七音をもつものがあるが、時によると綴音をもつてリズム單位とするもの、語數を單位とするものがある。前者はゲルマン系の詩に見られ、後者は、支那の詩文に見られるやうである。

#### (四) 形式感情

Feeling of form; Das Formgefühl.

簡單なる形に伴ふて起る美的感情を形式感情といふ、この種の感情の起る客觀的條件を定めるには、隨意に、これを作り、かつ變化し

て見ることが出来、更に、それらの間に存する關係を數學的に表現し得べき可能性がなければならぬから、この意味で、幾何學的に簡單な圖形が便利とされてゐる。

傳統に従つて、述べると四つの方面を擧げることが出来る。

A. 形の分割 Division of form; Die Gliederung der Formen.

一定の形を如何に分割したときに最も心持ちがよいかの根本條件は左右相稱(Symmetry; Die Symmetrie)である。

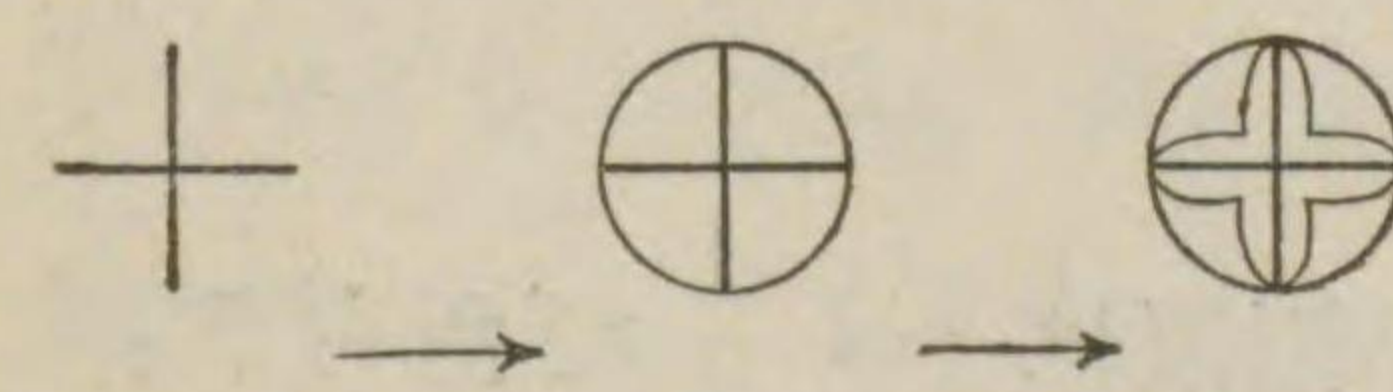
即ち 1:1 の割合は各種の建築裝飾等の根本條件であつて、これに合致するものは心持よく然さざるものは氣持ちがよくない。既に原始繪畫、裝飾等に、この原理に合致するものが多々である。が併し、只この原理に合致するだけで、複雑化を伴はないと強烈の印象を與へることが多い。

#### 【圖】

高橋健自著、日本原始繪畫、参照。 E. Stephan: Südseekunst 参照。

若し、左右相稱に何等かの文を附加して、露骨な相稱の域を脱すると面白味が加はることが多い。

第七十六圖 左右相稱と文様



第七十六圖の十字は、露骨の相稱

であるが右側に向ふに従つて多少の感じの柔軟性が加はるであらう。

この關係を考へるに最も都合がよいのは、我國の瓦の發達史であつて、奈良朝時代の瓦の模様は圓を六等分若しくは八等分し



多くは蓮の葉の形をとり、平安朝時代に於て、いくらか文を増し、桃山時代に於て諸侯の紋が入れられてゐる。この種の關係は美的になる一つの條件ではあるが然し單に複雑化するのみならず、多様中の統一が重要であることは述べるまでもない。

左右相稱は形體上の問題であるが釣合 (Balance; Das Gleichgewicht) となると形體上の相稱を意味するのみならず、形體上は左右異つてゐても、心的効果としての釣合をも含んでゐる。

繪畫に於ても、人物と景色とが濃度や遠近の感で釣合ひ、生花藝術に於ては長い枝と短い枝とが長さ、深さ、運動又は注意の方向、乃至興味等で巧みに釣合ふのである。

B. 縦と横との割合

一定の形の縦と横とは如何なる割合のとき心持ちがよいかといふことは昔からの問題の一つであつた。ウオルフ(Wolff) は、正方形をもつて最も心持ちがよいとしたが、多くの人々は、この外にいくら長方形の場合即ち 1:2 若しくは 1:3 のやうな割合の場合にも心持ちがよい場合があると考へてゐた。

今、縦と横との關係を考へて見ると二つの極限の間を往來してゐるやうである。

即ち一方の極限は  $1=1$  であつて、他方の極限は  $1=\frac{1}{n}$  であらう。

今、 $1=\frac{1}{n}$  に於て、(1)  $n>1$ ..... $\frac{1}{n}<1$

(2)  $n=1$ ..... $1=1$

(3)  $n<1$ ..... $\frac{1}{n}>1$

それ故、最も心持ちよい點はこの二つの極限の間に於て求められる筈である。

ツァイシング (Zeising) は、經驗的に心持ちよいと考へられる物體の縦と横とを測定し、一定の心持ちよい割方を提案した。これを黄金律 (黄金型、黄金切、Golden cut; Die Teilung nach dem goldenen Schnitt) といふ。

これによると、今、大なる方を  $x$  とし、小なる方を  $1$  とすれば、次の式が誘導せられる。

$x+1:x=x:1$

それ故、 $x=\frac{1\pm\sqrt{5}}{2}=1.618$  であるから、小:大=1:1.618 をもつて最も心持ちよい點とするのである。

【註】

ヴント(Wundt) は長方形に對する氣持良さの程度を考へ、黄金切及びその近傍を第一とし、これに次ぐものを現象的正方形 (1:1.26) をもつてし、この點から黄金切に至る中間に氣持ちよくない點のあることを示し、フエヒネル (Fechner) も四角形中、正方形及び長方形の長いものは氣持ち悪く、一定の長方形に限つて氣持ちがよいとしてゐる。

ツァイシングは、黄金切をもつて美しいものの從ふ規則とし古典的なものは、これに從つてゐるとしてゐるが、ヴントも示したやうに黄金切は美的なるものの切り方の中心であつても、この外に尙ほ美的なる點が多く存することは事實である。1:1.45 (菊版)、1:1.5

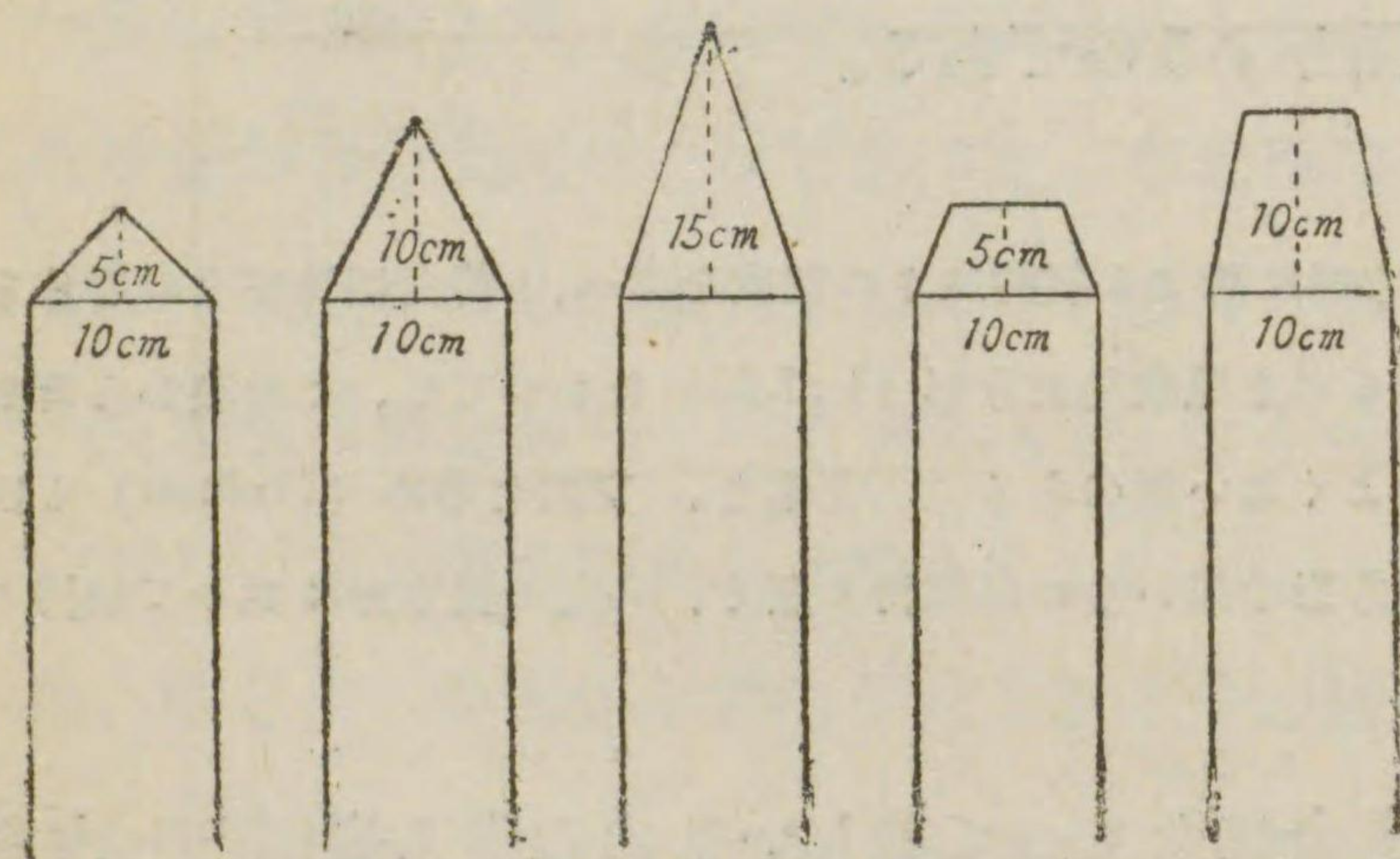


(官製端書)、1:1.625 (震災後官製端書)、1:1.5 (四六版)、等は  
さまで気持ち悪くはない。

黄金切は簡單なる方形物體の根本条件の一つではあるが形が異  
ると共に著しく變化が起つてくる、例へばゴシック建築は高く天空に  
聳え、建築全體の縦と横とは極めて大なる差をもつてゐるが而も一  
種の美感をさまたげない、これに反してギリシヤ建築は、縦がゴシ  
ク建築ほど長くはないが又獨特の美感を有つてゐる。

これによつて見ると横と縦との割合の気持ちよい頂點は一つに限  
られないで、條件が變化するにつれて他の點が存在するやうに考へ  
られる。

第七十七圖 實驗用圖形の一例



點はないか、

装置 上の圖形を印刷した用紙、鋭筆又は鋏

方法 第七十七圖に示した様な實驗圖形を一つづつ被験者に與へ

て頂上の形と釣合ふ長さとその下の長方形を切斷せしめる。そ  
して、この場合の縦の長さを記録する。そして頂上の形の條件  
の様々の場合について調査する。さうすると、多くの人々につ  
いて調査した結果一様の傾向があるか否かを吟味する。

次に、この種の圖形の縦を非常に長くして置いて、長くて調  
和する點で切斷せしめる。

それ故、この實驗は二段に分けて實施する方がよい。そして、  
何れを先にするかによつて、可なりの差異が出るから、交互に  
行ふのもよい。

結果 横と縦との割合を吟味する。

結果の記録

| 頂上ノ高さ  | 三角塔<br>(Opt. 1) | 塔<br>(Opt. 2) | 菱<br>(Opt. 1) | 形<br>(Opt. 2) |
|--------|-----------------|---------------|---------------|---------------|
| 5 cm.  |                 |               |               |               |
| 10 cm. |                 |               |               |               |
| 15 cm. |                 |               |               |               |

【註】

Opt. 1. とは短い方の気持ちよい點である。

Opt. 2. とは長い方の気持ちよい點である。

- 吟味 (1) Opt. 1. の場合、横と縦とは各の刺激について如何なる割合となるか。  
 (2) Opt. 2. ありや否や、あらば如何なる割合か。  
 (3) 如何にすれば、この種の實驗を適切に行ひ得るか。  
 (4) 適切なる結果の整理法なきや。

C. 輪廓線 (Contour line ; Die Begrenzungslinie.)



物體を美的にする一つの動機として簡單化し、統一化しようとする傾向があるから、物體の輪廓は、大體に直線形式が複雑な曲折あるものに比べて選ばれるが、眞正の直線形式は却つて、強烈な印象を與へるから、何等かの程度の軽い彎曲線が優つてゐるといはれる。一體、眼の本源的位置に於て、何等かの標準に沿ふて眼が運動する場合には、垂直にも水平にも直線運動をするが、若し、そこに何等の標準も存しない場合の眼の自然運動は曲線的であることは事實である。そこで、この自然運動に合致するものは恐らく軽い曲線であらう。この意味で、昔には、圓を作つてゐる程度の曲線を美とせられ、**ウインケルマン**(Winkelmann)は楕圓形を作つてゐる程度の曲線を美とし、**ホガース**(Hogarth)は、平面では波狀線を、空間的立體的には蛇狀線を美としてゐる。

何れにしても、何等かの彎曲線が美的であつて、原始繪畫、裝飾彫刻等から近代藝術に至るまで、美的に物體を示すために彎曲線は屢々巧に利用せられてゐる。

一つ二つの例を示すと、建築上に神社建築の様に直線美を利用したものに比べて、奈良乃至京都に残存する古寺院建築様式に彎曲線を巧に利用し特異の美を表現してゐるものは珍しくはない。殊に人口に膾炙する法隆寺金堂建築の美は、大き曲線をもつて力學的表現を志したものの代表作であらう。即ち一方には精密な比例美を示すと共に、他方には、大變、自由な美の表現がなされてゐる。

柱は太い膨みを有ち圓柱ギリシャ建築と似通ひ、而も、その程度が大きく、礎石には自然石を利用し、科栱二種を用ひ、一は推古時代特有の最も強い曲線の組立から出來た普通様式のもを内部に他は、この時代特有の雲肘木を外部に使用し、壁は漆喰、天井は組入、支輪はやゝ直線に近い力強いものである。

これらの雲肘木、科栱、支輪等は急に方向が轉換しようとする場所に媒介となつて美を助けてゐることはいふまでもない。

この外、奈良、法華堂の天平式佛像の美などは、こゝに擧げるまでもなく曲線の極めて巧みなる利用であらう。

建築に於ける柱の美觀は圓みや、その中に於ける裝飾に用ひられる曲線美によつて一層引立つことも屢々である。

最後に、草書に於ける曲線美は、強さと早さと方向の上に、エネルギーが表現され、力學的の美觀を示す特異なる一例であらう。讀者はこの外、曲線美を巧に利用された諸種の藝術美や自然美について考へられたい。

#### D. 類形の反覆 (Repetition of homologous parts; Wiederholung homologer Organe)

物體の興へる美は、全體として統一があるのみならず、局部と局部との間に深い關係が存在する、例へば、類形を反覆しつつ全體として統一を示すときは、美的の程度が一層増すことが多い。

人間の身體美は、脚と足との膨みが腕と手によつて反覆され、胸



の膨み、腹部の膨みを有ち、更に、下部が、どつしりし、上部が、やゝ軽味をもち、頭部によつて統一され、一定の比例美が加はつてゐるところに妙味がある。植物でも、類形の反覆を示してゐると美的である。

建築上でも、ヨーロッパ建築では古代及び文藝復興期に於ては黄金律や、左右相稱などが主で類形の反覆は従であつたが、ゴシック建築から特に目立つてこれが利用され特異の美を添へるに至つてゐる。東洋建築では、可なり古くから類形の反覆が志され、特に五重の塔建築の如きはこの典型的の一例である。

法隆寺の五重塔は我國のこの種の建築中の最も特異の一例である。我國の佛塔の普通様式三重、五重の中、五重として推古時代を代表してゐる。

【註】

三重、五重以外に天平時代以後各國々に出來た國分寺の塔は七重塔である。

この五重塔は總高約百尺、初層は方約二丈、三間五層であつて、層々の壁體の調和は、巧みな釣合をもち、軒は自由な氣持を表現し最もよく安定を保ち、九輪は全高の約三割である。かく下部は重味をもち、類形を反覆して上部は軽く立つところに妙味がある。

五重塔の様式によつては、東寺（京都）の塔、日光の塔の様に、上部下部の差少くても類形の反覆によつて調和してゐるものも少くないやうである。

第七十八圖 法隆寺金堂



以上、調和、旋律リズム、形式は、美的感情の起るべき、基本的の方面であつて、自然美なると藝術美なるとを問はず、これに基くのである。

生活感情 (Life-feeling; Das Lebensgefühl)

生活感情の意味

生活感情とは自己の生活の状態、即ち自己の身體的心的状態に係して起る感情情緒を總括する、例へば、新鮮さの感じ、壯快さ、健康感、生活の昂揚感、優等感、劣等感、熱に襲はれた感、心配感、嫌悪感等の諸感情であるが、これらは單に、感性的感情の融合したものと見ることは出來ない、感性的には快であつても、生活感情としては無味乾燥であることがある。それ故、この種の感情は比較的、感性的感情と獨立に存在し、比較的、對象とは關係が少く、そして意志に支配せられるものも少い。

一般的に生活感情は、自己優等視即ち自己主張の方向と自己劣等



視即ち自己を不幸と感ずる方向と結合してゐる。

#### 生活感情の自己的社會方面

生活感情は、自己の存在する環境から自己を區別して感ずるところに表現せられるから、一面には自己感情 (Self-feeling; Das Selbstgefühl; Das Eigengefühl) としての色彩を有ち、他面には、自己感情が他人を豫想する形をとつて所謂 社會感情 (Social-feeling; Das Sozialgefühl) としての色彩を濃厚に有つてゐる。

自己感情が、自己の身體的狀態に結合する場合には、身體的自己感情 (Bodily self-feeling; Das körperliche Selbstgefühl) といひ、自己の内面的狀態に結合するときは、心的自己感情 (Mental self-feeling; Das psychische Selbstgefühl) といふことがある。

先に述べた様に自己感情が社會感情としての色彩を濃厚にもつ場合は多々ある。自分の氣に入る、傲慢、虚榮心、名譽心、屈辱、嫌遜、羞恥心等は既に、自己の感情であつて而も社會感情たるところに本質をもち、他人の存在を豫想して、それとの關係に於て生起する。これと同じやうに、他人の不幸を喜ぶ心、嫉妬心、慘酷、同情、同悲、同喜、愛嬌、好意、信賴、尊敬、輕蔑、無視、賞讚等も社會的感情としての色彩が濃厚である。

かく、自己感情は自己と異なる他人が自己に豫想せられることによつて、これと對立し、區別し、自己の狀態を感ずることによつて益々その特色を發揮する。

これらの關係を例示するがために自己感情であつて而も社會感情と考へられる一つ二つの場合を分析説明を加へることとしよう。

#### 傲慢と虚榮の心理

傲慢は他人を自分から距らしめようとする自己感情であつて、そこに明白に他人が考へられてゐなくとも、少くとも、他人を、その背景に豫想し、裏面に感じてゐる。

換言すると、自己の價値を意識するの尺度として他人而も自己以下の他人を豫想してゐる。

かく他人を豫想するが、この場合、その他人を自己に従屬せしめようとするのではなくて、他人を排斥しようとする傾向が強い。傲慢は排他的である。即ち空間的ではないが心的に他人を距らしめ、自己より遠のけて生活する、これ恰も、當該他人と自己との間に真空が存在して、この間を距ててゐるにも等しい。それ故、傲慢は、これをもつ個人を孤立せしめ、遂に最も傲慢なる人は最も不幸なる人となる傾きがある。

社會心理學的にいふと、傲慢は、その條件として社會を豫想し、特殊な方法で社會の分離作用を營むこととなるであらう。或は一つの社會層に傲慢が発生すれば、こゝにその社會層を他の社會層と區別するやうになり、或は社會運動が傲慢を契機として上層、下層の分離を起し、極めて排他的となることは史實の示すところであらう。いふまでもなく、排他は同時に寂莫を意味し、何人とも、何れの階



級とも同等な位置をとることが出来なくなり、遂に社會の廢殘者となるのである。

虚榮も亦必ず、他人を必要とするが、傲慢とは異つた意味に於て他人を必要とする。傲慢にあつては、自己の價値を區別するの意味に於て他人を必要とするが、虚榮は、これに反して、自己の具體的な若しくは豫想的な價値を保證せしめる人としての他人を必要とする。即ち傲慢の場合とは異つて、他人が存在することを知るのみでなく、他人の承認、若しくは賞讃を求め、他人が自己の名譽を保證することが重大である。この故に傲慢と異つて、虚榮には他人に對する結合性が強烈に表現され、社會的には却つて結合作用を營むやうである。

#### 羞恥の心理

羞恥は傲慢とは反對に自己感情の沈降する状態に當るのである。そして自己が他人から觀察せられ、批判せられるといふ意識に根柢がある。

勿論、時によると孤獨でも羞恥を感ずることはあるが、この場合でも、見物人としての他人に對する感じが背景となつてゐることは確かである。

この故に羞恥に特異な反應としては引込み、隠れ、他人から逃れる作用に中心點がある。

性的羞恥には特殊の形態があるが、これなども先天的と見るより

も社會に於て文化の進展と共に發生した一般羞恥の特殊の場合と見られる。

社會感情として特殊に發展した生活感情は多々であるが、生活感情一般から見れば、力の感じ、安心の感じ、選ばれたる感じ、弱者としての感じ等枚舉に違がない。

#### 知的感情又は情操 (Intellectual feeling; Das intellektuelle Gefühl; Das Sentiment)

##### 知的感情の意味

比較的複雑な内面的作用殊に知的作用に伴つて起るところの静かな高尚な感情が知的感情又は情操である。

即ち、自己の内面的生活殊に理念の發展に従つて種々のゲシュタルトをとつて表現するものである。それ故、情緒と異つて、生活上の利害關係を離れ、身體的變化顯著でなく、本能的ではないから個人の修養の程度で可なり個人差を生じ、氣分の如く有機感覺に關係してゐないで、向ふところの對象が確定し、必ず一定の知的作用を伴つてゐるのである。

それ故、便宜上、眞、善、聖、美の四個の理念に従つて、論理感情即ち自己の思考に隨伴するもの、倫理感情即ち自己又は他人の行爲に關係するもの、宗教感情即ち不可知的存在者に對する畏敬に關係するもの、及び、自然美、藝術美を翫賞する場合若しくは人生に直面する際に關係する美的感情の四種に分つて、その大要を考へて置



くこととしよう。

### 一、論理感情 (Logical feeling; Das logische Gefühl.)

吾々に課題が定立せられ、それが解決せられるに當つては、そこに種々の感情が誘發せられることは、よく人々の知るところであらう。

既に課題が定立せられることは、そこに何等かの感情的基礎がなくは考へられない。物に對する驚愕の情、疑惑の情、欠乏の情、好奇の情、名譽の情、自己優越の情等、凡て、課題に對する要求水準の上昇の意味に於て、そこに作用する感情的基礎がある筈である。

課題が採り上げられ、それが解決的方向に向ふがためには、豫想的方法的意識がそこに出現しなければならない、こゝに於て、課題解決過程にあらはれる典型的なる感情は、一致の感情 (Feeling of agreement; Das Uebereinstimmungsgefühl) と矛盾感情 (Feeling of contradiction; Das Widerspruchsgefühl) 及び疑惑の感情 (Feeling of doubt; Das Zweifelsgefühl) とであらう。一致の感情は更に真理の感情 (Feeling of truth; Das Wahrheitsgefühl) に發展し、矛盾の感情は虚偽の感情 (Feeling of falsehood; Das Irrtumsgefühl) に發展する可能性がある。

それ故、課題解決過程が事實上、進展するには、先づ、何等かの感情状態が萌芽し、更に知的作用が進展し、遂に、その進展に伴ふて種々の論理的感情が誘發せられ事實上、可なり複雑な形をとると考へねばならない、が併しこの種の問題は思考論の問題として後に

記述する部分に委ねることとする方が賢明であるやうに思ふ。

只茲で述べて置きたいのは具體的に論理的感情が出現する場合を考へるに當つて、こゝに、論理感情に制限を附加して置く必要があることである。といふのは、以上述べた意味の論理感情は、要するに好奇心、知識欲の満足を契機として、真理へ向ふ意味に於て、本來の論理感情ともいふべきものであるが、この外に、成功的に、問題を解決しようとする自己意識感情、心的活動を喜ぶ機能的感情ともいふべき一種の知的感情の存することを忘れてはならない。前者は、心的緊張又は心的活動の成功を目標として必ずしも真理へは向はない。後者は、機能それ自身を喜ぶ程度のものである。この意味に於て、これらは寧ろ生活感情としての反面をもつが同時に、知的作用に關係するところも亦大である。

### 二、倫理感情 (Ethical feeling; Das ethische Gefühl)

#### 倫理感情の意味

自己乃至は他人の行動動作に關係して一定の價值感情として起る知的感情を名づけて倫理感情といふ。即ちこの種の感情は、道義的法則、善、正義、愛、犠牲、等の種々なる理念に關係すること、恰も論理感情が真に關係して起るにも等しい。

若し、この感情を發生的に見れば、先に叙述した生活感情としての自己感情に、その起源をもつてゐる。自己の生存する當該環境が自己を助長し、増進するか、若しくは自己を禁止するかによつて起る自



己増進の感情 (Self promoted feeling; Das Selbst-Förderungsgefühl) や 自己禁止の感情 (Self-inhibited feeling; Das Selbst-Hemmungsgefühl) は要するに自己感情の變化の二大方向であるが、この何れの感情が起る場合に於ても自己の欲求水準が存在し、この移動が生起してゐる。欲求水準を昂揚する意味に於て作用するものは、それとの關係に於て是認を伴ひ、これに反するものは非認せられる傾向がある。それ故、自己増進感情はやがては倫理感情としての是認の感情 (Feeling of approbation; Das Billigensgefühl) として發展し、自己禁止の感情は非認の感情 (Feeling of disapprobation; Das Mißbilligensgefühl) になる傾向がある。是認が起るには既に、そこによし漠然としてゐるにしても、何等かの理念が豫想される分けである。

さて、自己感情は傲慢虚榮名譽心、謙遜、後悔、羞恥等凡て社會的性質をもち他人を豫想するから是認非認が他人との關係で考へられ、他人が自己に對して厚意的か否かによつて起る。他人の不幸を喜ぶ心、嫉妬、慘酷、同喜、同悲、愛、嫌惡、好意、惡意、報復、信賴不信、尊敬、侮蔑、威脅、賞讃、惡口等の如く一般に自己が他人に對して傾性、反撥をもつことはこれらを根基として他を主とする感情が發展する可能性があることを示してゐる。

然るに、一般的には、心的發達が幼稚であると、自己感情が他人感情によつて醇化せられない、即ち、他人を豫想するが、動作の中心點が自己に置かれる場合も珍らしくはない。

が併し心的發達に伴ふて、自己の擴大、自我觀念の發達と共に最初、肉身的自我觀念から自己の所有物、家族、同種族、國家を含むに至り、遂に内面的自我の發展となり、これに伴ふて他人の肉身的自我から次第に心的に内面的自我が考へられ意志的他人が考へられるやうになる。かくすると意志的他人を豫想して、この意志的他人が自己に對してなす行動動作が是認せられ非認せられるのみでなく、第三の意志的個人を豫想して、これに對する第二の意志的個人の行動動作が是認せられ、非認せられる場合が生ずるのである。かゝる程度とならば、そこに明瞭なる倫理感情の存在が考へられるが、他人の如何なる意志目的が是認せられかつ又非認せられるかは、その個人のもつ道德的水準の如何に基くものであつて、かゝる道義的水準は、その個人の成長の歴史性や、社會の傳統、文化の條件によつて變化するものと考へねばならない。

#### 道德的水準の發達と兒童の倫理感情

吾々に存する道德的水準は環境の情勢が與へる増進禁止の二方向の陶冶に基いて、それらが或は賞として作用し、又は罰として作用するにつれ次第に固定化するものであるが、かく道德的水準が固定化し一定の理念に従つて活動する様になる中間段階に於ては、多くの差異が発生し、兒童は成人と異つた動機で活動する場合が稀ではない、殊に兒童は道義的判斷をそのまま表現しない場合があると共に、性的成熟に至るまでは極めて著しく環境成分に支配せられるか



ら、これを研究することが可なりの困難を伴ふ次第である。

【註】

児童、乃至、青少年に於ける道義意識の問題について数多くの研究が出てゐるが、こゝに、それらの二、三の問題について觸れて置かうと思ふ。

シエーフア(Schaefer, M.)は12歳—18歳の伯林の中層及び下層の青少年(普通青少年1133名、精神薄弱141名)について第一、「何故に盗みをしてはならぬか」第二、「何故に虚言を吐くことが禁ぜられてゐるか」の二つの質問を提出して調査して見た。それによると15歳から始めて子供の半数が洞察ある価値判断をなし、14歳に至るまでは利己的であつて例へば、天国へ行くためにといふ種類の答が多かつた。

彼は調査上、四つの動機が働いてゐるといつてゐる。即ち(a)宗教的動機(例へば、地獄の火を恐れ、神を冒すを恐れる)(b)個人的動機(刑務所に入れられるため、恥辱、自尊心のため)(c)家庭的動機(両親の名折れとなる、家庭の名譽を傷づけるから)(d)社會倫理的動機(隣人を害するから、正義感から、國家の權威のために)

これらの中、家庭的動機は余り變化ないが他の三つの動機は發達と共に可なりの變化があらはれる。

一例を示して見ると

|     | 宗教的動機 | 個人的動機 | 社會倫理的動機 |
|-----|-------|-------|---------|
| 12歳 | 48%   | 12%   | 37%     |
| 17歳 | 11%   | 29%   | 60%     |

Schaefer, M.: Elemente zur moralpsychologischen Beurteilung Jugendlicher, z. f. pädag. Psychol. 14, 1913. 参照。

シエーフアの結果はフィツシア(Edmund Fischer: Kind und Eigentumsvergehen, Z. f. pädag. Psychol. 29, 1923)によつて證明せられてゐる。

シャルロット・ビューラー(Charlotte Bühler)はハース(Johanna Haas)と共に「吾々が虚言しなければならぬ場合があるか」といふ質問をもつてする同質同名の論文(Gibt es Fälle, in denen man lügen muss? Wiener Arbeiten zur pädag. Psychol. 1. Wien 1924.)に於てウィーン市小學校生徒7歳—12歳の男子132名、女子117名を

被験者として調査し社會的動機(秘密を保つために、他人を慰めるために、喜びを準備するために)と非社會的動機(恐ろしい場合、困つた場合、恥しいから、馬鹿に欲しい場合)とに分ち幼少の場合、男子は反社會的傾向があり、女子は社會的であるが大きくなるにつれてその傾向が減少するやうに考へてゐる。

アロキス・フィツシア(Aloys Fischer)はこの種の問題に興味を有ち道德心理的研究方法の問題を論じ、(Moralpsychologische Untersuchungsmethoden, Z. f. Pädag. Psychol. 29, 1928) 道義的發達を知る最良の方法は計畫的科學的意識的觀察であつて、色々の條件による動機を確め、意識と動作との一致、不一致を決定することが重要であるが、例へば道義概念の理解關を定めたり、意識的義務の範圍を質問したり個人の理想を調査したり他人の道德行爲を批判させたり、實際的位置に於て、又は、詩的作品等に於て、意志的決定等を求めることは研究の補助的方法たるに留まると考へてゐるやうである。

彼の門下、ライヘンバッハ(H. Reichenbach)、コルブ(E. Kolb)、ルランド(M. Ruland)等は興味ある研究を公にしてゐるが、就中コルブ(E. Kolb)は從來の研究成果を考慮して道義的發達の四段階を擧げてゐる。(E. Kolb: Die sittliche Entwicklung der Heranwachsenden; Pädag. Monogr. XX 1925.)

コルブの四段階は次の通りである。

- a. 道義前期……………3歳まで……………動物的無邪氣
- b. 素樸的道義意識の段階……………7—8歳まで  
この時期では自己の價値の洞察からでなく、教育や教への影響で環境に基いて善いことや許された事を、悪い事、禁ぜられたことから區別することを覺える。
- c. 批判的道義意識の段階……………前の時期に續く時期  
自己の意識から價値を定めるが、自己の評価と他から來た要求との争闘が起り得る。
- d. 完成的道義の段階……………成熟期  
意志決定が義務的な客觀的に妥當な原理によつて起る。道義的な自尊心が動作の目的となるやうになる。



これらの四段階は意志的決定の成立と妥當についての意識が中心であるが、この外道義要因としての義務、動機、理想等によつて發達段階が考へられることは事實である。例へば10歳前後までは家庭的學校的義務が支配し、それ以後次第に社會的公共的義務が支配すると考ふるが如きこの一例である。

さて、**コルブ**が擧げた道義前期に於ても已に何等かの名譽感情が發展することは事實であつて、若し自己劣等視感情や自己優等視感情の發展を迎るときは興味ある問題が横はつてゐるであらう。

道徳意識の發達は面他から見ると兒童の生活に如何に規則意識が働きかけるかの問題であるから規則一般が兒童の生活に於て如何に作用するかの研究も亦そこに多くの期待をもつて迎へられねばならない。吾々はこの種の問題について最近の**ピアジェ** (J. Piaget) の道徳意識の研究を指摘するに留めて置かう。』

凡そ、道徳的水準は發達によつて、その程度を異にするから、従つてかゝる水準との内面的即事的關係で出現する道徳的標準が、文化的社會的自然環境を異にするにつれて變化すること勿論であらう。道徳標準發達の歴史に徴するに、他律道徳としての超越道徳即ち吾々を超越する世界から神佛が、吾々に一定の道徳的法則を與へると考へられる思想は轉化して内在的道徳としての自律道徳となり、吾々の意識の中に道徳の標準を求めようとされたが、それにも拘はらず道徳的努力に標準を置けば或は一面、快樂説となり、他面は嚴格主義となり、道徳的目的に標準を置けば、個人主義と愛他主義とに分離するやうになる。

かくて、それぞれの時代には又社會としての一定の道徳理念が發生し、それぞれの時代を特長づけるのである。

さて、倫理感情は個人の心的生活に於て極めて重大なる一面を形成してゐるものであるが、一般に幼兒未開人等の心的體制には利他的方面が缺損するか若しくは未發達である場合が多い。成人に於ても人によつて、この方面にも著しい差異があるが、最も極端な利他感情の缺損を**道徳狂** (Moral insanity; Das moralische Irresein) とひ、甚しく冷酷な氣質を示してゐる。

#### 【圖一】 良心について

倫理學上いふ**良心** (Conscience; Das Gewissen) は、これを心理學的にいへば、感情を土臺として成立した價值評價の結晶に外ならない、そしてこの指導精神は、善 (Goodness; Das Gut) であるが、善の内容的方面は個人の發展と文化の發展によつて變化するのである。

#### 【圖二】 義務意識について

倫理感情の一つの具體的表現としての**義務意識** (Duty consciousness; Das Pflichtbewusstsein) の研究も興味のある一面である、即ち一定の行動が禁止せられ命令せられると、その結果、個人はそれに責任があると感じるやうになるのである。兒童の發達から見ても、**コルブ** (Kolb) の所謂、素樸的道義意識の段階ともいふべき時期以前に於て既に何等かの勞働義務の意識の發展することは興味ある現象である。即ち、吾々の觀察するところによると既に、5—8歳の間に於て、子供は、理想主義者としての世界を脱し極めて現實的に行動するやうである。

子供の社會的活動の發達を見るに、子供は最初から何等かの意味で社會的であつて、只發達するにつれて、その意味が變化するやうである。即ち、1歳の子供は接觸的の社會活動を、2—4歳の子供は、保護者に對する特定の愛着的社會結合を5—8歳のは次第に「他人」一般に結合し協同動作への結合が發生する。

それ故、幼兒は全然非社會的であつて5—6歳頃から突飛的に社會的になるといふことは適切な見解ではないが、それにもかゝらずこの時期から協同動作の著し



い萌芽があるといふ意味に於て社会的であるといふのは正しい。この意味に於てピアジェ (J. Piaget) の見解は解釋されなければ、論旨の正鵠を失ふやうになるであらう。

### 三、宗教感情 (Religious feeling; Das religiöse Gefühl)

#### 宗教感情の意味

宗教感情とは、吾々の心的衝動體制に根基をもつ各種の欲求や願望を起し、若しくは、これを満足することが出来るところの不可知的存在者を畏敬し、これに歸依し、祈願し、これに感謝する際に生ずる各種の状态的感情を名づける。こゝに状态的といふのは、一定の不可知的存在者を対象として、これに結合して起るからである。

#### 【註】 宗教の本質

元來、宗教は種々な存在形態をとり、従つて或は「神と人との交通」といひ、或は「絶対に皈依するの心」若しくは「世界を支配する實在の承認」「高き世界秩序に対する信仰」等これを定義するもの枚擧に違がないが、これら多くの定義を通じて神佛を絶対者、無條件的存在者と眺め、これに対する畏敬を重大な要因としてゐる。即ち一般的には不可知的存在者 (不可視的、無條件的絶対者) に対する畏敬に本質をもつてゐるといふことが出来る。若しこれを尙ほ分析的にいへば、(一)は不可知的存在者、(二)人間の頼りなく助けなき意識、(三)は皈依、祈願、感謝の意識、(四)は報謝の活動の四側面を含んでゐる。即ち(一)(二)(三)は往相廻向の問題であつて(四)は還相廻向の問題である。勿論、宗教によつて、その説くところの重點の置き方が異つて居り、従つて、こゝに異説の出るべき餘地はあるが、例へば往相廻向の問題を説きながら還相廻向の問題を必然的の問題として見るが如き、つきせぬ興味ある問題が横はつてゐるやうである。

そして、どこまでも不可知的存在者に対する畏敬が中心であるが、かゝる畏敬は只單に不可知的存在者の存在することのみによつて生ずるものではなくて、その根本

の基礎は吾々の心的體制の根柢に萌芽する願望欲求にあつて、不可知的存在者が、吾々に對して如何なる関係をもつかによつて種々の様相を呈するのである。

不可知的存在者例へば、實在の本體ともいへる靈が自分のもつ願望や欲求を禁止するか促進するかによつて、やがては、かゝる存在者そのものが人間のもつ願望や欲求の種々な形で詩化され、理想化され、かくて、詩化され、理想化された理念に對して複雑な感情が誘起せられるやうになる。即ち不可知的存在者の行動が、自己に對して愛的に、報酬的に働くか、又は刑罰的に、脅威的に働くかによつて、それぞれ複雑な感情が起るが、不可知的存在者の活動それ自身は吾々の五感に觸れる現象に示現すると考へられ、自然現象 (荒の日、嵐、静寂、太陽、夜等)、人間の事件、のみならず、各種の理念 (神についての理念、地獄についての理念、畜生についての理念等) についても各種の宗教感情が発生する。

かく考へると、宗教感情の一つの基礎は吾々のもつ悲哀恐怖、希望、怨恨、愛慕等のやうな一般的情緒の中に横はつてゐると見ねばならぬ。

#### 不可知的存在者の思想の發生の動機

人間に不可知的存在者の思想が発生する動機は多々あるやうに思はれる。そして如何なる不可知的存在者が考へられるかは、その人間の心的體制の發達程度や文化の條件に規定せられ、結局、宗教的水準の程度に依存する問題であるが、今吾々は當面の必要上、極く大體



論に留めて置くこととしよう。

- A. 人間が経験する物體及び諸現象には、一時的に経過するもの、一時的にしか見えぬもの、全部見渡すことが困難なことがある。かゝる場合、想像が作用する餘地が存すること。
- B. 現象に内在する力の存在の思想の發生。

幼兒や未開人に於ては、ともすると、身體は動かされるものであつて、動かすものは身體と異つたものが内在するやうに考へる傾向がある。これ、いはゞ靈の思想であつて、靈は力であつて、身體と結合して一體をしてゐるとの信仰である。例へば、身體の靈骨の靈、腎臟の靈、血の靈、毛の靈、爪の靈、凝視の靈等の信仰はこの一種である。死屍に對する恐怖が低級民族に於て文化民族に比べて強烈であるのは、死人に内存する神祕な力があるとの信仰に負ふ場合が多い。かゝる内在する神祕力の有用又は有害な作用について屢々慣習が發生する。例へば死人の靈を利用して、敵に向はしめる種類の魔法や自己の爲めに利用して病氣、不運を防ぐ慣習の類はこの種であらう。

- C. 吾々の夢又はこれに類似する経験で、心的活動が昂揚して肉體的自我から心的自我が分離するのを感じ、自己の身體は舊位置にあつても心は時空上無限であるとの思想を誘起し、そこに靈的實在があるとの思想が起る餘地がある。恍惚の狀に於て肉體的自我に對し遊離的靈的自我の存在を想起せしめることは自然であつ

て、この思想は更に擴張せられて人間のみならず各種の動物にも逍遙する力乃至、靈が考へられに至ることも稀ではない。例へば、所謂、形式靈の思想はこの一種ともいひ得るであらう、形式靈は時に陰影的の靈と考へられ、身體から見て一種の陰影たるの觀をもつてゐる。

この種の思想は、更に、生物の呼吸、空氣の靈等の思想を起し、引いては、これらの靈力を形態化し、靈蟲、靈動物又は靈鳥の思想を伴ふことも稀ではない。

- D. 人間に恐怖を起し戰慄を感じしめるもの、危険を感じしめるものを除かんとする傾向が人間にあるが、これと結合して、これをなし能ふ靈の存在を豫想するやうになる。さうすると、露の不死の信仰がこれに結合し、肉體は亡ぶとも靈は残つて他の生物に形を變化して留るといふ所謂輪廻の思想が生じ一方には、靈は死者と極めて密接の關係をもち、他面には、各種の動物、植物、深海、森林その他、地上、天界に住み、人間に何等かの戰慄を起さしめる存在者と考へられるやうになるのである。

これらの動機は、主として、相互に協合して不可知的存在者の思想の發展を促すものと考へれるが、自然民族の中には、往々、特殊な形式を残存してゐる場合も稀ではない。

【註】 トーテム信仰とタブ (Totemism and Tabu; Totemismus und Tabu)

トーテミスム (Totemism) とは特定の動物崇拜であつて、トーテム (Totem) は



普通には食物となる無害無危険の特定動物、稀には、植物、自然力（雨又は水の如き）が或族又は部落の守護神、救済主として尊められ、これに所屬する各人は、これを尊信し、一定の義務を強要せられ、かくて、トーテムとなる物を、その族の記號として用ひてゐるのを名づける。

Frazer, J. G.: Totemism and Exogamy 1910

Andrew Lang: The secret of the Totem 1905

W. Wundt: Völkerpsychologie, Mythos und Religion

S. Freud.: Totem und Tabu. 等参照せられよ。

それ故**トーテム**は一般的には動物(又は植物)であつて、同時にそれは、その族の守護神であるから、それに對する義務を強要せられ、それに屬する全員が、その名を用ひ、その名を用ひるものは同一祖先に皈せられる。その場合の根本義務は、その動物を殺さぬこと、害せぬこと(殺すと往々死刑)であつて、これに關聯して同一の**トーテム**に屬するものは結婚することを禁ぜられる。(結婚の禁を犯すものは一般的には死刑だが然し所によつて寛嚴がある。)そして**トーテム**は母系又は父系によつて遺傳せられる〔例へば父方カンガル( Kangaruh) 母方(Emu. 駝鳥様の鳥)との結婚の場合子供は母方のエム(Emu)といふやうに〕。

興味あることには、**トーテム**は必ずしも場所によつて制限せられない、時に、同一**トーテム**に屬するものが分離して生活する。元來**トーテム**(Totem)といふ名稱は北米インディアンが用ひてゐたものを1791年、英人**ロング**(J. Long)が「**トーテム**」(Totam)と訛つて用ひてから學界の注意を惹くに至つたものであるが、現存してゐるのはオーストラリア(Australia)、アメリカの南北の一部、オセアニア(Ozeania)のサモア(S. moa)、フィデチ(Fidschi)、東洋方面であつて、各種の**トーテム**があるが、動物**トーテム**は、多くの場合二つの種類に分れてゐる。

一は靈動物として蛇、蟻、鼠、鰐魚、夜鳥等の類であつて、**トーテム**所屬の人々ばこれらを害することを禁ぜられる。他は狩獵動物、家畜の類で殊に走ることの早きもの、急にゐなくなるもの、人間にとつて一定の價值があるものが選ばれるのが普通である。

從來**トーテム**起源を説明する種々なる學説があるが何れも適確な説明を與へない。例へば(a)人間の祖先に動物を食することが害となつてこれを禁じたことに基く、例へば蛇**トーテム**の類(b)**トーテム**の名稱が起りこれが祖先崇拜又は守護神の意味と結合したとするもの(c)食用動物に對する祭祀が始めて、それから**トーテム**が起つたとするもの(d)離婚を防ぐ手段として發展したとするもの。

この種の説明を如何に與ふべきかは當面の問題ではないから深く觸れることを避けたいが、一言することを許さねるならば、**トーテム**として特に異様の生物が採用されてゐることは、この種の理論を考察する場合、注意されなければならない、勿論一つの**トーテム**として固定するには色々の條件が働きかけてゐると推定は出来るがこの種の場合でも、その根本は人間の**力系的法則**(意志動作論、性格論参照)に基いて生起することを忘れてはなるまいと思ふ。そして、その他の點はそれに附加されて意味をとつた場合が多いとも解釋される。

#### タブ(Tabu)

**タブ**(Tabu)はポリネシア語から由來し(古ローマでは Sacer; ヘブライ語では Kodausch といふ)ノア(Noa)即ち「普通、一般」「日常茶飯事」「誰れでも手に入れられる」等の意味の正反對であつて、一面には「神聖であること」、「清められたこと」を意味し、他面には、「ものすごい」「危険であること」「禁ぜられたこと」等を意味し、従つて總じて神聖なるものとして畏れ、かつ、敬ふとの意味をもつてゐる。

かゝる**タブ**には(a)自然的直接的のもの(人又は物に固着する神祕力(Mana)の結果である)。(b)派生的間接的の**タブ**(直接的の**タブ**から間接的に派生するもの)。後者に三つの區別がある。(一)は生涯に獲得したもの(二)は永久的**タブ**であつて僧侶又は酋長等の支配者から世襲せられるもの(三)は一時的の**タブ**であつて(一)と(二)の中間的位置をもつものである。例へば、或女性が或男性に一時的に愛着をもつと**タブ**を得ることがあるの類である。

**タブ**の目的も亦色々あり得る。主なる場合を擧げると、

(1) 酋長、僧侶又特殊の物體を危険から防ぐこと。



- (2) 弱者(女子、子供)を酋長又は僧侶のもつ神祕力から保證してやること。
- (3) 死屍に觸れたり、特定の食物を食する場合の危険を防ぐこと。
- (4) 重要な生活事件例へば出生、成人式、結婚等の妨害されるのを防ぐ。
- (5) 子供又は両親に來る危険に對して保護すること。
- (6) 所有品、土地等をタブとして保護すること。

そして、タブを犯すものはタブがこれを復讐すると考へらる。

タブはポリネシア(Polynesia.)、アメリカ(America)、アフリカ(Africa)、北部及び中央アジア(Asia)に現存する。

要するに、タブの起源は人間とその靈力に固着するところの魔力の思想であつて無機體に及ぶまで延長せられるがトテミズム(Totemism)のトテム動物の如きものも考へ方によつてはタブに本質があると見なければならぬ。そしてタブは人及び物體を神聖なものとしてかつ敬する思想の表現であるが、これに類する状態は文化人の間にも往々見られる。即ち人によると強迫的觀念が顯著であつて特にある物體にこれを感じ、強迫症又はタブ病(Tabu disease; Tabukrankheit)を呈するものが稀ではない。例へば、物體に觸るのを恐れる接觸恐怖症(délire de toucher; Berührungsangst)の如きはこの一例である。タブが一物體から他物體へ傳達されるやうに接觸恐怖症も一物體から他物體へ傳播する。これ恐らくフロイド(S. Freud)派の人々が考へてゐるやうに感情的興奮が一物體から他物體へ移動されるのであるから感情の多價性(Ambivalenz)であらう。

### 宗教感情發生の根源

凡そ、宗教感情の根源は一面は、吾々の衝動體制に存し、他面は不可的存在者に對する思想の發展に基くことはいふまでもないが、就中、主要な役割を演ずるものは、何れかといへば、恐怖、戦慄等の感情的興奮であつて、恐怖を感じしめる死人の靈、その他、危険を感じしめるものは、これを除かうとし、これを除くために、かゝ

る神祕力を有つと豫想せられる實在についての思想が萌芽するのである。宗教の一つの原始的形式として魔神の信仰や、魔法の慣習が各地に散在するのも、この種の表現の一例であらう。蓋し、魔神の最初の形式は、人間のもつ瞬間的情绪(例へば病的状態、悪夢、怒等の場合の視覚的有機感覺的變化)に一定の形態を與へ、そして、かゝる形態を有つものが實在してゐるとの思想が生れる。魔女、惡神の多くの形式は恐怖、驚愕、憤怒等の形態であつて後に、これに美的情緒が加味せられ、種々の表現をとるやうになる。が併し何れにしても人間の心内の動き及びその表現と密接の關係あることはいふまでもない。

### 【註】

東洋に於ける佛像の藝術殊に異つた作家が、同一の佛像を如何に異つて表現せるかを觀察されたい。

かう考へてくると、宗教感情は、それが生起する場合、その個人が、全く助けなく感じ、絶體絶命の境地の體驗がそこに存することを前提條件としてゐる。

恐怖を感じしめ、戦慄を感じしめることは、同時にその個人は、自己の周圍にマイナス(Minus)を多分に有つのみならず、そのマイナス(Minus)の配列が、その個人にとって動きのとれぬ状態にあるのである。即ち、宗教感情は、先づ、この場合に於ける自己の眞なる立場の自覺から、それを契機として展開されるのである。自己の



真なる立場の把握は、自己の劣れること、自己の醜さ、人間の實相等についての考へ方を起し、かゝるマイナスの世界からの離脱が意圖され、かゝる離脱をも可能ならしめる實在への思慕を誘致するであらう。

## 【註一】

解脱の方法については或は自力觀といひ他力觀といひ、結局、小我を滅して大我に生き、眞實在の攝理に救済せられるの方法であつて各宗教についてそれを極められたい。

## 【註二】

マイナス(Minus)の世界からプラス(Plus)の世界への思慕、マイナスの世界其儘プラスの世界となるの考へ方、隱遁的宗教と、現實的宗教、これらの存在形態は、みな人間の力系的法則(Dynamical law; Dynamisches Gesetz)によつて生起する現象にすぎない。力系的法則については意志、性格の部参照。

さて、魔神信仰は先に述べたやうな意味に於て一つの興味ある現象であるが、これは更に人間生活と密接の關係がある各種の物體や自然にも宿すといふ思想を起す場合が屢々である。植物魔神、若しくは、人間の願望を満すと考へられる文化的魔神の諸形態はそれである。

魔法の慣習も、その根柢には靈思想が存在し、恐怖を起し危険であるものは、これを除き、又は靈力を利用して敵を苦しめ、これを防ぎぐの手段として利用せられる。

## 【註】 魔法の種類

魔法にも色々の區別がある (a)例へば近接魔法、遠距離魔法 (b)直接魔法(靈と靈

との直接結果、例へば、悪い眼つきをする) 間接魔法即ち身體に先づ影響を與へ間接に靈へ作用するもの例へば、象徴魔法(寫眞、動作、心臟の形を傷けるが如き)。(c)自己魔法即ちそれ自身魔力あるもの及び、借用魔法、例へば 神祕力があると考へられる物體をもつと魔力を得るが如きもの。

かくて人間に對し恐怖を起すのみならず、これを除く力をもつものを嘆賞し、尊信し祈願しこれに厚意を求めんとするに至る場合がある。

## 【註】 祈禱と犠牲の種類

厚意を求める主なる形式は祈禱と犠牲とである。

祈禱に、願ひの祈禱と感謝の祈禱があり、犠牲には願ひの犠牲、感謝の犠牲、贖罪の犠牲がある。

祈禱や犠牲の精神を誘發する動機は色々あるが、殊に來世思想に對する信念と共に益々強固になるやうである。例へば、「正しいものが榮えなければならぬ」といふことは、人々が現世に於てもつ一つの念願であるが、現世に於ては必ずしも、かくなつてゐない、こゝに於てか、現世に於て榮えない補ひは來世で神佛の裁判を受くべきものであるとの思想となつて責任意識を伴ふことになる。さうすると、そこに起る恐怖心配の心情は神に對して慈悲を求めようとする形をとるが、殊に祖先の罪が子孫に酬ゆるといふ原罪の思想と、人間の恐怖を形態化したと考へられる地獄觀の思想とは、益々永遠の幸福を求め天恵に浴しようとする思想を誘起し祈りや願ひや、又、感謝となつて、不可知的存在者に對する畏敬の情が發展する。この場



合に於て出現する恐怖感、服従、歸依、尊崇、敬愛等は凡てみな宗教感情でなければならぬ。

## 【註】

宗教感情はかく一面には不可知的存在者の思想、他面には、恐怖、戰慄等の一般的衝動體制に關係してゐるが宗教發展の歴史から見ると、最初は、自然界の變轉に關係して日月星辰の中に具體的の神佛の具現を信じ、宇宙創造論の如き形をとり、宇宙の説明となり、これに關係して、自己の肉身的自我の要求を満足せしめる存在者、例へば、宇宙の太原、不可知の在者等や、抽象的なものが、現象界の補充として現はれ、更に進んでは、自分の心内の道徳的要求を満足することが出来るものとして出現し自己の心内の要求と天地の目的乃至本體との調和に對する憧憬があらはれ、そこには、空想作用や、想像作用が參加して複雑な形態を作るやうになつてゐることは周知の事實であらう。

## 宗教感情の廣狹二義

宗教感情を吾々は主として狹義に解釋して、宗教感情には必ずや一面、不可知的存在者の思想、即ち、何等かの神佛の觀念の存在と歸依、信賴、祈願、感謝乃至は自己の助けなき状態についての自覺等の存在を強調して論じた。然るに果して、宗教感情なるものが、神佛の觀念の明確なることを常に豫想して存在するものであるか否か、そこで若し吾々が、單に敬虔の念、歸依の念のみに限つて、これを論ずる場合には、極めて廣義に宗教感情を解釋することになる。

若しかく廣義に解釋すると、既に幼兒の生活から、この種の宗教感情の存在を指摘され得るかもしれない。例へば、恵まれた感情、神に近い、持ちたい、探す、等の感情は何等かの意味で宗教的であ

らう、それ故、吾々は狹義の宗教感情に對して廣義のそれを**宗教的**感情ともいひ得るであらう。

個人の宗教感情乃至宗教的感情は、多くの場合、既成宗教の各種の傳統的形式が宗教的環境となつて、あらはれ、各人について一樣とはいへない。

## 兒童に於ける宗教的感情の發達

從來ともすると兒童の宗教感情を誇大視し、子供が現象的に、敬虔な様子で祈禱してゐるのを見ると宗教感情があるかの様に考へられて來てゐる。が併し、宗教的感情はあつても、まだ、宗教感情があるとはいへない、兒童が神佛や、天使や、罰や、救ひや、祈りについて、何等かの概念をもつてゐても、眞に自己の實相を感じ、自己の助けなき状態を考へ、自己の無力、寂莫を感じて、神佛に歸依するとはいひ得ない、むしろ、兒童は、教師や、知人や、兩親から教へられた神佛の觀念をもつにすぎない。即ち、恐らく實感の伴はない感じであらう。眞に宗教感情が發展するには心の悩み、罪や悔を實感する程度の發達が必要である。

それ故、吾々は兒童に於ては宗教的感情は發展しても所謂、宗教感情(狹義)は性的成熟前後の時期に至つて、その本來の形態を示すものと考へねばならない、が併し、それにもかゝらず、宗教的感情は宗教感情の發展の先驅となり極めて密接不離の關係にあることを忘れることは出来ない。



兒童の宗教的感情は兒童の心的發達の段階に應じて各種の形式をとる可能性がある。即ち、4-5才の子供は、素樸的實在論的であり物活的思想をもち、呪的思想が支配し、自然をも道德的に人工的に生産されたものと考へる傾向がある。それ故、宗教的感情は自然民族に於けるが如く自然現象に關係する場合が多いが、多くの場合、兒童の内面から、やむにやまれぬ情をもつてさう考へるのではなくて、極めて皮相的な考へ方であると見なければならぬ。この時期に於て既に神の概念は漠然とした形であらはれるが、小學校時期になると、教へられたり、讀んだりして神佛の概念が入り、可なり、權威あるものとして兒童に對するやうである。

## 【註】

兒童の呪的宗教性に關しては近年、各方面から興味ある研究が出てゐる。レヴィ・ブリュル(Lévy Brühl)の自然民族について、呪術的に外界世界に協力するといふやうな思想が兒童の世界觀に應用せられて考へられる場合が稀ではない。ピアジェ(J. Piaget.)の研究や、ツアイニンゲル(Zeininge, R.: Magische Geisteshaltung im Kindesalter und ihre Bedeutung für die religiöse Entwicklung; Beihefte 3. Zeitschr. angew. Psychol. 47 1929.)の研究の如きはこの一例である。

青少年に於ける宗教性の發展は、個々人によつて相違はあるが大體論をすると(a)宗教的制度や儀式に極く皮相的に結合する。(b)理論的に宗教の問題を解明しようとあせる。(c)神祕的に、具體的生活に關係なく自己の昂揚を宗教的に志す場合(d)神佛の權威を認め、それに尊敬する場合、等の段階があるが、眞に、宗教性に醒め、従つて宗

教的感情から宗教感情の發展が見られるのは思春期の時期であつて約14-22歳頃の所謂要補充期である。即ちこの時期に表現せられる煩悶、憧憬、寂莫、孤獨、焦燥、心的葛藤は自己の内面省察と、外界世界との矛盾を意味し、こゝに、自己の促へ得ない影を追ふこと恰も鏡像を鏡中に捕へんとするにも似て、たえず理想の影を追ふてゐる、即ち正にこの時期こそは、スツルムとドラング(Sturm und Drang)の時期であつて、又宗教性の發展する時期である。

一般的に見て、この時期に於て發信(入信)又は轉機(Conversion; Die Bekehrung)が多い、發信(入信)とは既成宗教を絶對と認めてこれに入ることを指し、轉機とは、從來の信仰を去つて新しきに向ひ、又は從來の薄信が突然、力を強め熾烈な信仰となる機會をもつといふ意味であつて、いはゞ、個人の生活様式の大變化を意味することとなる。

## 【註】

スタバック(Starbuck, E. Religionspsychologie, deutsch von Beta 1909.)の有名な轉機の統計的研究、(11個の問題をもつて、192名の成人に、彼等の兒童期の宗教的發展及び、最も効果のある永續的の感化についての回想について質問して研究してゐる)によると、小學校の初年級頃には、子供の宗教的の考へは両親又は教師に負ひ神には尊敬、畏敬、時には恐怖が結合してゐる。そして學校を出る前には宗教の教説は疑はれない。

それ以上になつて、自立的になると宗教的の轉向の時期が生ずる、即ち轉機は10-22歳の時期であつて女子では13歳16歳18歳を最高とし、男子では12歳16歳19歳が最も多く、兩性を通じて16歳が最高となつてゐる。轉機の動機は種々であるが女



子の場合約 45%、男子の場合 35% は教説や模倣や社交上の必要に歸し、その大部分を占めてゐる。この外、死や地獄を恐れ、良心の苛責の場合や（女子34%、男子39%）道義上の手本を倣はんとするもの（女子21%、男子24%）等、多々である。

兎も角、轉機をもつ思春期の再生の體驗 (Das Wiedergeburtserlebnis) は青年期の一つの特色を示すものとも見られる (E. Spranger: Psychologie des Jugendalters: Leipzig 参照)

宗教情熱が深く進んで、俗念を超越する場合には大歡喜、大法悦の世界の展開となる。

が併し、世俗人の日常生活に於ても時々宗教感情が起つて、これが、他の情と結合して極めて深刻な形態をとることは稀ではないであらう、若しそれ宗教的感情に至つては、或は、神社、佛閣、若しくは深山幽谷に入るとき、大海原に接するとき屢々これに觸れ、古來文學上の作品にこの種の描寫を求めれば枚舉に遑があるまい。

【圖一】 宗教は人間性に根ざす、それ故これを否定するときは人間性其物の否定となるであらう。

同様に宗教的情熱なき青年時代は考へられない。若しこれがあるとすると確かに變態であらう。とはいへ、常に、高き宗教的情熱があるといふ意味ではない。即ち時代、社會的環境によつて一高一低であらう、文化發展の跡を見ても、或時代は極めて宗教的であつて、或時代はさうではなかつた。例へば看方によつては中世の宗教的なる氣運と文藝復興以後のシエリング (Schelling)、ヘルデル (Herder) 等を産んだロマンチズム (Romanticism; Romantismus) の時期の如きは宗教的色彩が濃厚であつたやうである。

【圖二】 宗教教育と宗教的教育について

若し人間の教育の目的の一部が人間敬愛の心、自然敬愛の心の涵養にあるとするならば、吾々はそこに、宗教的教育が結局この任務を果し得るものと考へる。

人間敬愛の心を養成しようとするには、先づ自己の立場への反省を誘導し得るやうな教育方法が選擇さるべきであらう。が併し、これは、決して、同時に宗教を教へる意味に於ける宗教教育を意味するものでない。

古來兒童の宗教教育の問題として兒童の呪的宗教性を如何にして脱却せしめ得るかが、一つの問題であつたが、若し吾々が、宗教教育から宗教的教育を分離して考へることによつて、これらの問題は、問題提出の仕方を變化せしめらるべき可能性があるであらう。

そして、こゝに於ても、如何にして宗教的生活領域を構成するかの方法それ自身の研究が先決問題でなければならない。これらの點に關しては本書の性質上只暗示するに留めて置くこととしようと思ふ。

(四) 美的感情又は審美感情 (Aesthetical feeling; Das aesthetische Gefühl od. Das Schönheitsgefühl.)

#### 美的感情の意味

美的感情は、自然及び藝術を翫賞するに當り、若しくは人生に直面する際に起るところの高尙優美の情操であつて、そこに豫想された事態の事實性に關係するといふよりも、むしろ、その理念に關係し、感性的に知覺せられた事物の内容をもつて満されたる形式に對して、沒我的好適意、不適意を兩極として生起する。

それ故、この感情は必ずしも感官的でなく、かつ、善惡に結合するものでなく、従つて、或藝術品を、適意から眺める人と、それを只所有する喜びを楽しむ人との間には著しい相違がある。

吾々は藝術享樂の場合に生起する美的感情を二つの場合に區別しなければならぬ。即ち、一は美に對する如上の好適意不適意の感情



であるが、他は説話的な又は戯曲的な詩作に對して生起するやうな  
**マイノンゲ** (Meinong) の所謂、**想像感情** (Das Phantasiegefühl) で  
 あらう。例へば、悲戯に於ける主人公の没落は不快であるが、想像  
 感情としての悲劇への同悲の結果は、屢々、好適意を感ぜしめるの  
 はこの類である。

吾々が役者の舞臺に演ずるを見て、自らに感情類似の體驗を得る  
 ことが多い。

【註】感情移入 (Die Einfühlung)

如上の場合に於ける感情類似の體驗こそは人々が感情移入と呼び來つた事實の本  
 質なのである。

かう論じてくると美的感情といふものは、一つの全體的感情であ  
 つて、調和、旋律、リズム、形式等が一つの條件となるのみならず  
 論理的、倫理的、宗教的等の想念が好適意不適意に關係することは  
 いふまでもない。如何なる想念が、その個人をして好適意に導くか  
 は實に、その個人の精神發達の程度に懸つてゐる。

【註】美と各種の藝術

美 (Beauty; Das Schöne) とは何かといふことは美學の問題に屬し、各種の藝術  
 は藝術學の問題だが、こゝに極めて、一般的な叙述をしよう。詳しくは専門書につ  
 いて参照されたい。美は一般的にいへば、靜觀による永續的の快感をもつものであつ  
 て個性と普遍性の調和統一した性質にすぎない。美の對象は自然、人生、藝術であ  
 つて、美の内容には、簡單美 (單なる美醜)、崇美 (神社、佛閣等の美)、悲壯美 (悲  
 劇) 喜劇美等がある。そして、美とするものも藝術の發達段階に相應じて多少變化  
 してゐるやうである、

ヴァント (W. Wundt) によると造形美術の發達段階は (1)瞬間藝術 (原始人が、砂

土、又は石を集めて描き作る) (2)回想藝術、(3)裝飾藝術、(4)模倣藝術、(5)想念  
 藝術の五段階であるが、これらの段階に應じて美とするものが必ずしも一樣ではな  
 い。藝術は恐らく、想念藝術をもつて最高といふべく、例へば音樂藝術を見るに調  
 和、旋律、リズム等に應じて吾々の心の動ける狀、若しくは自然の姿を描寫するが  
 眞に吾々の心を満足せしめるには聯想的要素が必要であらう。西洋繪畫では色彩、  
 形狀が主であるが、美的となるには、そこに何等かの想念を要し、東洋畫では想念  
 を尊ぶものが多い。

一般藝術は次の様に分類せられることもある。

- a. 空間藝術……繪畫、彫刻、建築……視
- b. 時間藝術……音樂、詩歌……聽視
- c. 時空藝術……舞蹈、演劇……視觸

兒童及び青少年と美的感情

兒童の美的感情は色調、色彩明瞭性、色彩多様性等の主として形  
 式の感性的特質に向けられる。例へば6歳—7歳の子供にとつては  
 協和やリズムが前景に出で、旋律は一つの形態として把握せられ  
 8—9歳頃になるにつれて、音樂を聴くと、これに表象を結合させ、  
 それを感情の表出と感ずるやうになり、10歳頃から、音樂的印象が  
 分節される。この頃に於ても、リズムや旋律が中心であつて、調和  
 的形態化は餘り問題とならないが、ざつといへば、音樂の理解が始  
 まるといつてもよからう。

が併し、約14歳前後までは音樂その他の藝術の理解はさまで大で  
 はない。

【註】



従来青少年の美的感情の研究は子供の繪畫に對する反應が研究せられ、主として美に對する判斷が問題にせられた場合が多い。そして何故に、その美が子供にとって適意を起すかの問題を時に美の表現の内容のみに、時に形式のみに關係させた場合が多い。

モイマン (M umann) 及びその門下は、繪畫を判斷するに當つて作者の意圖や能力を理解することを、美的鑑賞の發達の最高點として、美的享樂と美的批評とを混同して取扱つたが、クロー (Kroh) 及びその門下の研究では、美的體驗は内容と形式との本質的統一の體驗にその頂點があるとして取扱つてゐる。この立場から、いへば眞の意味のかゝる統一經驗は成熟期前には殆んど出現しない。クロー (Kroh) 門下の研究で注意すべきものは次のものであらう。

Heckel, R: Optische Formen und ästhetisches Erleben. Göttingen 1927.

Walker, E: Die Entwicklung des musikalischen Erlebens; Göttingen 1927.

この外 Schaal, Kraft 等の研究がある。

かく、兒童少年期の藝術の理解がさまで大でないとしても、この時期に培養される一步は、將來の藝術鑑賞の地碁となることは間違ひはない。シュテルン (W. Stern) の研究するところによると5—6歳の子供が既に自然美を喜ぶことを確め、吾々も屢々觀察するところであるが、これらは、美への萌芽であることは事實である。7・8—14歳までの子供は自然美に對しても藝術美に對しても、むしろ内容的のものに向けられてゐる程度が、5—6歳のものに比べて大である。

確かに、この時期に於ては想像感情の退化があるやうである。そして再び成熟期頃に至つて著しくこの種の感情が發展する。

【註】

子供の音樂の理解についてシュテルン及び、ディツクスの興味ある研究がある。

—————書 入 欄—————

W. Stern: Psychologie der frühen Kindheit 1909.

W. Dix: Körperliche und geistige Entwicklung eines Kindes 4 Hefte 1911—23.

これらの研究に於ては音樂的天才兒童が如何に早く音樂の重要な形式要素を了解するかを取扱つてゐる。

以上吾々は、感性感情、生活感情、知的感情についてその大要を叙述し終つた、吾々は更に感情としての最も深刻なるべきもの即ち深層感情 (Most deep feeling; Das tiefste Gefühl) を區別することが出来る。個人の内面的中核に關係する感情状態であつて全く對象的關係がなく、自我に融合し自我自身の感じとして表現せられるものである。が併しこの種の感情は、宗教感情の最も深きものと關係し美的感情の深きものとも相通するの状であつて一種の人格感情を構成してゐるから、この種の問題については、再び觸れる機會に委ねることとしよう。

追加参照書目

C. Stumpf: Ueber Gefühlsempfindungen 1906.

W. Wundt: Grundzüge der physiologischen Psychologie.

H. Ebbinghaus: Grundzüge der Psychologie.

S. P. Hayes: A study of the Affective Qualities (American Jour. of Psychology xvii 1906)

W. James. Principles of Psychology.

" Psychology.

H. Spencer. Principles of Psychology.

Fröbes: Lehrbuch der experimentellen psychologie. I. II.

Cannon: Bodily changes in Pain, Hunger, Fear and Rage.

—————書 入 欄—————



- Th. Lipps: Vom Fühlen, Wollen und Denken.  
 Sully: Outline of Psychology.  
 W. Koehler: Gestalt-Psychology.  
 E. B. Titchener: Lectures on the Elementary Psychology of feeling and attention.  
 // Text book of Psychology.  
 F. Krueger. Komplexqualitäten, Gestalten und Gefühle (Neue psychologische Studien I.)  
 J. M. Baldwin: Handbook of psychology: Feeling and will.  
 // Mental development in the child and the race.  
 G. F. Stout: Analytic psychology. 2 vols.  
 // Manual of psychology.  
 // Grundwork of psychology.  
 W. McDougall: Introduction to social psychology.  
 // : Psychology, the Study of Behaviour.  
 // Outline of psychology.  
 H. Cornelius: Psychologie als Erfahrungswissenschaft.  
 A. Meinong: Gesammelte Abhandlungen I.  
 A. Meser: Psychologie.  
 S. Witasek: Grundlinien der Psychologie.  
 K. Bühler: Die geistige Entwicklung des Kindes.  
 C. Murchison. Psychologies of 1925.  
 // Psychologies of 1930.  
 O. Külpe: Zur Theorie der sinnlichen Gefühle (vtjsh. f. Wiss. philos. II)  
 F. Brentano: Psychologie vom empirischen Standpunkte.  
 Störring: Psychologie des menschlichen Gefühlslebens.  
 Becher: Gefühlsbegriff und Lust- und Unlustelemente. (Z. f. Psychologie 74. 1916)  
 小泉鐵: 臺灣土俗誌 大場千秋: 兒童及び青年の宗教意識

## 第六章 意志動作論

The theory of will or volitional movement;  
 Die Lehre von der Willenshandlung.

## 意志動作一般

## 衝動的體制と意志的體制

衝動的體制に於ける欲求は當該個體の存在する場面の構成に關係して、その場面の動作となつて表現し、時に衝動意識 (Impulsive consciousness; Das Triebbewusstsein) を伴ふことがあるが、その動作の目的、原因、目的遂行の手段等についての意識は明瞭ではない。この場合、吾々は、自然的欲求又は一次的欲求に従つて、その動作が起ると考へねばならない。否、もつと詳しくいへば、自然的一次的欲求の水準と、その場面との關係に於て具體的の動作が出現するのである。

ところが、若し、意圖目的についての意識が漸次明瞭となり、それを具體化し、實現しようとする方向をとり、それに、實現の手段が配列せられ、最初にあつた意圖の不安、興奮、抵抗等の感情状態が除かれて、平靜の状態に復歸するやうになると、吾々は、そこに意志的體制が存在するといひ、意志的動作が表現せられるのを見る。



### 準欲求 (Quasi-desire or Quasi-want; Das Quasi-Bedürfnis) の發生

自然的欲求は、それ自身一定の方向をもつてゐる緊張體系をなし力の場を形成し、従つてその體制の壓力によつて動かされ、全心的體制の領域の中に横はつてゐるから、この體制に於ける特殊の變化が生起すると甲の領域から乙の領域へと、その中心點の移動が起るやうになる。例へば極めて誘意性をもつもの、若しくは特に不安を與へるやうなものが、その個體の存在する場面に現はれると、衝動的欲求の體制に特殊の變化を起すやうな場合が發生する。即ちかゝる自然的欲求が限定され特殊化せられ新しい欲求としての性質をもつのである。この變化に應ずる現象的の體驗が意圖體驗であつて、かゝる變化が起れば、それは實現せられねば止まない性質が含まれてゐる。

吾々は自然的一次的欲求が、特殊化せられた場合の欲求を二次的欲求若しくは準欲求(Quasi—desire; Das Quasi—Bedürfnis)と名づける。意志的體制が生ずるがためには意圖が發生することは先決問題である、が併し、意志の意志たる所以は、むしろ、意圖が發生し、そして、これが實現せられるに至るまでの全過程の經過の中に求められねばならない。

#### 意志的體制の全景

意志的體制は先に叙べたやうに自然的欲求が準欲求として特殊化せられることを出發點とする。かゝる準欲求の發生は同時に意圖體驗として表現し、従つて意圖目的があらはれ、その動作者の心的傾

向が、その實現に向けられ、目的遂行の手段が工夫せられる。これらの場合に於て、熱望、努力、抵抗等の體驗があることは事實である。

意圖が發生し、意圖目的が生ずると、その個人の内面的緊張状態は、動作の實現としての運動に向はふとする。この場合、熟慮、決心、等を伴ふことがある、そして、又、その場合、相反する多くの傾向が存在し、内部的の動搖がある場合には、熟慮や選擇や決斷、決心等によつて、或物を除いて意圖目的に適つた意味の運動を實現しようとする。この種の運動が遂行せられると動作者の内的状態は平靜の状を呈し、かつて意圖目的となつて誘意性をもつてゐたものが變じて中性となる傾向がある。

さて、意圖と共にその實現の手段が直ちに配列せられる場合は、極めて意志動作としては簡単な場合であるが、多くの場合、遂行手段の探索に向ふのである。即ち探索せられる手段が目的となり、これに更に手段の探索が配列せられるといふやうに、極めて複雑な目的と手段との連鎖となる場合がある。普通、或意圖をした場合、これに對する手段や、實現の機會を考へてゐても、その手段が困難であるか、又は、實際上存在しないやうな場合には、新な手段や機會が探索せられることは日常生活では稀ではない。

意圖が發生して、決斷が生ずると、内部的緊張状態が、運動に向ふが、その際、決斷は、その根源として、自我の意識を伴ひ、自分



の決断として、それに指導せられて「さう欲する」といふ形で動作が起つてくる、自我が動作の原因であると感じ、自我が指導してゐるとの意識を、**指導意識** (Leading consciousness; Das Leitbewusstsein) といふ。かく指導意識がある場合、**活動の意識** (Feeling of activity; Das Aktivitätsbewusstsein) を伴ひ、自我が指導してゐると感じ自我が活動してゐると感ずるから、当該個人は自己の内部から自發的に起つてきた動作と感ずることがある。これを**自發的意識** (Consciousness of spontaneity; Das Spontaneitätsbewusstsein) といふことがある。

そこで、決断や決心といふ語は、当該動作者の全緊張領域に、それまで存在し、それぞれ異つた方向に向つてゐた緊張が内部的情勢を變じて、動作を比較的一つの統一ある緊張の下に置くやうな方向に突然向ふことを意味するにすぎないのである。かく考察してみると、意志動作は、意圖に始まり、實現に終る全過程であつて、而もこの全過程たるや、当該個人の全人の場に於て、その場の内面的傾向に従つて生起する現象と考へねばならない。

#### 意圖的動作と自制的動作

上述する所に於て、吾々は意志動作を恰も、凡て、意圖的動作なるかの如く取扱つて來た觀があるかもしれない、が併し、吾々はこゝに意志動作に二つの種類を區別して見なければならぬ。二つとは、意圖的動作と自制的動作である。意圖的動作は積極的誘意性をもつものを積極的に意圖し、消極的誘意性をもつものを除去せんと

意圖する方面であることは前述するところで大體明瞭であると思ふが自制動作は、例へば危急存亡の秋に際會して動ぜぬが如き、若しくは我執を滅却せんとするが如き方向の意志動作である。即ち自若として自己を征御して動かざるが如きこの一例である。この場合に於ては、そこに積極的誘意性があるものがあつても、却つて、それが退けられ、意圖的動作に矛盾するやうな形をとつてあらはれる。

この二つの動作を見ると、その動作の方向が全く異つてゐるが、何れも心的全體の場の力の作用の下にある點に於ては同様である、即ち意圖動作と考へられるものは一つの心的全體の場の現象として生起し、かつ經過實現するものであつたと同じやうに、自制的動作も亦、心的の場に従つて生起するのである。が併し、この場合に於て必ずしも、全人が当該場面の中に入つてくるとは限らない。即ち、その個人のある領域が保留せられ、その事件を超越し、それから分離してゐるやうな場合がある。換言すると、意圖行爲の場合に比べて、心的體制の分節が異つて居り、従つて、自我體制の支配乃至關係が異つてゐると見るべきであらう。

かく考察することによつて吾々は意志動作をもつて、一つの場の特異な現象と考へ、必ずしも、その場の一部の特色をもつて、これを代表せしめようとは考へてゐない。

そして又、自制動作と稱せられるものも、多くの場合、何等かの理念を目標とし又は信念に關係してゐる點に於て、やゝ意圖行動と



類似性を有つてゐることは忘るべきではないが、この場合に於ても準欲求を生起するまゝに實現するのではなくて、これを禁止し抑壓するところに中心が横はつてゐるやうである。そして、これが如何に禁止され、抑壓せられるかは、實に、内面的自我領域の分節の問題に關するところが多い。

要求水準 (Level of aspiration or pretension; Das Anspruchsniveau);

誘意性 (Valences; Die Aufforderungscharaktere) と準欲求

一次的自然的欲求の場合でも、何等かの欲求の水平線が存在し、それとの關係で、或事物が、衝動的にとられたり、避けられたりする。即ち自然的欲求も、決して固定的なものではなくて、たえず移動し得ることは吾々の日常生活に屢々出現する事象である。例へば食欲過程を考へて見ると、鰻が好物であつたものが、何時のまにかそれほどでなくなつてゐるとか、季節によつて何かのものが、特に食欲をそゝるとか、日々に食欲の増減があるとか、この種の事實を暗示する場合は尠くない。そして欲求水準が、その瞬間の状態を移動するが、同時に、この事實は、それをもつ個體の歴史的事象に規定せられてゐる現象に外ならない。

そして、かゝる欲求水準はそれに関係する具體的事物との關係で欲求を發生する。この場合、誘意する事物や事件は、誘意性 (Valences; Die Aufforderungscharaktere) をもつてゐるといふ。

晴天や、美しい景色がともすると散歩へと誘ひ、美味なるものを

とらんとするが如く外界は吾々にとつて必ずしも無記なものではない。或時は外界の事物や事件が吾々に或動作を要求し、或時は、恰も命令するかのやうに、又は引づられるやうに誘意性には色々の程度がある。

誘意性は一般に、中性を中心として積極的 (Plus+) と消極的 (Minus-) とが區別せられるが、前者はそれに接近し後者はそれから遠ざかる傾向をもつてゐる。

かゝる、誘意性をもつ事物や事件は、普通には欲求満足の直接の手段であるが、既に、誘意性それ自身、その個人の内面的外部的情勢に依存し、殊に欲求水準の程度に關係するから、欲求水準の變化と共に、かつてプラスであつたものがマイナスに、マイナスであつたものがプラスに移動することは稀ではない。

準欲求が發生すると共に、そこに各種の要求が發生し自己の心的状態、他人の状態等についての意識の參加と共に、欲求水準がかなり各種の成分をもつやうになる、吾々は、便宜上、準欲求の發生するに至つて、そこに存在する欲求水準を、その以前に比して區別するために要求水準 (Level of aspiration or pretension; Das Anspruchsniveau) と呼ぼうと思ふ。が併し欲求水準も要求水準もその本質上からは區別さるべきではない。

かくて、誘意性は要求水準に關係して發生し、そこに、準欲求の發生が見られる。



吾々の日常生活から見ると、要求水準が「これは自分に出来る」「これは誰でも出来る」「自分には駄目だ」等の方面として表現しこれとの関係で事物や事件が誘意性をもつ場合は稀ではない。

仕事の困難性が、却つて誘意性をもつのは要求水準がその方面に關係してゐることを意味するのである。

かくて、誘意性が要求水準の状態に依存する。然るに要求水準は、個體の發達によつて移動する。

#### 【附】 兒童の發達と誘意性の移動

『幼兒の世界は確かにマイナスの誘意性が多分に配列せられてゐる、これを統制することを覚えることが幼兒にとつては一つの重大な仕事である、初生兒にとつて若しプラスの誘意性があるとすれば吸乳と接觸感とであらう。感官の發達につれて、外界事物が誘意性をもつに至るが、始めは狭い空間に限られ初生一年は主としてマイナスの世界の克服であるが、機能的快感を求め機能的不快をさげんとする傾向から、そこに意圖的に、これを營まうとするに至る頃から、機能的活動の所産を發見し、これをプラスと感じ、こゝに、新しい意圖目的として、課題が生れ、これを解決し、これを使用しようとするに至ることは、吾々の屢々見聞するところである。言語發達その他の表現活動の發達も、何等かの意味に於て、兒童のもつ要求水準の移動と誘意性の問題に關係する。一般的に 7—8歳頃から 12—13歳頃までの兒童が自己の住む世界の事物に誘意性をもち、思春期に至ると、自己の心内の世界に誘意性を發見することは、一に要求水準の移動に關係することを意味するのである。』

#### 意志動作の三つの看方

意志動作の看方に就て吾々は先づ三つの看方を區別して置かなければならぬ。

#### 第一、熱望(Desires; Begehren)としての意志動作。

書 入 欄

意志をもつて、願望、熱望、努力する、意圖する等のやうに、積極的に到達せらるべき目的への傾向をもつ場合の心的過程と嫌忌、反抗、等のやうに一定の目的物に對して排斥的に作用する方面とを併せて名づける。即ち一般的に、努力が伴ふ場合であつて、この場合、吾々が、衝動動作と稱するものとの限界は必ずしも明瞭であるとはいへない。

#### 第二、或特定の努力としての意志動作

意志動作といふ場合に、或特定の努力、例へば、熟慮、選擇、決斷、征御等を伴ふ場合をいふ。これ、普通、意志動作の意志動作たるどころと考へられる見解であるが、然し充分であるとはいへない。

#### 第三、三つの位相を含む體制としての意志動作

意志動作は準欲求の發生、動機の競争、選擇行爲、意圖、決斷、行動の實現を含む一つの心的體制の分節過程であつて、準欲求の發生によるどころの意圖の實現に中心點がある。意圖動作は意圖の直接的實現に中心が横はり、自制動作に於ては、意圖が直接的には抑制せられ、更に、より包括的な意圖の實現を旨とするものと解せられるであらう。

そして、かゝる意志的體制は、結局、個人の内場と外場の構成とのベクター (Vector; Vektor) の關係によつて規定せられてゐるものであつて、その個人にとつてプラス、若しくはマイナスの誘意

書 入 欄



性をもつものは、誘引、強要、抵抗、不安、興奮等の心的體制の變化を根ざし、熱望、努力となり、手段の選擇、決斷となり、そこに動作としての實現を伴ふ。かくて實現と共に、最初にあつた心的體制の不均衡は消失し平靜に歸ると解釋することが出来るであらう。

さて、以上三つの看方の中、第三の看方は、最も包括的であつてその中に、第一及び第二の看方を含んでゐる。殊に第三の看方が、將來の意志動作の具體的研究に於ては重要視されるべきものであることはいふまでもないが、第一第二の看方も、これを第三の看方に於て吟味するときには必ずしも、捨つべきものではないと思ふ。

### 熱望の心理

#### 熱望 (Desires; Begehren) の本質

若し、熱望に衝動的熱望と意志的熱望とを區別して考へることが出来るとすれば、意志的熱望の本質は何であらうか、この問題は近代の心理學に於ける一つの重要な問題と考へられて來てゐる。

近代の意志作用の一つの實驗的研究に寄與したと考へられてゐるアッハ (Narziß Ach) は、彼の實驗に基いて意志作用を四つの要因に分解してゐる。

#### 【註】 アッハの意志の四要因

アッハの意志の四要因は次の通りである。

##### (1) 直觀的要因 (Das anschauliche Merkmale od. Moment)

これは強い緊張感覺としてあらはる。

書 入 欄

##### (2) 對象的要因 (Das gegenständliche Merkmale od. Moment)

目的表象及び關係表象が與へられることであつて、これらの表象は内語又は問題に關する非直觀の知によつて體驗せられる。

##### (3) 現實的要因 (Das aktuelle Merkmale od. Moment)

これ、活動意識即ち「私が實際に欲する」として體驗せられる。

##### (4) 狀態的要因 (Das zuständige Merkmale od. Moment)

これは緊張意識の中にあはれる。

かゝるアッハの敘述的研究について、メスマル (Messmer, O.) の如きは、四要因の中で、現實的要因のみが、意志作用の試金石であるとし、メッサーは更に、現實的要因と呼ばれるものに於てすら、それが研究室に於ける研究である限りに於て、抵抗が欠け決心の眞の把握に關係しないで、單なる承認に關係するにすぎないといつてゐる。

さうすると、アッハの敘述する努力は將來のことに關係する判斷や想像表象等から如何にして區別せられるかが明かでない。

Ach, N.: Untersuchungen zur Psychologie und Philosophie, seit 1910

Messmer, O.: Die neuen experimentellen Untersuchungen des Willensaktes,  
Z. f. pädag. Psychol. Bd 13. 1912.

Messer, A.: Psychologie 1918

これに反してヴィタセク (Witasek, S.) は意志作用は熱望してゐる對象の方へ向つて精神的に發達するところに特徴があると考へ、自己を對象の方へ向つて動かすこと (Sich = nach = ihm = Hinbewegen) として敘述してゐる。かくて彼は、感情には快不快の特質があり、

書 入 欄



判断には肯定否定があるやうに、意志には努力 (Effort; Streben) と反抗とがあるとして、その内容的特徴を考へてゐる。即ち、努力は活動的に、意識的に、他の體驗 (例へば假定 [Annahmen] 感情、表象等) によつて提示せられた對象に向つて努力することを意味し、反抗はそれらに向つて反抗することである。

## 【註一】

ヴィタセク (Witasek, S.) はマイノング (Meinong) の思想を繼承してゐるから、熱望は必ず何かの目標、目的物に向つてゐるが、然し、吾々が目的表象と名づけるが如きものでは必ずしもあり得ない、即ち、吾々の精神が向つてゐるものは表象によつては明かにされないで却つて考想 (Gedanken) によつて現前せられることがあると考へてゐる。換言すると目的は表象だけで明かにし得ないものであつて、もつと高次の精神活動が豫想せられる。マイノング (Meinong, A.) の思想によると熱望目的的の把握は、その目的が達せられると判断に移行するところの假定 (Annahmen) 作用に關係してゐるのである。この意味に於て理解的に把握せられ、判断に直接關係しない對象として Das Sollen と Der Zweck との二つを擧げる。

## 【註二】

高次の精神活動の考へ方はグラーツ學派 (Graz school; Die Graz-schule) としてのマイノング (Meinong, A.) ヴィタセク (Witasek, S.) ベヌシ (Benussi, W.) 等の人々の特色である。詳しくは拙著、最近心理學十二講参照。

## 【註三】

假定 (Annahmen) はマイノング (Meinong, A.) の考へ方で表象と判断との中間に位するものであつて、彼は、作用と對象との孰れの存在からも離れた Sosein の世界を把握する場面としてこれを考へてゐる。

假定は肯定否定を判断の如くもつが然し信念、確證を欠いてゐる。表象には勿論肯定否定はない。即ちマイノングによると假定は表象と判断との中間的存在であるのみでなく、凡ての精神作用の根柢にあつて、これらが對象に關係する基底として

豫想せられてゐるのである。

Witasek, S.: Grundlinien der Psychologie. 1908. 参照

Meinong, A.: Über Annahmen, 1910. 参照

かく考察してくると意志的努力の向ふ目標は、價值であつて、價值感情が基礎であるかのやうな外觀を呈するが、むしろ存在感情としての價值感情よりも想像的價值感情に關係するやうである。が併し、この場合、感情が努力を起す動因であるか否かを直ちに決定することは早急であらう。

願望 (Wish; Wunsch) と意欲 (Will; Wollen)

さて、吾々は熱望の問題を辿つてくると、これに種々の場合を區別して見ることが出来るであらう。

例へば、吾々は、ともすると、その實現が意志することによつて不可能と分つてゐるものに對しては、それを私かに願望し、そして又同時に存在する他の意志と矛盾する場合も同様である。然るに、この他の場合にあつては、それらを意欲してやまない。

思ふに、願望の多くの場合に於て確信なく、目的限定性が缺け、肉體的効果が意欲の場合に比べて尠いのみならず、願望は、極めて廣汎な時間空間に廣がり、保存的傾向が強いが意欲は必ずしもさうではない。

かう考へて見ると、この二者は全く種類を異にするかのやうである。この故に、メッサー (Messer, A.) は努力と熱望とを自我の受容



的（受動的）状態とし、意欲をもつて自我の活動的（能動的）状態として區別してゐる。

Messer: A. Psychologie 前出、参照

が併し、それにもかゝらず、吾々は、願望に於て何等の活動がないとはいひ得ないのみならず、感情や表象とは同列ではなく、やはり、その力系的意味に於て意欲と同列に置かうと思ふ、即ち吾々は、願望をもつて、未分化の熱望の状態と考へ、意欲をもつて、もつと分化した熱望の状態に關係するものと見る方が適切であらう。

#### 【註】 意志に関する諸學說とその批判

意志に関する學說は多々であるが、吾々はそれらの學說の中心思想を辿ることによつて、これを三に區分し得るやうである。即ち一は、意志的體驗の獨自性を認めないで、これを他の經驗に還元しようとする考方であつて二は、獨立なる意志要素を設定しようとするものである。三は、意志をもつて一つの體制的經驗の一状態とする考方である。吾々は簡単に、これらの考へ方の要點を述べて置くこととしよう。

(一) 意志を他の經驗に還元しようとする考方とその批判。この部類に包括され得ると考へられるものは可なり多數あるが、便宜上、主なるものを分類して示して見よう。

A. 意志を表象又は表象過程、表象聯合から説かうとするもの。

例へば**スペンサー** (Spencer, H.) の如きは、或動作が行はれる前に豫め表象せられると、有意的 (Voluntary; willkürlich) であつて然らざるときは、無意的 (Involuntary; unwillkürlich) であると考へてゐるが、例へば欠伸の如き觀念運動 (Ideo-motor movement) の如きは意志に反して行はれ、これを有意的といふことは不可となるであらう。**ミュンステルベルグ** (Münsterberg, H.) などに於ては有意的過程を聯合的過程とやゝ一致的に見ようとする傾向があるが、或何かの將來の心象を聯合しても、これを實現しようとする努力を欠ぐことがあ

る。

一般に聯合説の學者は意志を表象聯合から説かうとする傾向がある（例へば**チーエン** (Ziehen, T.))。この傳統は永く心理學界を支配し、必ずしも、それ自ら聯合心理學者でなくとも意志を説くに當つて聯合といふ考へ方に支配せられてゐる場合も珍しくはない。例へば、**アッハ** (Ach, N) の如きは、後にも述べる様に、特殊な意志説を主張した學者であつて、それとして獨自な存在でありながら、その學說の中には、時折、聯合説の臭味を残してゐるのが目につく、**アッハ**は吾々が或事を企てると意圖の中に於てそのときの目的觀念と、それに關係する諸觀念とが聯合すると考へてゐる。それ故、後になつて、關係する諸觀念があらはれると目的に適合した意味の運動が生ずると見るのである。

かゝる考方は一見、眞であるかのやうで、實は眞ではない、否**アッハ**は一部の眞理をもつて全部の眞理を主張しようとする誤を犯すものである。

既に、現代心理學の一偉人**レヴィン** (Kurt Lewin) が實驗的に證明したやうに**アッハ**の場合には、一義的動作 (Univocal act; Die eindeutige Handlung) の場合であつて鈴(關係表象)が鳴ればボタンを押さう(目的表象)とするが如き極めて簡單なる動作のみに適合するにすぎない。

然るに吾々の日常生活に於ては、關係表象が出現しても目的表象の意味の運動が起らない場合があるのみならず、動作が全く變形して、その場の動作として出現することは屢々である。

**レヴィン**式の例をあげて見ると、例へば「今日、自宅へ販つたら友人に宛てた手紙を書かう」と意圖することがあつたと假定するとしよう。この場合**アッハ**流にいへば「自宅へ販る」ことが關係表象であつて「手紙を書くこと」が目的表象であらう。然るに自宅へ販る途中、自動電話を思ひつき、これで、先の用事を果したとすると(補充動作, Supplementary movement; Die Ersatzhandlung) この動作は、そこで完了せられ、最早や自宅へ販つても手紙を書くことは起らないのが普通である。然るに**アッハ**流に考へればこの逆でなければならない筈であらう。



同様に手紙をポストに入れようと、思つたとすると何處かのポストに投函するとこの動作は、終つた筈である。然し、聯合説が正しいとすると第二、第三のポストを見れば、その運動が強められ、投函の傾向が強く表現しなければならぬ筈であらう。兎も角、意志を聯合で説くことは亂暴である。

Lewin, Kurt: Vovsatz, Wille und Bedürfnis, 参照

この外意志を時折、判断から説明しようとするものがある。例へば、有益であり、必要であると判断するから起るとする類であるが、意志薄弱のものの中判断としては正當でも意志にならぬ場合があるが、この種の場合は説明が出来ない、リボ- (Ribot) スタウト (Stout) ジャネ- (Janet) 等の思想の中にはこの片鱗がほの見えてゐる。

#### B. 意志を感情情緒に還元しようとするもの。

吾々はこの最も著しい代表者としてヴント (Wundt, W.) を擧げて置かうと思ふ。ヴントによると、意志動作とは「情緒によつて準備され、それを突飛的に終らしめた表象及び感情状態の變化」であると述べてゐる。

Wundt, W: Grundriss der Psychologie, 1920 参照

即ちヴントは意志の特質として意志に特有な一定の情緒の消失弛緩を伴ふ場合を考へ、その特有な情緒の消失弛緩をもつて、情緒の流れの最後の點が急速かつ完全な弛緩消失をすることとし、かゝる状態を起すには緊張興奮の感情が結合して一定の活動感情となり、この活動感情が、そこに優勢である動機と結合して決斷を導く、そして、この決斷は情緒の流れの他の感情と共に實現感情となつて、他の感情と共に、この過程を消失せしめるとしてゐるが、これを要するに、結局、意志を情緒に還元しようとしたものといつても過言ではないであらう。即ち、彼自身、既にかゝる結論を下して「意志過程は、それ故、實際、常に情緒である」と述べてゐるのである。

Wundt, W: Grundzüge der Physiologischen Psychologie Bd III S. 223参照

かゝるヴントの考へ方が不十分なことはいふまでもない、即ちヴントの心理學に於ては、彼は一面、意志を特殊なものとして考へようとしながら結局他面情緒

に還元せざるを得ない立場に立つたのである。

それ故、既に、ヴント門下とされるモイマン (Meumann, E.) が、普通の意志行為は情緒的性質をもたない、情緒的性質をもてばもつほど意志的性質が失はれると考へてゐる。例へば、感情の横溢した状態と意志強烈なる状態とは反對であり、靜かに決斷した場合には感情が少いことがあり、この反對に、受動的の場合でも感情が高潮することもあり得るのである。

ミシヨット (Michotte) はヴントが決斷の感情を考へる場合緊張弛緩に主きを置いてゐる點について、意志決斷がない場合でも緊張弛緩はあり得るから只緊張弛緩だけでは意志があるとはいひ得ないと難じ、又時には例へば不快な手術を健康の爲めに欲する様に何等の快もなくとも欲することが出来るが手段の不快の感情と意欲の快の感情とは一致し得ない場合があるから只緊張、弛緩の問題として説き去るのは不十分だと考へられる場合もある。

何れにしてもヴント説は適切とはいひ得ない。

この外、意志を有機感覺と緊張感覺の結合と考へるものにキユルペ (Külpe, O.) の思想があり、エビングハウス (Ebbinghaus, H.) は、感情、感覺及び表象の獨特な結合と考へる思想に近いやうである。

#### 二、意志の特殊要因を設定しようとするもの。

この部類に入れらるべきものは、先に叙述した意味に於けるヴィタセク (Witasek, S) の所謂、自分を精神的に、對象の方へ動かす、といふ思想、(前出参照) ヘフラー (Höfler, A.) の意欲、及び願望を感情以上の特殊現象とする思想、フエンダー (Pfänder) の自我の因果性の意識の思想、チッチエナー (Titchener, E. B.) のいふ意味に於ける「自分に解つたといふ態度で、教示や命令に従ふこと」等の思想を始めとして、近年實驗的研究に支へられてアッハ (Ach, N.) 及び、ミシヨット (Michotte) 等の思想の中に著しい、(この點については、意志の實驗的研究の項参照)

#### 三、意志を一つの體制的經驗の一姿態とするもの。

これ、意志をもつて、特殊な一つの體制的經驗とし、主として、何が故にか



く意圖し、何が故に、かく實現するかの問題を中心として考へようとする立場である。本書にとらうとする立場は、以上三つの立場の中第三のものによるものが多い。そして、この立場こそは**ゲシュタルト心理學** (Gestalt-Psychology; Gestalt-Psychologie) を中心として展開しようとする考へ方である。

### 意志目標と心的飽和

#### 意志的熱望の發生

**準欲求** (Quasi—desire; Das Quasi—Bedürfnis) の發生に相應する意志的熱望の發生は、先に述べた意味に於て要求水準と誘意性との關係に存在することは明かである。それ故、一面に於ては、要求水準の自然的移動例へば、個體の自然的發達並びに過去の種々なる經驗によつて規定せられるのみならず、他面には誘意性の配列及びその強度、出現の頻數等によつて種々の場合を生ずる。これを一般的にいへば、當該個人の内面的體制と、それに關係するその場面の構成に規定せられてゐる事象にすぎない。

そして、この種の問題をもつと、明確に知らうとするには、これに關聯して、意志目標の構成の理論を考へて見なければならぬであらう。例へば、吾々は、時に、友人に宛てた用件の書信を書かうとし新聞の論説を讀まんとし、原稿を書かうとし相撲の放送を聽かうとするやうに、日々、無限の意志目標を定立し、それによつて、一つの動作から他の動作へと移つて行くのである。

吾々は、一つの動作が終つてから、如何なる動作や目標へ、その

個人が向ふかといふ問題を**意志の目標の定立**と名づけて置かう。いふまでもなく、この場合、同様な動作の反覆へ移行するものも、新しい動作目的への移行、即ち目的變化の場合をも含めて考へられてゐるのである。

そして、吾々はこの問題に關聯して**心的飽和** (Mental saturation; Die psychische Sättigung) の問題に觸れて置かなければならぬ。

#### 心的飽和 (Mental saturation; Die psychische Sättigung)

心的飽和とは、例へば、或個人にとつて、プラスの誘意性をもつた一定の動作若しくは場面が、その動作を再三反覆するか若しくはかゝる場面に永く留ることによつて、プラスの誘意性が消失し、中性若しくは、弱いマイナスの誘意性がこれに代るが如き現象であつて、尙ほこの現象が繼續すると**過飽和**となる。

心的飽和は、**満足** (Satisfaction; Die Befriedigung) とは區別さるべきものである。**カルステン** (Karsten, A.) の研究するところによると、或仕事に満足しても必ずしも飽和されてゐないことがあるが、それと同様に、少しの満足を感じないのに或仕事に、極端に飽和されることもある。

このやうな飽和が**筋肉疲勞**には本質上基いてゐないことは、反覆によつて完全に飽和した場合、外見上同じ動作を、他の關係で、行はしめると、全く新しい意味をとつて何等の疲勞がないかのやうに行はれることによつて明かになれる。例へば、3.5.のリズムで、線



を引く動作に、飽和したときに、リズムを變へて7.5.の如くすると全く新しく動作が進行することも珍しくはない、が併し飽和の一つの徴候として疲勞が出現することも否定出来ない。

飽和は、或動作を實行することによつて、一定の目的構成の方向を、もつものであつて、前の動作の反覆によつて、新に同様の動作を反覆しようとする傾向は起らないで、却つて目標變化を根ざす傾がある。

然るに満足はこれに反して、前の動作を支配してゐた一定の欲求の消失弛緩を意味するやうである。

それ故、一つの飽和過程は、その中に個々の満足不満足、成功、不成功等が或役割を演ずる一定の事象の聯關であるが、本質上意志目的の變化を、その特質としてゐるのである。

### 【註一】飽和について

飽和と未飽和(Unsaturation; Die Unsättigung)との中間には各種の段階がある。突飛的の變化や徐々の變化の場合等。

飽和の研究では飽和の前段階、中間段階、後段階を含む全段階の研究が重要であらう。

飽和過程は或動作の反覆によつて得られ種々の位相を経て過飽和に至るが、その中間に於て最も顯著な現象は (1) 變容 (Variieren) 即ち動作構造の外部的變化や動作の意味の變化を生じ、(2) ゲシュタルトの崩解 (Gestaltzerfall) 或は作業の悪化を來し、(3) 場よりの逃避を生じ、(4) 時には情緒の爆發 (Affektiver Ausbruch) 等となる。

### 【註二】飽和の領域

書 入 欄

飽和は、その最後の位相であるところの「もう充分だ」といふ感じのあらはれる部分に限るべきでなくて全過程を含めて考へらるべきである。そして又飽和は、その起る一定の領域に關係して考へらるべきものである。そして、この領域は、その個人の心的體制全體の構成に極めて密接の關係がある。例へば、飽和過程の前に存するその個人の欲求、生活領域、意志目標等が關係することが多い。そして、一度、飽和領域を作つて、そこに飽和された動作も、或新しい領域に座を占めると、時に飽和が消失したり減じたりすることも稀ではない。

飽和は、實際に行つた動作について飽和領域をもつのみならず、實際には行はない動作までも飽和することがある。これ即ち共飽和 (Mitsättigung) である。共飽和の領域は色々の條件に規定せられる、例へば、その動作の反覆數、そこに存在する領域の構造、その個人の特性等に依存することが多い。

### 【註三】飽和と自我近接層 (Ichnahe Schichten) との關係

飽和は自己の中核に觸れるやうな動作、自己にそれが快か不快かの動作の場合に於て早く、かつ顯著に表現し、自己にとつて比較的無關係な、中性的末梢的な動作の反覆に於て極めて徐々<sup>レ</sup>は現はれる。カルステン (Karsten, A.) は、快、不快、無記の三種の動作について、この關係を實驗し、無記のものよりも、快不快のものが早く飽和せられ、飽和速度が快、不快の程度とともに規則的に増加することを證明した。

Karsten, A. Psych'sche Sättigung, Psychologische Forsch. Bd. 10. 1923. 参照  
快、不快、無記の三種の動作に於て、これを常識的に考へると、既に不快なものが最も早く飽和せられて、快なるものは最も遅く飽和せられるやうに思はれるが、カルステンの取扱つた異つた實驗装置の異つた動作についての 61 の場合に於て、かゝる考へ方の誤りであることを示した、即ち、

最も遅く飽和するものは快な動作ではなくて無記的動作であつた。或作業を反覆しても、若しその作業と比較的分離する態度で行ふと、飽和を導き難いことは日常生活に於ても屢々見られる現象である。

### 意志目標の定立

上述した一般理論から、意志目標の定立について、次の諸點を誘

書 入 欄



導することが出来るであらう。

**A** 他の意志目標が新に定立せられるには、或動作、若しくは場面が、その個人にとって飽和することが必要である。即ちその動作若しくは場面が、誘意性を失ふことが、他の新なる意志目標の定立に向ふのである。

例へば、永く書齋に端坐して原稿を書いていると、一定時間が経つと、それに堪へられなくなってくるであらう。そこで、書棚をあさつて見たり、煙草を吹いて見たり、何かの書物を開いて讀んだりしてゐることがあるが、時には、これらにも堪えられなくなつて戸外に逍遙ひ出ることもししくはないであらう。散歩すること數時にして、又その誘意性が消失し、何かの新しい計畫を考へるやうなこともある。何れにしても、そこに、何等かの飽和が豫想されることは事實である。

**B** プラスの誘意性の飽和は、時によると満足 (Satisfaction; Die Befriedigung) を起し、新しい意圖の發生を困難ならしめることもある。

**C** 或作業の後に同じ作業を再びしようとする意圖の發生は不満足 (Dissatisfaction; Die Unbefriedigung) に基いてゐる。満足の場合にあつては、その作業又は場面によつて起つてゐた緊張體系 (欲求體系) の解消を意味するが、不満足にあつては、かゝる緊張體系は決して解消しないで残留し、その解決を求めてやま

ない。これ恰も、吾等がともすると中斷動作を再行せんとする傾向を有すると同様であらう。

Ovsiankiana, M: Die Wiederaufnahme unterbrochener Handlungen, Psychol. Forsch. Bd 11. 1928 参照

**D** 飽和の場合に於ても、不満足であると同じ意志目標を再行しようとする場合が出現する。

**【附】 飽和の理論と日常生活の統制**

吾々の日常生活に於て、欲しいものが飽和せられると嫌になつてしまふ理論を逆に應用して吾々の生活を統制することが出来るやうである。活動寫眞がむやみに見たくなくなると続けざまに見るに限る、さうすると新しい意圖を發生する余地が出る。この意味で方向を誤らない耽溺は人間生活には必要な場合が多い。

上述の點に關係して、成功、不成功の體驗が可なり重大な役割を演ずるのである。そしてこれに成功するか不成功であるかは作業の變化と共に變化するところの作業についての期待若しくは要求、豫想に關係する。即ち、その出来榮えによつて異り、或時は不定な或時は一定してゐるところの自己の將來の成績に關する豫期、目的設定、要求等に關係して定まるのである。これらこそは、吾々が先に要求水準 (Level of aspiration or pretension; Das Anspruchsniveau) として述べたところのものに外ならないのである。

Hoppe F: Erfolg und Misserfolg. Psychol. Forsch. Bd 14. 1930. 参照

若し豫期や要求が比較的高い水準に置かれてゐる場合には、客觀的には、成績は良くとも、その人には必ずしも成功とは感ぜられな



い、これと同様に、要求水準が低い所に置かれてゐると、客觀的に見て不成績であつても成功と感ぜられるのである。

#### 【圖一】 要求水準の移動と加工

要求水準が自然的移動をなすことに就ては、先にも述べて置いたが、吾々は、人工的に人々の要求水準を加工することが可能である。例へば、或作業を行はしめその成績を被験者につけて、次の結果を豫想せしめる様になると、被験者によつて要求の水準が移動する、この場合、他の熟練者の成績を暗示したり、被験者自身の名譽心に訴へたり、奨励の言葉を發したり、若しくは、その他の適當の賞罰の手段を用ふると要求水準は著しく移動する、吾々は、この種の條件を組織的に工夫して巧みなる實驗的研究を志すことが出来るのである。そしてこの種の方向から、要求水準が、如何なる移動の形式をとるか、そして、成功、不成功の體驗が如何に變化するかを研究することが出来る。

#### 【圖二】 意志目標の移動

意志目標が移動することは、吾々の日常經驗に於ても屢々目撃されることであるが、要求水準の移動と密接に關係して種々の場合を考へることが出来る。

例へば或作業を練習するやうな場合に於ても、始めは、單に、漠然と、作業してゐる場合、只作業するといふ所に意志目標があつたものが、作業の進行につれてよき結果を志さうといふ所に目標が置かれ、更に、一定の程度の成績を目標として進み、遂には、想像的の目標に向つて進むやうな場合が稀ではない。

又、時々、或作業が、最初に意圖した意味に於て實現が困難な場合には、補充的な目標が立てられる場合が屢々である。

價值と價值意識 (Value and consciousness of value; Wert und Wertbewusstsein)。價值とは欲求に對して考へられる概念であつて、一般には欲求を満足すべき可能性を名づけられてゐる。そして、これについての意識が價值意識である。そして、時折、價值があるも

のを熱望し、然らざるものを嫌忌すると考へられ、意志目標の定立を價值意識から基礎づけられようとする場合がないことはない。例へばヘフラー (Höfler A.) を中心として展開する價值學説の人々には、この種の考へ方が甚しい。勿論、吾々の日常生活を見ると、價值あるもの、従つて價值意識を起すものが意志目標となりやすいことはいふまでもないことである。例へば權力や、名譽や、賢しきことを價值と感じ、眞、善、美、聖を價值と感じ、然らざるものを非價值として感ずることは事實であつて、これらが、意志目標となること勿論であるが、それにもかゝらず、吾々は、價值及び價值意識をもつて、心理學的に意志目標定立の根本豫想とは考へない。即ち、その個人にとって誘意性をもつものが必ずしも價值の意識を伴ふと推定せられないからである。即ち、吾々は價值の意識はやゝ反省的の場合にのみ許さるべきものと考へるからである。そして吾々は、ともすると價值はないと知りつゝ、或事を意圖し、價值があると感じつゝ、それを意圖せぬ場合が屢々である。

それ故、若し、吾々が、高級なる意志生活に於て、價值の實現が理想であるとしても、一般の意志生活の基礎づけとしては、價值及び價值意識を基本として考へることをさけて、誘意性と要求水準の考へ方をとる方がよいやうに思ふ。

#### 【圖】 價值について

價值について三つの區別がされるのが普通である。



## (一) 状態価値

身心の状態の幸、不幸

## (二) 個人価値

名譽、權力、賢等

## (三) 他人価値

眞、善、美、聖の如きもの

## 實驗 12 飽和過程の研究

目的 一作業の連続による飽和位相の研究

装置 ロール・ペーパー、鋭筆

ロール・ペーパー移動装置

課題 自分が最も好きな人の繪を書かせ同様な繪を引續て飽和するまで書かせる。そして、如何なる變化が、かゝる過程に出現するかを研究する。

被験者 6-8歳の子供

方法 自分の好きな人の繪を書かせ、「同様な繪をいくらでも書いて下さい、そして、いやになつても、止めといふまでは、決して自分ではやめないで下さい」といふ様な教示で始める。實驗者はロール・ペーパーを適宜に移動させ、書いた結果は別の厚紙で被はれて順次に被験者に見えないやうにする。

實驗者は被験者の態度、殊に、その言語、動作變化を記録する。そして、ストップ・ウォッチで適度の時間を區切つて置く。

整理 この種の實驗の整理は色々の方法で行ふことが出来るで

書

入

欄

あらう、例へば、大きさの變化、形の變化、書き方の順序の變化、等の整理と態度變化の記録を時間に關係せしめてとることである。

整理の要點を著しい位相の變化に置くこととして大體の特徴を把握されたい。

この種の實驗には色々の考ふべき問題がある。

問題一、課題を與へた場合と自由に課題を定立させた場合、如何に變化するか。

問題二、簡単な圖形の場合と比較的複雑な圖形の場合如何なる變化があるか。

問題三、同様な繪の反覆が、どの位連續するか、繪の形が何時から、こはれ始めるか、全く別箇の繪が途中にあらはれぬか、ゲシュタルトの崩解が何時から起るか、逃避としての外見があらはれぬか、情緒の爆發はあらはれぬか、何時頃から、もうよしてもよいかといひ始めたか。

問題四、飽和を研究するに、尙ほもつと適切な實驗はないか、適切なる整理法を工夫されたい。

## 【註】 樂書の心理の一面

樂書はその起因に色々あるが、これを力系的に見ると一つの場合として、マイナスの誘意性に圍繞せられてゐる場合に起ることは人々のよく知るところであらう、例へば、講演會に聴衆の一人として出席してゐる場合、話しの内容が余り自分に訴へぬやうな場合には、ともするとその場所がいやになってしまう、かゝる場合身體をもちもぢさせたり、何かいぢつて見たりするのが常である、鋭筆があると何か書いて見たくなる。この種の心理は飽和過程の位相中にあらはれる全く別箇の圖形を書く場合とよく類似してゐるのである。

もとより樂書には色々の現象形態があつて、その力系的意味が異つてゐるが、何か書くべき場面が特に誘意性をもつ場合にあらはれることもある。

## 興味及びその發達

書

入

欄



吾々は興味の意義を先に衝動に關係して論述した。(知覺論、衝動と興味及び注意の項参照) 即ち興味こそは衝動組織の活動によつて條件づけられたところの事物を明かに認識する内的必然性をもつた個體の内外状態に外ならない。

この場合、吾々は欲求水準に關係せしめて興味を考へたが、更に吾々をもつと廣く要求水準の問題に關係せしめて熱望を伴ふかゝる状態と解釋することも可能である。

さて、かゝる興味の發達といふ問題は、要求水準の移動に關係する問題であるから細かに兒童の發達を追ふて研究しなければ一概に斷案を下すことは出来ない。

ナギー (Nagy, L.) は多數の子供を數年研究して興味の發達を五段階に分けてゐる。

#### ナギーの興味發達の五段階

- a. 感官的興味 (Das sinnliche Interesse) (1—3) 歳  
感官的印象、動く物體の視覺印象
- b. 主觀的興味 (Das subjektive Interesse) (3—7) 歳  
感官的でなく動く物體そのものに興味をもつ、然し物體の性質特徴の爲めではなく自分の想像を働かすために興味をもつ。
- c. 客觀的興味 (Das objektive Interesse) (7—10) 歳  
物體が感官映像的價値を失つて物の實際上の價値で評價せられる、即ち客觀界を認識しようとする。
- d. 永續的興味 (Das ständige Interesse)  
活動の永續性があらはれ、物の永續的價値の認識
- e. 論理的興味 (Das logische Interesse)  
事物の論理的關係への興味

最後の二段階は青少年の特徴であるとする。このナギーの区分は必ずしも適當ではないが、この外、興味の動機の發達をも研究してゐる。そしてこの種類の研究は他にも類例が少くはない。

Nagy: L. Psychologie des kindlichen Interesses, Pädag. Monog. 9. 1912.

#### 動機 (Motive; Das motiv) の意味

一般に、誘意性をもつものが、そこにあらはれ、それが、何等かの不安を起し、興奮を起し、何等かの抵抗を起すときは、それに伴つて各種の表象知覺等があらはれて、それが實現の手段を求められるやうになる。それ故、これらは總じて意志の起因と考へられるから廣義には、これを意志の動機 (Motive of will; Das Willensmotiv) といふ。即ち、誘意性をもつ物體と、それに關する表象や知覺、不安の感じ等が動機である。

例へば、こゝに、あるプラスの誘意性をもつ物體があるとする、それが直ちに自己の所有となれば、衝動的に終る場合があるが、若しそれを所有するに困難が横はつてゐるときには、不安や興奮があらはれ、手段が探索せられ、意志の發生となるのである。

然るに、複雑な場合にあつては、それを達する手段が、幾つも存在し、その中から、あるものが選擇せられて實現に向ふやうな場合が多い、この場合に於ては抵抗の感じも強烈となり、その間に争闘の感じもあつて愈々、ある手段が選擇されるやうになるであらう。時には、かゝる選擇の理由又は原因が特に意志の動機と呼ばれることがある。

前者は廣義のそれであつて、後者は狹義のそれである。例へばミシヨット (Michotte) の如きは後者の意味に於て用ひてゐる。かく意志の動機を考へて見ると意志過程は動機に始つて、そこに意圖が



あり、この意圖の實現に終る過程であるともいはれ得るであらう。

### 意圖動作の實現

一度動機に基いて意圖が生起すると、それは實現せられないではやまない傾向がある。即ち、一面に於ては著しい心的効果を起し、表象過程やその他の方面に影響し、他面には身體的效果を發揮するやうになる。

殊に、表象結合の過程に於て表象過程を貫徹する傾向はアッハ (Ach, N.) の所謂**決定的傾向** (The determining tendency; Die determinierende Tendenz) であつて、表象の自由活動を豫め一定の方向に規定し結合する傾向である。この傾向は、目的表象の意味に於て、問題の實現、目的の到達に關係して出現するのである。即ち、若し何等かの禁止が出現して、意圖目的とは異つた方向をとらうとするやうな場合、目的表象及び、それに結合する表象が出現して目的表象の意味に於て作用し、目的表象の意味に於ける運動を實現しようとする。それ故、若し目的表象が、明瞭であり、かつ一義的であればあるほど、吾々の意圖することが早く、その通りに實現せられる。アッハ (Ach, N.) はこれを**特殊限定の法則** (Law of special determinatin; Das Gesetz der speziellen Determination) といつてゐる。

アッハが擧げるやうな意味に於ける意圖實現があることは事實であつて、一度、或事が意圖されると、その意味に於て實現をなさうとし、それが根本の基調となつて、各種の表象が群がり、一種の中

心化を生じ、それを理想として實現しようとすることは確かであるが、吾々は、それにもかゝらず、意圖實現の二つの場合を區別しなければならぬ。

### 一義的動作の實現

吾々は、先にも叙述したやうに、アッハの主張するやうな場合を、一義的動作に限つて見ようと思ふ。例へば、鈴が鳴つたら、電鍵を押せと命令せられ、その通りの意圖をするやうな場合に於ては、鈴が鳴ると、電鍵を押すより外、方法が残されてゐない。この種の動作に於ては、意圖した通りの動作が行はれる。然るに、若し多義的動作の場合、即ち一つの目的を達するに、多くの手段があるやうな場合には、動作の實現が、最初意圖された目的表象の意味とは可なり、異つてくるやうな場合がある。今、吾々はその主なる場合を見ようと思ふ。

### 補充動作 (Supplementary movement; Die Ersatzhandlung)

補充動作は最初、個人が意圖した實現についての機會、手段等のまゝの運動ではなくて、その個人の存在する場面に應じて、その動作の目的の意味に適切なる運動として臨機應變に行はれる運動であつて、吾々の日常生活には屢々見られる。即ち意圖目的が容易に實現せられ難い場合若しくは極めて容易にそれを實現する手段がある場合に見られる。

今、吾々は、その主なる場合を述べよう。



**A 場面に適した解決**

自分自ら或手紙をポストへ入れに行かうと意圖した場合、女中の外出するのを見て、それへ依頼する。

**B 補充行為が、始めの目標と同方向に向つてゐるが然し隠されてゐる場合**

或欲しいダイヤモンドを買ふ代りに百貨店のある町へ行く。或事をしようと思ふが、實際にする代りにノートへその事を書きとめて置く。

**C 非現實的解決、假りの解決、間に合せの解決**

(1) 環を一つの瓶へ投げかけようと思ふて、それが出来ぬともつと易い瓶か又は近くの何かに投げかける。

(2) 子供が汽車の出發に間に合ふ様にステーションの方へ走つたが達せない。この場合、驛長の方へ向つて「出ます」「出ます」といふ。

(3) 孤兒院の子供がそこから出たくないと思ふが意の通りにならないと、荷物の「コーリ」が焼ければよいと思ふ。

(4) 書物を買いたいと思ふが金がない、書物を買ふ代りにカタログを集める。

この外、補充動作は、その動作が蔭蔽されるやうな場合や種々の形をとつて、その場面に適した形で實現される。

**意志動作の形式**

—————書 入 欄—————

意志動作に如何なる形式があるかといふ問題は可なり複雑な問題であるが、便宜上、吾々は次の三つの場合を先づ區別することが出来るやうに思ふ。

**第一形式、簡單動作形式**

これ即ち目的觀念が、あらはれ、それを意識すると共に本來の意志動作に至るが如き場合の形式である、練習された運動では、目的を意識すれば運動が起るやうな場合は稀ではない、先に述べた意味に於ける一義的動作はこの類である。

**第二形式、選擇動作の形式**

多くの相互に相反する目的が相争ひ、又は既に欲せられた目的を達する種々の可能性がある場合には選擇的動作の形式をとる。例へば感覺性と道義性とが相争ひ、義務と心的惰性とが相争ひ、そこに或は熟慮躊躇、動搖等の状態を呈する。一般に心的争闘の結果として、そこに意志的決定が起る。そして、この場合決定は意志作用によつて起るか或は動機を強く承認するかに基いてゐる。何れしても場の現象として起る。

**第三形式、包括的意志動作の形式**

意志作用と意志目的とが時間的に分離し、特殊な意志目的が一般的意志作用に従屬し、従つて動作する場合は一般的包括的意志的決心の下に起る場合といふことが出来るであらう。

例へば、演劇を見物しようと思ふ場合、この決心の實行には、

—————書 入 欄—————



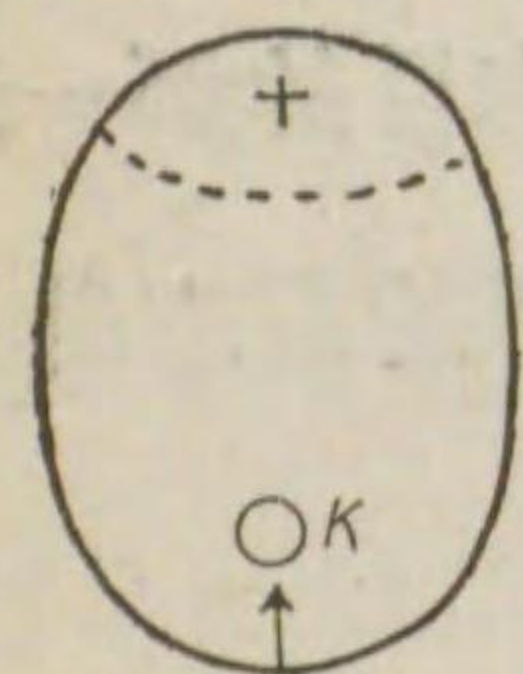
それに従属する色々の活動が必要である、衣裳を着かへたり、家を出て劇場へ行き入場券を買ふ等があるが、これらの場合、必ずしも一つ一つの特殊の意志作用を必要としないで、包括的の決心に従属して行はれるやうな場合である。即ち若し一つ一つの意志決定が必要な場合でも、それは僅かに従属的の意志しかもつてゐない。換言すれば最初の包括的の意圖と共に起つた緊張體系が決して解消せられないで、この中に座したものとして、多くの特殊なる意圖が存する場合である。吾々の生活を見ると一般的決心の下に起る意志的緊張が數年間に涉つて存在し、その中に一つ一つの意志動作がそれに影響せられない特殊領域を作つて存在してゐることは尠くないであらう。

吾々は以上三つの意志動作の形式を簡単に圖式化して示して見ようと思ふ。

第一形式、簡單動作形式 (第七十九圖)

今、一定の場面内にはプラスの誘意性のあるものが存在する場合それを、とらうとする。そして妨害物が途中にあるとそれを取り除

第七十九圖  
簡單動作の形式

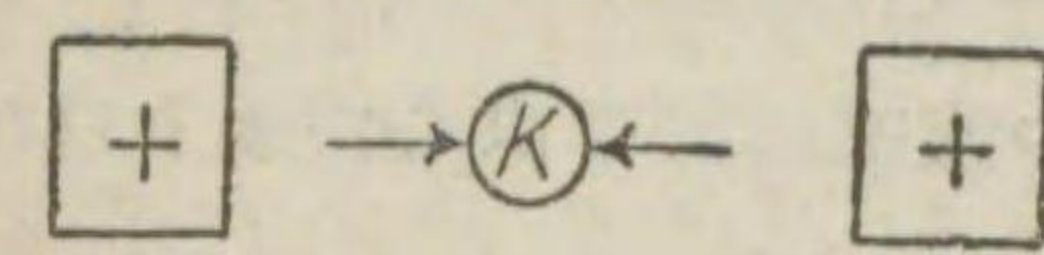


けて行かうと欲するが如き動作。

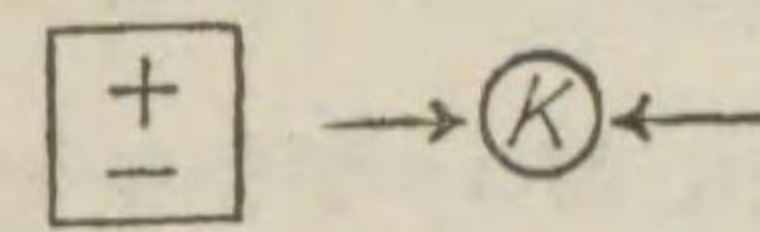
第二形式、選擇動作形式 (第八十圖)

選擇的動作には種々の場合があるが争闘の状態の顯著に出現する場合の基本形式は三つである。

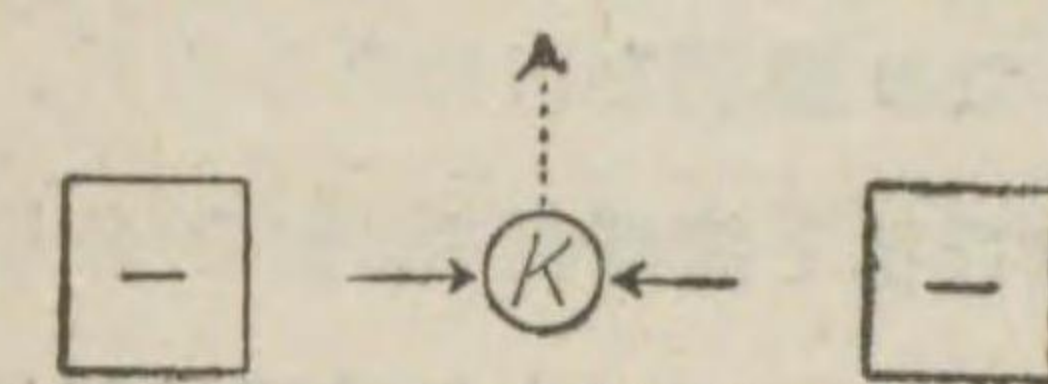
第八十圖 争闘の三つの形式



(a) 二つのプラスの誘意性の中間に置かれた場合



(b) プラスの誘意性をもつものが同時にマイナスを有つ場合



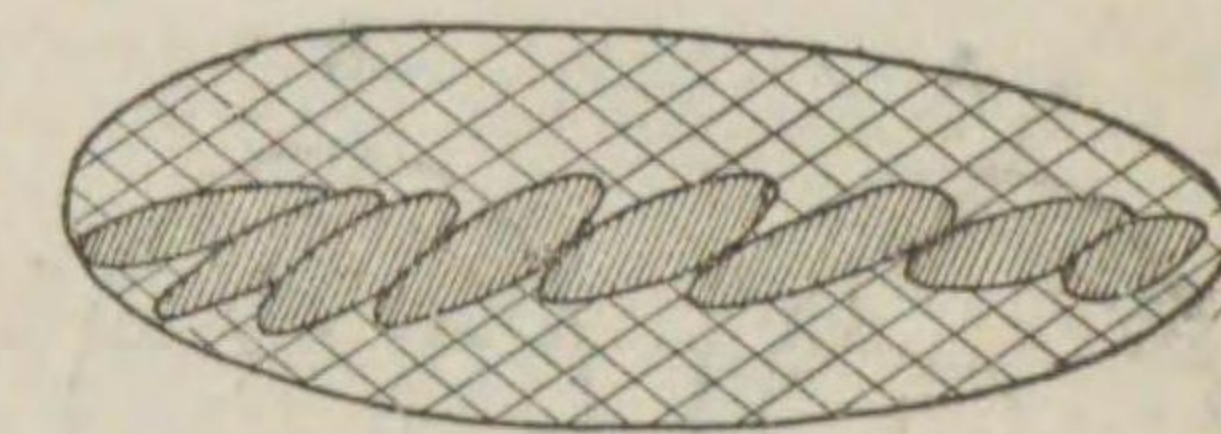
(c) 二つのマイナスの誘意性の中間に置かれた場合

第三形式、包括的意志動作形式 (第八十一圖)

第八十一圖に示すやうに一つの大きな緊張體系の中に幾つかの小さな意圖

(第八十一圖)

が含まれてゐるが、それらはその大きな緊張體系に坐してゐる。赤穂義士の



動作全體と、その中に於ける一つ一つの動作とを考へられたい。

【註】 ヴント (Wundt, W.) の意志の基本形式

ヴントは意志を動機の構成上、分類してゐることは周知の事實である。

(1) 衝動行爲 (Impulsive act; Die Triebhandlung)

意志の流れが只一個の動機のみ支配せられる。即ち單一動機の一義的機能であるから一名、一義的意志動作 (Univocal will act; Die eindeutige Willenshandlung) といひ又は單純意志行爲 (Simple volitional act; Die einfache Willenshandlung) ともいふ。

(2) 有意行爲 (Voluntary act; Die Willkürhandlung)

意志の流れに二個以上の動機が存在し多義的に規定せられてゐるといふ意識は

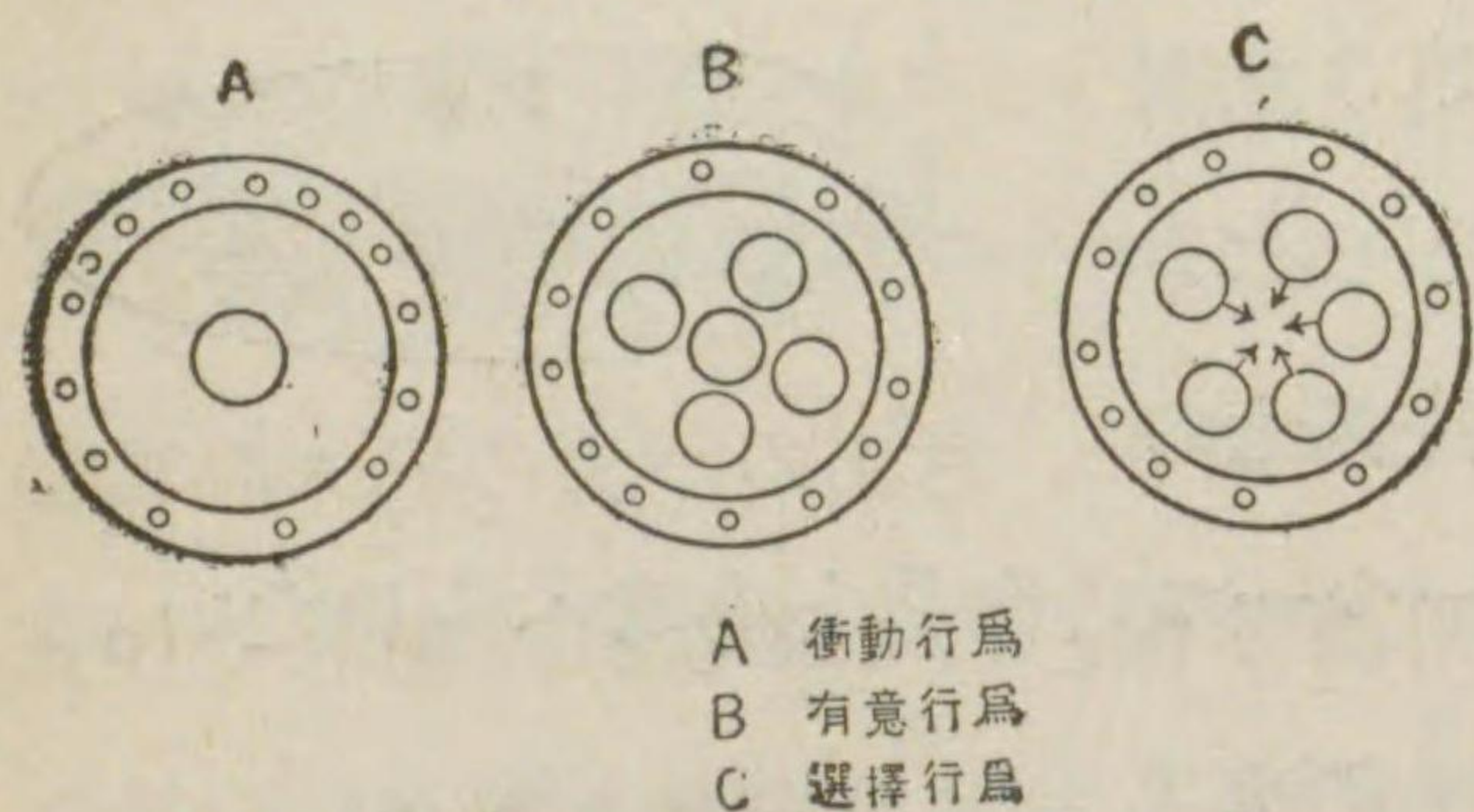


あるが、その中の一つの動機が、明白、優勢となつて、他の動機は單に、これに駢列した動機 (Nebenmotiv) 又は、これに對立した動機 (Gegenmotiv) としてあらはれ、漸次、意識中から消失し、優勢なる動機の意味に於て決心があらはれるものである。

(3) 選擇行爲 (Selective act; Die Wahlhandlung)

先づ、相對立する動機が意識の全面にあらはれ、その中、何れが優勢なるべきかは最初は不明であるが、動機の競争 (Struggle of motives; Streit der Motive od Motivkampf) が起り、疑惑が起り、決定、決断となり勝利を占めたものが、意識の中心を占めかくて實現に至るもの。そして有意行爲と選擇行爲とを合して、單純意志行爲に對する意味で、複雑意志行爲と名づけ、又は多義的行爲若しくは兩側面的意志 (Bilateral will act) ともいふ。

第八十二圖 ゴントの意志動作の基本形式



A 衝動行爲  
B 有意行爲  
C 選擇行爲

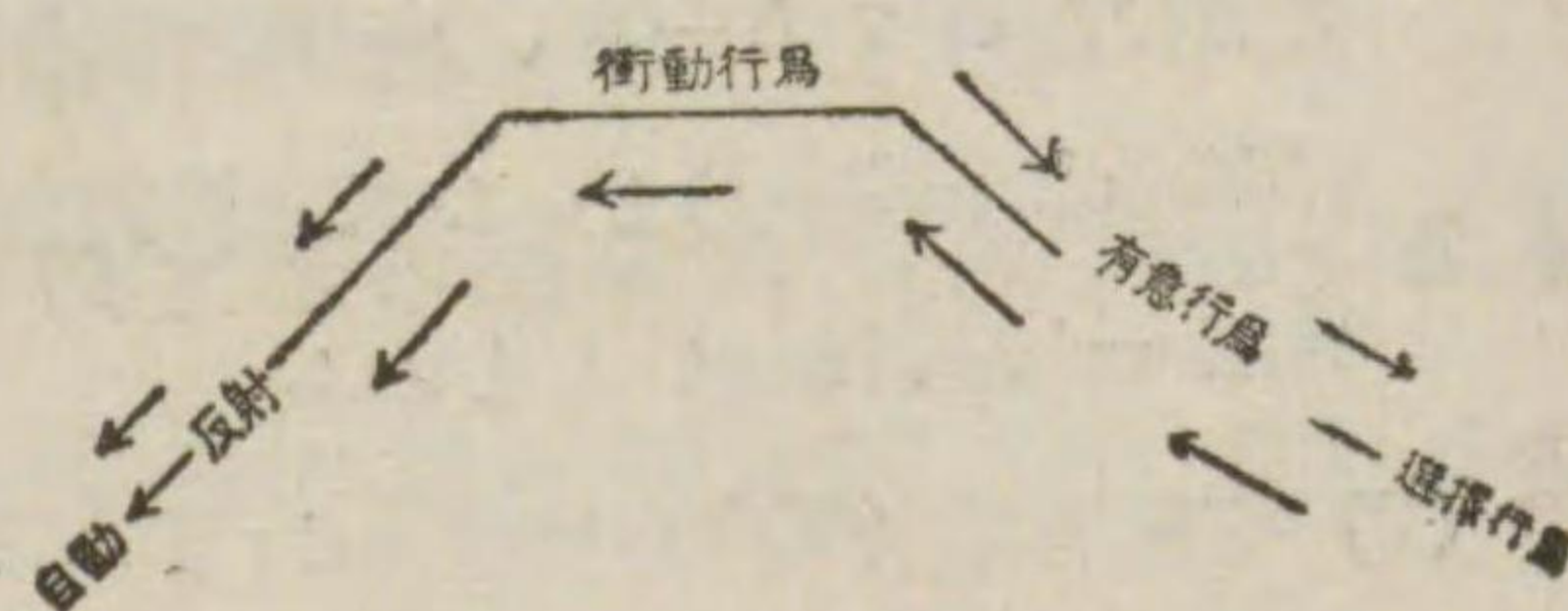
以上の三種の中、選擇行爲が意志としての特色を最もよく示し、有意行爲これに次いでゐる。

ゴントはこの三個の形式に二重の意志の發達を考へてゐる。(一)は前進的發達であつて衝動行爲→有意行爲→選擇行爲に至る發達であり。(二)は後退的發達であつて選擇行爲→有意行爲→衝動行爲

→反射→自動運動である。

ゴントの三つの基本形式の考へ方によると内容的には本來の衝動動作と意志の衝動的形式とを區別することが出来ない、そして只、動機のみから意志を見ることが必ずしも妥當とはいへない、むしろ

第八十三圖 ゴントの意志發達の圖式



書 入 欄

る、動機から始まつて實現運動に至る全過程を考へるべきであるが、併し動機を量的に見て、大體、ゴントのこの點についての考へ方は不當とはいへない。

それにもかゝらず、ゴントのこの考へ方の根柢に横はる注意 (attention; Die Aufmerksamkeit) といふ看方には、不純な成分がないとはいへない。

元來、注意といふことは、衝動によつて統制せられてゐる一つの事實にすぎないものであるが、(知覺論、参照) 時々、一定の體驗を發生する條件、即ち精神内容の明瞭抽出を起す條件と解釋せられることがある。

ゴントによると精神内容の明瞭とか抽出するとかの作用を知覺に對して統覺 (Apperception; Die Apperzeption) とし、その客觀的條件を注意と呼んでゐるやうである。

そこで、ゴントは、意志の加工の考へ方をするに當つて、一方では統覺といふ概念を用ひ他方では競争といふ概念を用ひて誠に巧みではあるが、内容に對して、かく作用を立てるには、内容に作用が如何に關係せしめられるか永遠の問題として残つてくるのである。そしてゴント自身に於てきへ、統覺といふ考へ方は時折、多義的である。

意志動作の形式を考へるに當つて時折、意志の消失の終末點に關係して、それが、比較的、外部的動作として終るか、若しくは比較的内心の事象變化として終るかによつて外部意志動作 (Outer volitional act; Äussere Willenshandlung) と内部意志動作 (Inner volitional act; Innere Willenshandlung) に分けられることがある。が併し、この二つの區分も極めて相對的であつて、吾々に内部的變化があると、それは何等かの形で外的に表現されるといはなければならぬ。

意志の自動化

書 入 欄



意圖動作を再三反覆すると、吾々が**自動化**(Automatisierung)と呼ぶ一定の動作様式の固定化が出現する。即ち最初は骨の折れる面倒な仕事でも次第に容易になり、餘り心を用ひないでも實行される。この單純化、骨化の現象は、その動作に對する準欲求が次第に獨立化し、その動作が全人によつて支配し統制されなくても行はれるやうになることを意味するのである。それ故、比較的獨立化した準欲求が、他の欲求體系との連絡が制限せられるから、自動化された動作に於ては、習慣的の誤謬的反應が生起し易い。吾々の心的生活に於て、複雑化、統一化があると共に、自動化、器械化の現象が起ることは興味のある事實たるを失はない。

### 反應時間と意志研究

#### 反應時間 (Reaction time; Die Reaktionszeit)

一般に、刺激が現はれてから、それに反應するまでの間の時間を反應時間といふ。反應時間に關する研究が天文學の研究及び生理學の研究に暗示せられて、心理學の研究の領域に導入せられてから、一時逞しい勢で研究せられ心的生活の諸方面に應用せられるに至つた。

#### 【註】 反應時間研究の二つの起源について

##### 其の一 天文學の研究からの暗示

1795年英國のグリニッチ (Greenwich.) 天文臺で、當時の天文臺長 **マスクリン** (Maskelyne) は、その助手**キンネブルック** (Kinnebrook) と共に同時に、天體

書 入 欄

の子午線通過の時間を測定した。然るに、この二人の觀測價は、約 0.8 秒の差があつて一致しなかつた、それ故 1796 年助手は免職せられるに至つた。この際、觀測に用ひられた方法は、**眼耳法**(Eye and ear method; Auge und Ohr Methode; Bradley's method) であつて、眼で望遠鏡面の星の位置を眺めると共に、耳で時計の秒の音を聞く。今、望遠鏡面を細い糸で五等分し星が中央の線と一致するときの時間を計量する様にし星が中央線に至るすぐ前に鳴つた秒の位置から、これを通過して、次に秒の鳴るときの位置との間を目分量で十等分して、子午線に當る中央線に於ける時間を定めるのである。

この種の方法を用ひると、心構へを眼の方面と同時に耳の方面に向けねばならぬから、この何れの方に主として向けるかによつて、時間上から見て、早めて聞く人と遅めて聞く人が出来るのは當然である。即ち、こゝに個人差 (Individual difference) があることになる。

1820年**ベッセル**(Bessel) はこの問題に興味を惹かれ、かゝる誤差を除かうとして**個人差方程式** (Personal equation; Persönliche Gleichung) でこれを表現しようとした。

然るにかゝる誤差は記録の方法によつても多少除去せられると考へられ、これを除かうとして**アルゴ**(Argo)は 1842年ストップ・ウォッチによつて天體通過の時間を計らうとし、後に電流による記録方法が採用せられ、遂に**眼手法** (Eye and hand method) がこれに代るに至つた。望遠鏡の面を眺めると共に電鍵を押させて、そのときの時間を電流によつて記録せしめるのである。この方法が次第に改善せしめられるに至つたが、個人差は絶無ではない。こゝに心理學上個人差そのものを目標とする研究があらはれ 1879年**エックスナー**(Exner) によつて反應時間の名稱が一般化せられ多くの研究者**ドンデルス**(Donders) **エックスナー**(Exner) **マッハ**(Mach) **アウエルバツハ**(Auerbach) **クリース**(V. Kries) 等の人々によつて發展せられるに至つた。

##### 其の二 生理學上の神經興奮の傳達速度研究からの暗示

生理學者**ヨハネス・ミュラー** (Johannes Müller) **ヘルマン・ヘルムホルツ**

書 入 欄



(Hermann Helmholtz) 等の學者は筋肉に刺激を與へたときの時間から反應するまでの時間の測定に興味をもち、蛙等の動物について研究し神經興奮の傳達速度を測定した、然るにドネルス(Donders)はこの考へ方から出發し、若し、生理的時間の測定が出来れば、全體の反應時間から、これを除去し、精神時間の測定を得べしとの夢想をもつに至る。例へば、全反應時間は(一)末梢器官に刺激が來て神經作用に變化する時間(測定困難)(二)その器官から腦中樞に傳はる時間(ヘルムホルツによると1秒に60m. 他の學者によると26m—225m. 秒)(三)腦中樞時間、(四)中樞から運動神經によつて筋肉に至る時間(ヘルムホルツ、によると33.9m. 秒、ピーパー(Piper, H.) 120m. 秒)(五)筋肉末梢部の作用即ち筋肉の惰性に打ち勝つて認められる運動になる時間(ヘルムホルツ、によると蛙について $\frac{1}{100}$ 秒)

それ故(一)(二)(四)(五)の時間を測定出来ない(三)の時間は分らないことになる、そしてかかる引算の方法が妥當か否かは別問題として當時かなり眞摯な問題として取扱はれるに至つた。

反應時間を測定するには(一)圓筒廻轉器上に刺激の現はれた刹那と反應する刹那とを記録せしめ、同時に、音叉又は他の装置によつて時間線をとつて置くか(二)、特殊な時計装置、例へば、ヒツプ氏時計等を用ひ、刺激と共に時計の針が廻轉し始め、反應と共にとまる様にするか、又は單純にはストップ・ウォッチを用ふる。

反應時間は、一刺激に對して一反應といふ様に刺激も反應も簡單な場合を單純反應(簡單反應 Simple reaction; Die einfache Reaktion.) といひ、刺激も反應も複雑であつて刺激と反應との間に種々の心的作用が介在するやうな場合を、これに對して複合反應(Compound reaction; Die zusammengesetzte Reaktion) といふ。

### 反應の態度と簡單反應時間の種別

反應の態度は普通三つの場合が區別せられ、それによつて簡單反應の三種の區分がせられる。

#### (A) 刺激の方面に特に注意して反應する場合。

この態度に應ずるものが感覺反應(Sensory or sensorial reaction; Die sensorielle Reaktion) 又は完全反應(Complete reaction; Die vollständige Reaktion) といひ、その時間を感覺反應時間又は完全反應時間といふ。

#### 【註】 完全反應

感覺反應を完全反應といふのは、普通 (a) 刺激が意識せられ、(b) 注意せられ、(c) 意志衝動がそこにあるといふ意味に於て名づけられる。

#### (B) 反應する筋肉(例へば手の方面)に注意して反應するの態度。これに應ずるものを筋肉反應(Muscular reaction; Die muskuläre Reaktion) 又は短縮反應(Abbreviated or shortened reaction; Die verkürzte Reaktion) といひ、その時間をそれぞれ筋肉反應時間又は短縮反應時間といふ。

一般に注意せずに反應起り易く、反應して始めて注意せられることが多い、そして刺激に對して誤つた反應や、尙早に反應する場合を生ずるが、反應時間は概して短い、

#### (C) 自然的に反應する態度

これに應ずるものを自然的反應(Natural reaction; Die



natürliche Reaktion) とひその時間を自然的反應時間といふが、一般的にいへば、その反應時間は一定し難く、或時は、感覺反應に近く、或時は筋肉反應に近づく。それ故、學術的研究には除外して考へられるのが普通である。

筋肉反應時間は、反射の時間に近いと考へることが出来る。若しかく、筋肉時間を、生理的時間と推定することが妥當とすれば、感覺反應時間から筋肉反應時間を引き去ると感覺するに要する時間が求められる理論であらう。この種の理論については勿論異論があるが、歴史的にいへば一時(例へば1880年代頃)用ひられようとしたことがある。

#### 【圖一】 感覺反應時間と筋肉反應時間の比較

一般的に筋肉反應時間が短く感覺反應時間が長い。勿論、刺激の性質、感覺の領域によつても異なるが、大體100%位差があるやうである。

傳統的の結果を示すと

|              | 感覺反應時間       |                 | 筋肉反應時間       |                 |
|--------------|--------------|-----------------|--------------|-----------------|
|              | Titchener    | Lange           | Titchener    | Lange           |
| 光            | 290 $\sigma$ | (290 $\sigma$ ) | 180 $\sigma$ | (170 $\sigma$ ) |
| 刺<br>音       | 225 $\sigma$ | (230 $\sigma$ ) | 120 $\sigma$ | (120 $\sigma$ ) |
| 激<br>電氣の皮膚刺激 | 210 $\sigma$ | (210 $\sigma$ ) | 105 $\sigma$ | (100 $\sigma$ ) |

#### 【圖二】 精神時間の測定に減法を用ふることに對しては

多くの學者が反對するが、殊にキユルペ (Külpe, O.) が、全意識は異つた場面で變化するから時間上の差の増加は個々の精神物理的過程を示さないといふ意味の反對を考へてゐる。

#### 各種の條件と簡單反應時間

書 入 欄

簡單反應殊に感覺反應や筋肉反應を一定の條件下に於て測定し、條件を變化することによつて、これが如何に變化するかの研究は心理學的に見て一個の研究である。

例へば、睡眠と反應時間との關係、各種の藥物と反應時間の關係、精神發達と反應時間、性別と反應時間、職業別と反應時間、國民別と反應時間、個人差と反應時間等各種の方面に涉つて研究することが出来るであらう。

#### 複合反應 (Compound reaction; Die zusammengesetzte Reaktion)

簡單反應の理論を應用して、刺激があらはれてから反應するまでの間に各種の精神作用を介在せしめる場合の反應を名づけて複合反應又は複雑反應といふ。この中には比較的簡單反應に類似し只程度上の差にすぎないものから、かなり異つた複雑な場合がある。例へば此處に一個の刺激赤を出し、何か色の出たことを認めて反應するものは感覺反應であるが、確かに赤色に相違ないことを認めて反應する場合には、認識反應 (Cognitive reaction; Die Erkennungsreaktion) と稱し複合反應の中に入れられるが、兩者の間の區別は勿論、相對的といはねばならない。

複合反應としての特色は二個以上の刺激を用ひる場合に著しくなる。今、二個の刺激を作り、その中の一つ宛を露出して反應せしめる場合には辨別の働きが加はつてくるから辨別反應 (Discriminative reaction; Die Unterscheidungsreaktion) となる。例へば、刺激として

書 入 欄



白と黒との二色を選び、白を白として、黒を黒として認めたときに反応せしめる様な場合である。

更に刺激も複雑となり反応も複雑となれば益々、複合反応としての特色があらはれる。

多くの刺激の中、白が出たら右手で反応するやうにし、他の刺激の場合には反応してはいけないといふ様な命令を與へて実験すると有意反応 (Voluntary reaction; Die Willkürreaktion) となり、又、白赤、黄には右手で反応し、青黒緑には左手で反応するといふやうにすると選擇反應 (Selective reaction; Die Wahlreaktion) となる、そしてこれらの反應に要する時間はそのときの條件に依存して多少の動搖がある。

#### 【註】

二個の刺激に対する選擇は 60° を中心とした價から條件によつて動搖があり、10 個の刺激の選擇は 400° を中心とした價からの偏差をもつてあらはれるやうであるが、時によると、著しい動搖がある。これ、實驗條件の相違に基くやうである。

刺激として文字、語、色彩等を用ひて、それについて、何かの聯合が起つたときに反應せしめると所謂聯想反應 (Associative reaction; Die Assoziativreaktion) となる。

聯想反應には自由聯想 (Free association; Die Freicassoziation) 即ち何等の制限なき場合と制限聯想 (Restricted association; Die bestimmte Assoziation) 即ち一定の注文によつて聯想する場合とがある、制限聯

想でも、一義的な場合と多義的な場合によつて、その反應時間は大いに相違がある、勿論、一義的な場合は短い、これも條件によつて必ずしも一定しない。

#### 【註】 聯想診斷 (Assoziationsdiagnostik)

聯想診斷は聯想にあらはれる各種の内容を分析し、それを基礎として個人を診斷しようとするものである。

#### 【註】 反應時間研究の發達

反應實驗が精神時間研究として盛んに用ひられたのは、主として 1883—1892 の時代である。フリードリヒ (Friedrich, M.) は、1883年に、ランゲ (Lange, L.) は 1888年に統覺時間の研究をなし、カッテル (Cattel, J. M.) は 1885年、チッチエナー (Titchener, E. B.) は 1892年認識時間の研究をなし、チッシャー (Tischer, E.) は 1883年辨別時間を、メルケル (Merkel, J.) は、意志時間を 1885年研究してゐる。この外、これらに引續いて各國に多数のこの種の研究が出るに至つた。

#### 反應時間を基礎とした意志研究

反應時間の研究を意志研究に用ひたのはオランダの學者ドンデルス (Donders, F. C. 1818—1889) に始まるといはれてゐる。彼は辨別反應によつて赤青の色彩系列を用ひ赤を青から、青を赤から辨別して反應せしめ、そのときの時間を計量し、次に選擇反應によつて赤は例へば右手、青は左手にて反應する様に規定して反應せしめ、同様にその時間を計量し、この二つの時間を比較し、そして、そのときの時間上の差異は意志の干涉するところに基くと考へ、選擇反應時間から辨別反應時間を減じて意志時間の計量を求めやうとした。ヴント (Wundt, W.) も反應實驗は同時に意志實驗として用ひられ



ると考へ簡單反應は衝動動作に複合反應は有意動作及び選擇動作に該當せられると考へるに至つたが未だ意志の實驗としては充分であつたとはいへない。それ故、眞の意志の實驗的研究はアッハ (Ach, N.) に始まるともいつてもよい。

アッハは種々の實驗的方法を工夫してゐるが、今、二、三のものを述べると、

實驗列 I 被験者の四つの指で C.S.V.Z. の四つの文字に反應せしめる。今、これらの文字の中、何れかゞ出るとそれに定められた指で出来るだけ早く反應せしめる。

實驗列 II 二個の数が記入してあるカードを多く作つて置いて、この中の一つを被験者の前に出して加算、減算、乗算、割算の中何れかを選択せしめる、但し運算はなさしめない。

實驗列 III 今、無意味文字の列の對を多く作り、例へば LPKT—SNOZ. CLMX—QPZU. 等の如きもの多數を一系列とし、一定回数だけ被験者に反覆露出して先づ聯想を固定させて置き、この對の中の一方向だけを後に露出し (例へば LPKT) これを出来る限り早く最初と最後との文字の位置を轉換せしめる (例へば TPKL)。この場合 LPKT—SNOZ の聯想が固定してゐればゐるほど間違ひが起り易いから間違ひはぬ様に意志的に努力せしめる。そして最初聯合を、5回 10回 15回等それぞれの場合を作つて置いて同時に反應時間を基礎として研究する。勿論アッハ

はこの種の實驗でも色々の他の方法を用ひてゐることはいふまでもない。

以上三種の方法の中でアッハが最も重んじたのは實驗列 III のものであるが、これらの研究の結果として色々の成果を求め得てゐるが、今、その中、主なる二、三、の點を述べようと思ふ。

吾々はアッハの結果を三點に分けて見よう。

1. 決定的傾向 (The determining tendency; Die determinierende Tendenz) 意志動作に表現する最も主要なるものはその問題、その命令、その暗示、その教示に基いて起る心の態度であつて、最初に與へられる命令に規定せられて目的觀念が生じ、それに應ずる運動がそれによつて規定せられる。かく問題又は命令による目的表象にはその動作全體の方向を規定し、目的に適ふやうな運動をなさしめる傾向が潜在してゐる。かゝる全體動作を規定する傾向こそが決定的傾向である。

2. 私が欲する (I will; Ich will wirklich)

かく決定的傾向に基いてあらはれる目的觀念は動作者の實際の活動の中にあらはれて「私が欲す」(I will; Ich will wirklich) として體驗せられる。それ故、自我乃至人格に密接に關係してゐる。

3. 意志行爲は緊張感覺に表現せられる傾向がある。若し意志行爲が強いと時々、頭部、上肢、齒等に緊張感覺があらはれる。



これらの研究成果からアッハは意志の四要因を指摘したのである  
(第二節、熱望の心理の項参照)

Ach N. Ueber das Willenstätigkeit und das Denken 1905 参照

Ach N. Ueber den Willensakt und das Temperament 1910 参照

アッハとほゞ同様な方向に立つ研究はボベール (Bovet) の研究に見られる。

ボベールは、実験者が或語を發し、これに對する被験者の最初の聯想語を求め、そしてこの際に於ける命令に對する義務意識 (Duty consciousness; Das Pflichtbewusstsein) の分析的研究を行つてゐる。

デュール (Dürr) の研究もほゞ同様な研究であるが、彼は、鬚をひねれ、或歌を歌へ、床の上に坐せ等の命令を與へ、その時の意志を分析しようとしたが、その結果は大部分消極的な結果に終つた。

#### 【圖一】

ボベール (Bovet) は義務意識にも色々の區別があることを指摘し、例へば將來の義務、過去の義務、従つた義務、犯された義務、消極的義務、力の意識、容易だといふ印象、権利があるといふ意識、しなければならぬ意識等を區別してゐる。

#### 【圖二】

##### デュールの消極的結果

- (1) 快及び困惑の動機は有意動作を構成しない
- (2) 人格の意識は有意動作に原因しない。
- (3) 緊張の特殊状態は必ずしも有意動作の生起に必要でない。
- (4) 或觀念が反應を起し被験者は自分を只この觀客と考へてゐる、それ故有意動作は自我の意識がなくともあらはれる。主として觀念の生起又は再生に基くやうである。そしてこの消極的結果は、意志研究のかなりの參考となる點がある

即ち、研究の方法が異ると却つて異つた方面が存在することが暗示せられてゐる。

要するに、アッハの研究は  $y$  の刺激には  $x$  の動作が結合するといふ様に、一義的の意志が中心となつてゐる。

然るに意志を研究するには、刺激  $y$  に  $x$  及び  $z$  等の動作が結合され、この選擇決定の自由である兩側面的意志の研究が重要視されねばならない。

この方面の意志の研究を行つたのは ミシヨット (Michotte) 及び プリューム (Prüm) の實驗研究に見られる。

この實驗はアッハの實驗列 II を發展せしめたやうな種類のものであつて例へば、二つの數字を示し、乗算と割算との何かを選択せしめるのである。そして反應時間と内省とをとつて研究した。

今、吾々は、その主要結果を述べると

- (1) 二つの選擇肢の場合、その中の一つが有力な價值をとり、最初に檢しやうとする傾向が起る。
- (2) 活動の意識 (Consciousness of action or activity; Das Aktivitätsbewusstsein) が有意現象の特質であるが、この中には自我についての意識は包含せられない。
- (3) 選擇肢の一つが有力となり、愈々選擇せられると承認 (Consent) の形式をとる。
- (4) 承認があらはれないときには決斷の形式をとる、これは早く



あらはれるときと遅くあらはれるときとがある。

【註】プリュームの意志の三段階

プリュームは意志を三段階としてゐる

- (1) 初段階  
刺激→驚きの感情→快不快→動機の競争→選擇肢ノ出現
- (2) 中間段階  
主觀的要因  
疑及び豫期の感情→緊張の感情  
客觀的要因  
選擇肢の出現
- (3) 最終段階  
主觀的要因  
疑惑→確實の感情  
豫期→弛緩の感情  
客觀的要因  
選擇せられたものが目的視され、時々發音せられる。

ミシヨット及びプリュームの研究に類似したのはボイド・バーレット (E. Boyd Barrett, S. J.) の研究であつて動機及び動機の競争を研究する目的で行はれてゐる。被験者は味の異つてゐる無色の酒を選択する様に命ぜられ、この各の酒を無意味の名稱で呼ばしめられる。

實驗を三部に分ち、實驗列 I. 實驗列 II. は酒の味と無意味の名とを聯合さすための實驗として用ひられ、實驗列 III. で無意味の名稱だけで示された二つの酒の選擇を行はしめられるのである、被験者

は、自ら選擇をなし、その酒を味ふことが出来るやうに命令せられる。

この研究もその成果から見るとミシヨット及びプリュームの研究と大同小異である。

さて、これらの諸研究が、あらはれて以來、反應時間を中心とした研究は多々あらはれてゐるが、反應時間を中心とする研究は最初に人々が期待したほどの成果は求め難い、そして人々は、この種の研究領域には自ら一定の制限が横はつてゐることを自覺するやうになりつあるといつても過言ではあるまいと思ふ。

實驗 13 反應實驗 A.

目的 感覺反應と筋肉反應との比較

装置 スクリプチュア氏振子時計 (Scripture's Pendulum chronoscope) 音響槌 (Sound-hammer; Schall-Hammer)

電鍵、等。

方法 實驗者は振子時計及び音響槌をよく調節して置いて、用意で被験者の心構へを整へしめ、第一、刺激の方へ心構へを向けて反應せしめ、(感覺反應)、そのときの反應時間を計量する。第二、反應する指の方へ心構へを向けて反應せしめる(筋肉反應)。この二つの反應態度による反應時間の測定を各20回宛行つて兩者の反應時間を比較する。

整理 第八十四圖のやうな表を豫め用意して、各反應の平均



(AV) 及び平均偏差(m. v.) を計量する。

第八十四圖  
反應時間の結果の整理

| 筋肉反應 | 感覺反應 |
|------|------|
| 1    |      |
| 2    |      |
| 3    |      |
| 4    |      |
| 5    |      |
| 6    |      |
| 7    |      |
| 8    |      |
| 9    |      |
| 10   |      |
| AV   |      |
| m.V  |      |

**方法** 競争場面を構成する方法は色々あるであらう。二人の被験者に二つの装置をもつて同時に反應時間を計量する方法もあるが、こゝでは、被験者と実験者が交互に交代することによる方法を採用することとしよう。この方法によつて、筋肉反應及び感覺反應の各について反應時間を計量し、前記の各の場合を比較研究する。

書 入 欄

### 考察

- (1) 筋肉反應時間と感覺反應時間に如何なる相違があるか。
- (2) これらの反應時間に及ぼす主なる條件を考察せよ。

### 實驗 14 反應實驗 B. (競争場面)

**装置** はA に準ず。

**目的** 競争的場面に於て反應時間が如何に變化するかを實驗しようとする。それ故、實驗は三部から成る、(1) は普通の場合の反應時間二種。

- (2) 競争場面に於ける筋肉反應
- (3) 競争場面に於ける感覺反應

**整理** 實驗Aの整理に準じて工夫されたい。

**考察** (1) 競争場面に於て如何なる顯著なる特色が見られるか。

- (2) 如何なる點に關して競争が現はれるか、内省的考察や表現を通じて考察せよ。

### 實驗 15 反應實驗 C.

**目的** 反應時間が、用意から刺激露出に至るまでの時間の相違によつて如何に變化するか。

**方法** 實驗者が、用意といつてから、刺激を露出するまでの時間を條件として、これを組織的に變化して、反應時間の差異を研究せよ。

### 【註】

反應時間の實驗は、古く、反應の極限の時間の計量が中心の問題であつて、この計量の條件が附隨的に問題とせられた。然るに、既に實驗 B. に於て暗示したやうに吾々にとっては、かゝる反應時間の極限の問題よりも、如何なる場合には如何に反應時間が變化するかより興味がある。將來の反應實驗はもつとこの方面に向はねばならぬと思ふ。

## 作 業

Work; Die Arbeit.

### 作業の意義

作業 (Work; Die Arbeit) 又は心的作業 (Mental work; Die

書 入 欄



psychische Arbeit)とは意志活動をもつて行ふ仕事即ち一定の目的を達せんがために身心を働かせる行動を總稱する名稱である。

この看方からすれば、吾々の生活は多くの作業の連続であらう。

### 【註】 心的作業の測定法

従来心的作業の測定法は大別二種とされる。

#### (一) 間接的方法 (Indirect method; Die indirekte Methode)

この方法は心的作業を営む際に起る身體的隨伴現象を測定し、間接に心的作業を測定しようとするものである。例へば筋肉動作も一定の目的を達する際に行はれるときは一種の作業であるから、かかる筋肉動作を研究することによつて、意志動作を研究しようとする場合の如きこの一例であつて、筋肉動作を一義的に規定することは可なり困難であるがために主として、力量と速度の方面から研究されるのが常である。

モッソ (Mosso) のエルゴグラフ (Ergograph)、握力計、指力計等による測定が屢々利用され血圧計呼吸計脈搏計等による計量も間接的測定に利用されることがある。

この方法は  $x$  を身體的表現とし  $y$  を心的作業とすると  $y=f(x)$  の關係を一義的に決定することは困難であるが、ともかく大體同一進路をとると假定されて研究を進められてゐる。

#### (二) 直接的方法 (Direct method; Die direkte Methode)

この方法は心的作業をその單位で直接測定しようとするものであるがこの中に自ら、區別がある。

(a) 心的作業を行はしめ、その中にあらはれる變化で、測定し、別に試験作業を挿入しないもの、例へば一定の加算を加はしめ、それに現はれる誤の數、それに要する時間で測定するが如きこの一例である。

(b) 或甲の仕事を行はしめ、それに同種な乙の試験作業を挿入するもの。

例へば計算を一時間行はしめ、その前後に同種の計算にて疲勞状態を検するが

如きこれである。

(c) 甲作業と全く異種の試験作業を挿入するもの。

(b)及び(c)に於ては、甲作業に疲勞が起ると乙作業に及ぶものであることが假定されてゐる。

### 【註】 心的作業の測定の發達

心的作業の測定は徐々に發達した、**コールシュッター (Kohlschütter)** は有意活動と睡眠の深さ長さとの關係を研究し、意志が睡眠の固定性に關係があるが睡眠の長さは間接的にしか關係しないと、**リィガー (Rieger, K)** は有意的に筋肉動作をなす場合の筋肉動作を圓筒廻轉器に記録して研究してゐる。即ち或一定の重量を二分間、靜かに水平に保たせ、完全に水平に保たうとの意志が生じた場合、そこに描いた線は Zigzag 線をなすことを認め、それに個人差があることを示した。**モッソ (Mosso)** は有意動作の繼續及びその進路を研究しようとして、エルゴグラフ (Ergograph) を用ひ、有意筋の緊張收縮と電氣刺激による筋肉の緊張收縮との間に區別あることを認め、**クレペリン (Kraepelin)** に至つてエルゴグラフ曲線の分析をなし、意志動作が如何に曲線の進路にあらはれるかを研究した、**クレペリン派**の學者はこれと共に一位の文字の加算、數及び文字の暗誦の繼續の仕事なさしめ、その間の進路を研究し、**フォッス (Voss)** に至つて個々の作業の單位時間の測定をなし、精密な研究を生ずるに至つた。この外**モイマン (Meumann)** 及び**スミス (Smith)** 等は仕事とリズム (Rythm) との關係を研究し、同時に有意動作と無意動作との關係に及び、**レーマン (Lehmann, A.)** 等は意志的工作をなす際に於ける呼吸曲線の研究をなし作業の解明に向つてゐる。

これら各の學者の研究と共に各國にこの種の研究が一時普及したが、我國に於ては松本亦太郎先生のこの方面に於ける獎勵に基いて多くの優良なる研究成果を生ずるに至つたことは周知の事實であらう。

### 作業線 (Work curve; Die Arbeitskurve)

作業を、その作業の経過時間に關係せしめ、その作業時間に於け



る作業成績を考へるときは、そこに作業の進路を示す曲線を求めることが出来る。これを作業線といふ。

作業線は先年物故したクレペリン (Kraepelin) の研究に始まり、その後、多くの學者によつて研究せられてゐる。

### 作業線に及ぼす諸要因

作業線の性質として当該作業者の内外条件の函数的事實が表現せられて、個々の進路を示すと考へられるから、若し、これに及ぼす条件を考へる場合には、作業當時の作業者の外の場としての環境条件、内の場としての心内の情勢及びその相互関係の中に求められねばならない。

それ故、物理的環境と呼ばれるものが作業の有力なる条件であることはいふまでもないが、同時に、これらの条件は、作業者自體を考へることによつて心理的環境条件として考察せられねばならない。この意味に於て、時日、天候、季節、氣壓、溫度、照明、音響、色彩、藥物、食物等が有力なる条件である。これらを總じて、一般に外的条件といはれる。これら、それぞれの外的条件を變化することによつて如何に作業が變化するかを研究することは心理學的に極めて重要な問題であることはいふまでもない。が併し作業は、作業者の作業である限りに於て当該作業の当該作業者にもつ誘意性及び、当該作業者の要求水準の移動に關係して一高一低することは意志動作の理論から當然、推論出来る事實である。この故に、作業の進行

と共に生起する飽和現象、練習現象、自動化現象、疲勞現象及び身心の律動現象の問題として作業線に及ぼす内的及び外的条件が考察せられなければならない。これらは一般に、外的条件に對する内的条件の問題であるといはれる。

### 【註】 作業の外的要因

作業の外的条件は作業の性質や個人によつてかなり動搖があるので一般的に論述するのは、不可能であるが、然し、それぞれの外的条件について、一定範圍の比較的適切な条件があることは事實である。

(1) 日時、一日間の作業能率は、年齢、性、習慣等により異なるが、概括的にいふと心的作業は午前に身體作業は午後に高いといはれる。食事の前後や、就寝前には能率は減退する傾向がある。

(2) 天候溫度、天候溫度が人間の能率に影響することは常識のよく知る所である。これらも勿論、人や作業の性質に依存する。身體作業は華氏60度内外、心的作業は、それよりも、もつと低い溫度がよいとされる。そして、同一溫度よりも、多少昇降のある方が能率がよい。一般的に寒くて晴れの日の方が心的作業はよい結果のやうである。

(3) 季節、一般に四、五月、九、十、十一月頃が能率が高い傾向がある。

#### (4) 照明、色彩

適度の光度、光の分配の均一、色彩は寒色系統が沈靜でよいが然し、これも人によつて定る。人によると刺激的な色彩がよいこともある。

#### (5) 音響

音響は均一的な音響の低いものなら、さほど妨げはないが、余り高低があるといけない。都市生活に於て色彩と音響とを統制する必要があることは、單に作業能率の上からのみでない重要な問題を含んでゐるであらう。

#### (6) 藥物

藥物の影響は、それぞれの性質によつて様々であらう。或種のものは作業を促進



せしめ或種のものは低下せしめる。

### (7) 食物

食物の適度が作業能率に關係することはいふまでもない。菜食と肉食との關係も作業能率について考慮せらるべき問題であらう。

### クレペリン (Kraepelin) の作業の消長を規定する内的諸要因

先年物故したミュンヘン大學のクレペリンは心的作業の消長を規定する主要要因 13 個を列挙し、これを三部に分ち作業線の分析をなし、結局、作業線は、これらの諸要因の合成結果と見ようとしてゐる。今、簡単に、これを述べることにしよう。

#### 第一 作業能率を向上せしめるもの

##### 1. 慣熟 (Adaptation; Die Gewöhnung.)

慣熟とは、課題に注意を出来るだけ、専ら向けて、外の總ての障害作用を除去するといふ意味であつて、例へば、仕事の始めには、他人の居ることや、隣室の話聲や笑聲が、いやに氣になるが、少しすると専ら仕事の方に心を向け、そんな他の事は問題にならなくなると能率が上昇する。

##### 2. 適應 (Die Anpassung)

作業の手段を次第に完全に、最高能率をあげるやうに用ひることをいふ。即ち器具を正しく握るやうになり、一定の筋肉群を有効に使用し、不器用な態度を訂正して行くことである。

##### 3. 氣乗り (Warming up; Die Anregung.)

油が乗ることである。即ち心身の惰性に打勝つことに外ならない。例へば、朝、起きてすぐ作業をすると作業が睡眠の惰性のために油が乗つてこないが、少しすると油が乗ることがある、甲の作業から乙の作業に移つた場合にも、甲作業の惰性が残つて思ふ様行かぬことがある。

##### 4. 初頭努力 (Initial spurt; Der Anfangsantrieb)

作業の始めに能率のあがること。

##### 5. 終末努力 (Terminal spurt; Der Schlussantrieb)

これ、棹尾の努力である。作業がもう終りだと知ると能率が上がることもある。

##### 6. 疲勞努力 (Spurt after fatigue; Der Ermüdungsantrieb)

疲れると、これに反抗的に努力する、そのために能率が一時上がることもある。

##### 7. 障害努力 (Spurt after disturbance; Der Störungsantrieb)

障害が作業に来ると却つて努力があらはれ能率が高上する。

##### 8. 練習 (Practice; Die Uebung)

クレペリンは、それに先立つ類似の活動によつて一つの活動が輕易になることを練習といひ、比較的永續的積極的效果を残すものと考へてゐる。この意味の練習は氏一流の解釋であつて狭義の練習である。



## 第二 作業に抑制的に作用するもの。

これ廣義の疲勞 (Fatigue; Die Ermüdung) である。そして三つの場合に分けられる。

### 1. 作業分解物即ち疲勞物質の生成によるもの。

この種の疲勞は作業の始めまもなく起る。

### 2. 力の源泉の減退によるもの。

エネルギーの消費が補給より大なる場合に起るもの。

### 3. 組織の破損によるもの。

過度の作業によつて起るもの、疲憊現象を起し、その影響が可なり永く残る。そして仲々恢復され難い。

## 第三 作業を時に促進し、時に抑制するもの。

### 1. アインシュテルング、心的調整又は心の持ち方、態度 (Set or adjustment; Die Einstellung)

愉快な心の持ち方、悲觀的の心のもち方、嫌惡的であるか好意的であるか、競争的か、遊戯的かによつて非常に異つて能率上の高下がある。

### 2. 注意の律動

注意のリズムによつて作業は一高一低する。

さて、以上のクレペリンの作業の消長に及ぼす内的諸要因と稱するものを見るに、初頭努力はプラス誘意性に對する要求水準の上昇を意味し、慣熟、適應、氣乗りは要求水準の上昇に隨伴する活動の變化を意味し、疲勞努力障害努力は共に作業變化による緊張體系の

變化を意味し、終末努力は正に實現に至らんとする場合、再び、要求水準の上昇を意味してゐる。そして練習は、作業の反覆による心的體制の變化を示してゐる。そして、これらの現象が作業による當該作業の要求水準の移動と課題の誘意性の變化に依存することは、**アインシュテルング**を一要因と見ることによつて補はれてゐるかの觀がある。そして作業の反覆が他面消極的要因としての疲勞に負ふてゐることも見逃せられない事實である。のみならず、心的體制の作業時に於ける變化がリズムに依存することも重要である。これをもつて見れば、如上の諸要因を挙げ作業線を、これらの諸要因の合成と見ることは一見適切の様であるが、細かに、これを考へれば、一定の作業線は、これらの諸要因が決して總和的に合成されたものと見ることが出来ない。それ故、作業線の研究は、むしろ當該作業者が一定の場面に於て、一定課題の作業をなすに當つて、如何なる進路を示すかを、比較的重要な條件と考へられるものを目標として出来る限り、他の條件を一様にする事によつて、順次に研究される必要がある。

### 【註】 クレペリン派の作業線の分析

クレペリン派の作業線の諸要因は認められるが、この派が、一作業線を、諸要因による曲線に分解しようとする努力をなしてゐるが、この努力は余りに附會的解釋であることは、米國の**ソーンダイク** (Thorndike) の論ずる通りであらう。が併しソーンダイク派の反對は、それに留らないで、慣熟、適應、諸努力等の要因の存在を否定しようとしてゐる。この否定的考へ方は、事實を無視するものであつて正



しいとはいへない。

即ちソーンダイク一派は(一) 如上の諸要因に歸することが出来る作業線の上昇は、作業線に何時も現はれるものでなくて、統計の偶然偏差に過ぎないと攻撃する。(二) 若し、被験者が実験者の教示通り最大努力で作業してゐれば如上の要因の働く筈がない、即ち、これらは不完全な実験の結果だと攻撃する。

この種の攻撃は科學的に見て全く、科學的研究、殊に心理學的研究を知らぬソーンダイク流の解釋であることが自ら明かである。一體、偶然偏差は原因がつきとめ難い偏差にすぎないが、作業線だけを見ては、その上昇が、どの要因によるか分らなくても作業者の心身の活動を少しく観察すれば、それらの要因の存在は否定出来ない。それから、最大努力で作業してゐれば、かゝる要因が起る筈がないといふ論理は全く事實を無視してゐる。誘意性と要求水準の理論を考へると、かゝる論理は出来ない筈である。要求水準の移動の問題が作業線では最も重大なのである。尙ほかつ、最大努力でなかつたといふのは何を理由としていへるかである。最大努力は結局、一定の条件下に於ける最大努力の筈であらう。

かく、ソーンダイク一派の攻撃は的はずれであるが作業線に於て、促進的條件として練習が代表的であり、抑制的條件として疲勞が代表的であることは事實である。

さて、作業線の消長に及ぼす諸要因はさまざまであつたが、吾々は、抑制的要因の代表的なるものとして疲勞を、促進的要因の代表的なるものとしての練習の問題をもつと考察することとしよう。

### 作業線と疲勞(Fatigue; Die Ermüdung)

作業線の抑制的要因の最も代表的な作用を吾々は疲勞に求めることが出来る。疲勞は作業の結果、作業者の心身の機能に生ずる不統一並びに活動力の減退であつて、多くは能率の低下を伴ふものであるが、適当な休憩によつて恢復する現象を名づける。若しその程度

が著しくなつて休憩以外に如何なる方法でも作業し得ない場合の状態を疲憊(Exhaustion; Die Erschöpfung)といはれる。疲勞を廣義に解釋すると、疲勞、疲勞の感(Feeling of fatigue; Das Ermüdungsgefühl)及び、疲憊を含めて名づけられるが、心理學的にはこれらを各區別される。

### 疲勞曲線の進路

疲勞が如何なる進路を示すかを研究するには、作業線に於て、出来る限り促進的要因を除法して研究されなければならない。就中、練習が高度に達したものに就て研究せられる必要がある。疲勞曲線の進路についての研究は、その始め、蛙の單一筋の電流刺激による収縮状態に於ける進路の研究に暗示せられ、遂に人間の意志動作に於ける同様の問題が取扱はれるやうになつた。

#### 【註】 蛙の單一筋の疲勞進路

蛙の單一筋の電流刺激による収縮について各方面に研究者が出で、その結果二つの對立的の學説が出た。

##### (a) 直線説

等しい強さの強い電流刺激によつて一定の間隔を置いて収縮する筋肉の疲勞曲線は直斜線で表はされるといふ考へ方であつてクロネッカー(Kronsker)が1871年蛙の筋肉によつて研究した結果である。

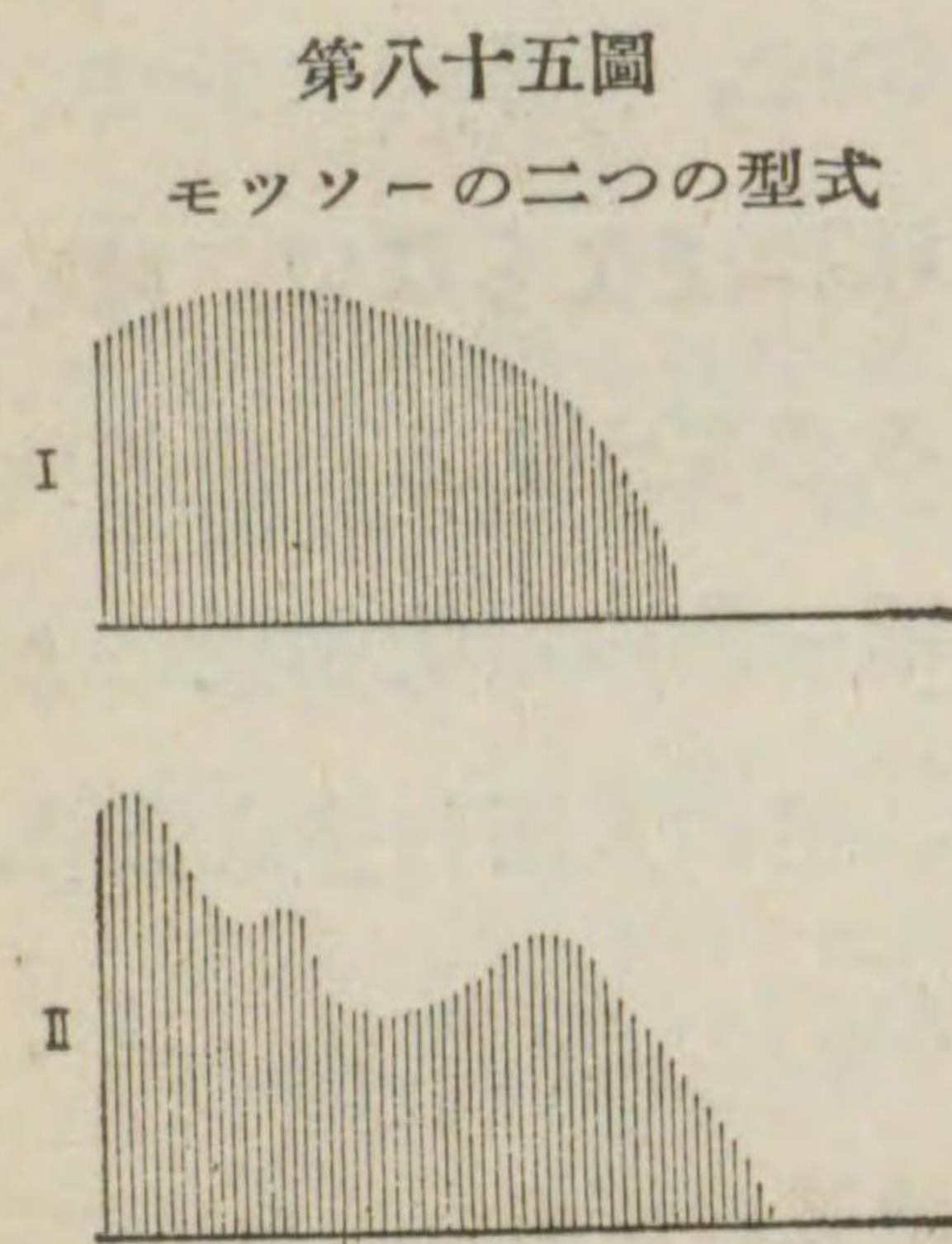
##### (b) 段階説

單一筋の作業線は直斜線ではなくて最初段階的に上昇し、後に段階的に下降するといふ考へ方であつてランケ(Ranke) マレー(Marey) ボウディチ(Bowditch)によつて代表せられる。



伊太利のモッソー (Mosso) は中指の屈筋作業をもつて疲勞を見んとし、エルゴクラフ (Ergograph) を考案し、中指のみを自由とし他の指を固定し、中指で一定の重量を持ち舉ぐる様にし、その持ち舉げた高さを記録して研究した。

モッソーは多くの人々について研究した結果から二つの型式を求めた。



レーマン (Lehmann, A) も多くの研究の結果モッソー (Mosso) の第二の型を疲勞の進路と見ようとし、そして、作業時間の等差級數的進行に對して能率の等比級數的減退に注意した。

我國では田中寛一博士が、外部意志動作の速度上 (例へば電信用電鍵を全速度で叩く) と力量上 (握力計及びエルゴグラフに就て) から努力多い研究をされ、その結果、外部意志動作は、その速度から見ても力量上から見ても、作業時間が等差級數をもつて進行するときは、能率は等比級數をもつて減少するといふ結論を出されたのである。

即ち、今、 $T$  をもつて時間を示し  $E$  で能率を示すと

$$\begin{array}{cccc} T & 2T & 3T \dots\dots\dots nT \\ | & \vdots & \vdots & \vdots \\ E & EK & EK^2 \dots\dots EK^{n-1} \end{array}$$

の関係がある、 $K$  は恒數で1よりも小さい數で作業量の減ずる割合を

示してゐる。それ故、疲勞曲線は對數曲線的に下降するといふことを意味するのである。

【註】

同博士は知的作業 (形名唱呼、置換、加算) についても研究し、同様に對數曲線的進路を疲勞について求められてゐる。

田中博士は同時に疲勞恢復の徑路を研究し、同様に、對數曲線的であることを示されてゐる。即ち、 $P$  を休憩時間の長さとし、 $T$  を時間  $K$  を常に1より大なる正數とすると、

$$\begin{array}{cccc} T & 2T & 3T \dots\dots\dots nT \\ P & PK & PK^2 \dots\dots PK^{n-1} \end{array}$$

の関係が成立する。

これらの事實を見るに疲勞の増進率には遞減の法則が支配してゐることを示してゐる。即ち作業に従つて全體としては疲勞が増進するが、疲勞の増加する割合は作業の進行と共に減少する傾向が存するのである。

【註】

我國に於ける疲勞研究家は數多い。

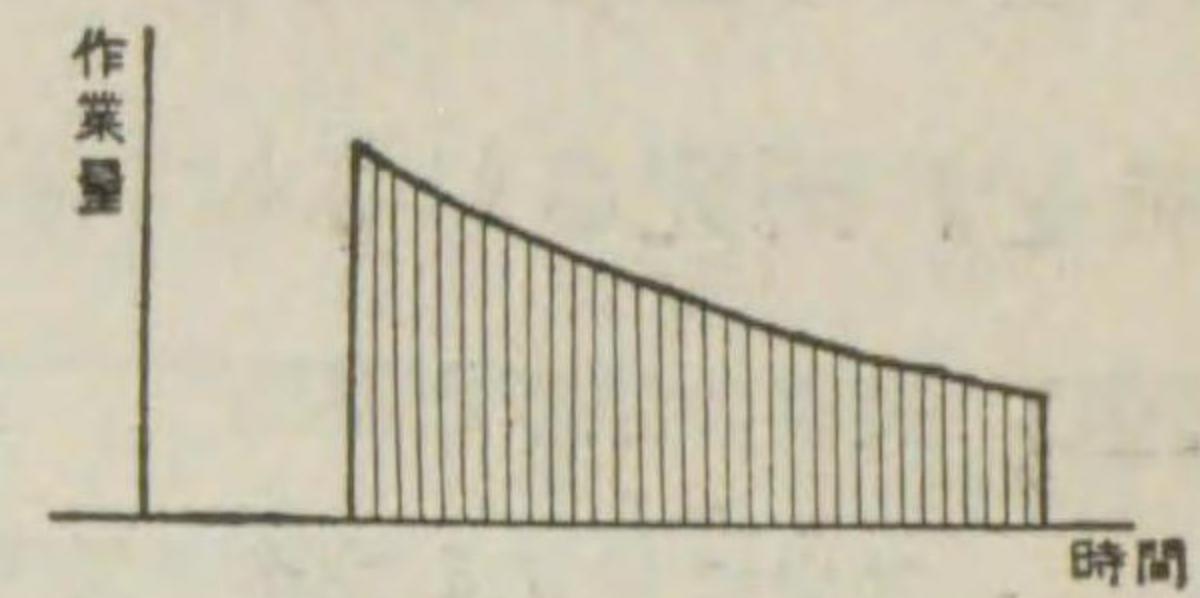
原口鶴子著 心的作業と疲勞の研究 参照

千輪浩著 精神作業に於ける疲勞と練習 参照

田中寛一著 人間工学 参照

寺澤殿男著 疲勞増進率の遞減性 (教育心理研究) 参照

第八十六圖  
對數曲線的疲勞曲線





さて、疲勞の進路乃至恢復の問題は、事實上當該作業者、作業の性質等によつて、必ずしも一樣とはいへないが田中博士の結果に表はれるやうな事實は、大體の傾向を示すものと考へねばならない。殊に個人の日常生活に於ける疲勞の進路は、個々人の生活に即してそれぞれ研究されなければ一般的にはいへない。

#### 【註】 災害の頻數と疲勞

一日中に於ける特殊の災害の頻數は、勿論、疲勞要因に一面はよつてゐるが、然し、特に疲勞だけに歸し得られるともいはれない、例へば都市で午前中、10—12時若しくは午後 3—6 時の間に災害が多いとするも、これらには各種の要因が働きかけてゐるから、分析することが可なり困難であらう。

疲勞の恢復のためには休息及び睡眠が必要となることは周知の事實である。

#### 實驗 16 疲勞測定の實驗

目的 力量上、疲勞進路の曲線を求める。

装置 エルゴグラフ (Ergograph)、圓筒廻轉器 (Kymograph)、拍節器

方法 被験者として、エルゴグラフの練習の比較的頂點に達したものを選定し、先づ一定の重量(3kg.)を選び、拍節器を一定時間に合はせ、圓筒廻轉器に煤紙を貼り置き、兩眼をとぎ、一定の態度を保ち、速度を拍節器に合せて、全力量で、中指の屈筋動作を行はしめ、最早や疲勞して進行し得ない場合に至つて止める。次に重量を變化して實驗する。

仕事 = 高サ × 重量

總仕事量 = 全長 × 重量

整理 煤紙上の曲線は同時に疲勞曲線であるが、時には10回毎の平均で曲線を描いて見られるとよい。

第八十七表 エルゴグラフ結果記入表

| 重量   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 總仕事量 |
|------|---|---|---|---|---|---|------|
| 5 kg |   |   |   |   |   |   |      |
| 4 kg |   |   |   |   |   |   |      |
| 3 kg |   |   |   |   |   |   |      |
| 2 kg |   |   |   |   |   |   |      |
| 1 kg |   |   |   |   |   |   |      |

#### 吟味

- (1) エルゴグラフ疲勞曲線の進路
- (2) 疲勞外のこの曲線にあらはれた要因
- (3) 曲線上の個人差
- (4) 握力計、其他による結果との比較

#### 作業線と練習

練習 (Practice; Die Uebung) は、これを形式的に見ると反覆による上達であるが、これを本質的に見れば反覆によつて起る構造變化の一現象である。即ち反覆することによつて、課題の分化が生じ、それに對する要求水準の移動と共に、動作の目標が變化し、最初自



己の動作でなかつたものが、自己動作の組織中の一部としての役をなすやうになり、自己の動作組織が全體として變化し、遂に、その動作に一定の位置を與へて固定しようとする現象に外ならない。自己の動作の一部の位置を占めるやうになるから、その動作が容易となり形式的に上達を隨伴するやうになる。そして、この種の上達が練習効果といはれる。

練習効果を意圖的に目ざす場合を有意的練習といはれ、他の目的で反覆してゐる中に上達する場合を無意的練習と呼ばれるが、この何れの場合でも、原理的には練習は反覆による動作の構造變化に特色があつて、練習効果は、それに隨伴する現象にすぎない。

例へば、動物の迷路の學習徑路を見ても、吾々のタイプライティングの練習の場合でも、同じやうに反覆による動作の構造の變化が練習の本質を形成してゐる。この點は、叩打の練習でも、その他の場合でも全く同じである。

動物殊に鼠について屢々動物心理學者は學習の實驗を行ふのが常であるが、鼠が迷路に入れられると、始めは、全くの探索的な本能運動をなし、的もなく彷徨ひ廻つて、袋道へ幾度も入つてしまふ。全く偶然的運動の結果、食物のある場所へ來るにすぎない。この場合、少量の食物を與へ、後に再び、出發點へ歸し、かゝる動作を二三日反覆すると、鼠の行動の中に、何等かの結果に達しなければ満足しないといふ様な内的傾向を示す動作が見られるやうになる。毎回の

時間を計り、袋道に入る回数等を記録して見ると、時間は可なり短くなり誤も少くなる。

が併し、更に反覆するに、消極的反應に對して積極的反應が發達し時間も顯著に短縮され誤も少くなる。それでも、未だ動作は全體としては圓滑ではなくて、時々躊躇するやうな動作をしたり、急に留まつたりするが、今度は、消極的反應と積極的反應との對立は問題でなくなり一本道を歩くかの様に目的に達するやうになる、これらの全經過を通じて、大體、幾段もの動作の變化が見られるが、これ、始めには、未だ分節されない全體構造が次第に分節されるのみならず、遂には、新なる一つの單位の活動となつて行はれるやうになつてゐる。

吾々が叩打を練習するやうな場合に於ても、始めはコツコツと音を叩いて、只それを打つといふやうな形で行はれるが、時々一定のリズムが目標となつて行はれ、時には良き成績を擧げようとして動作が組織され、時によると數へることに中心が置かれて叩打せられることもある。タイプライティングの練習についても同様である。

鍵盤を見ないで、目で原稿だけを見てタイプライティングする(Touch-method) 場合、練習者は先づ鍵盤上の文字の配列を記憶し、左右の各の指の擔當する文字を覚える必要がある。

次に練習すると文字の視覚像の記憶は自由となつて、一つ一つの文字に對する運動のみならず、單語に對して指が全體として反應す



るやうになり、更に進むと句や章に對して、指が全體として活動するやうになる。そして、眼は、現に打つところより、先の方まで讀むことになるであらう。鍵盤を見て打つ場合(Sight-method)に於ても、動作の組織變化が起ることは同様であつて最初の漠然たる全體動作が次第に分節的になり、而もそれらは全體中に於ける分節として簡單化せられるに至るのである。

練習曲線(Practice curve; Die Uebungs-kurve)

練習といふ事實が、始め纏つてゐない全體動作が秩序ある分節的全體の動作に構造變化することであるから、その効果曲線もこれを反映して一高一低する筈である。

一般的にいふと、始めは動作が全體として著しく變化するから、これが練習曲線に反映する筈である。勿論、作業の性質と作業者との關係で一樣ではないが、練習曲線は、初めに於て急に上昇する傾向がある場合と、一定時期を経て急に上昇を始める場合とが普通である。始めに於て上昇するもの即ち初頭上昇は、始めは要求水準の上昇により、従つて分化し易い作用が始めに著しく發達し、比較的分化の困難なものが後へ残ることが當然の理由である。然るに初頭停滯の現象は動作の分化が生ずるに一定の時期を必要とすることを意味するにすぎない。それ故この分化が起ると、急昇が起るのである。

然るに、一定動作が一通りの分化が終ると急に固定化が始まり、練習効果が停滯す時期を發生する、この時期を名づけて、練習の高

原(Plateau)と呼ぶ。高原は一通りの動作の分化が出来て次の分化が未だ出来ない、否この時期に於て、次の分化が始まらうとして、未だ充分發展し得ないいはゞ混亂の時期である。それ故、高原を準備期として次の分化期が發生するやうになるのである、

が併し高原が生ずるか否かは、一に作業の性質と個人の狀態とによつて定まるものであつて、若し一義的分化が出来るやうな場合には高原の發生は見られなくなるかもしれない。

【註】 練習の高原(Plateau)

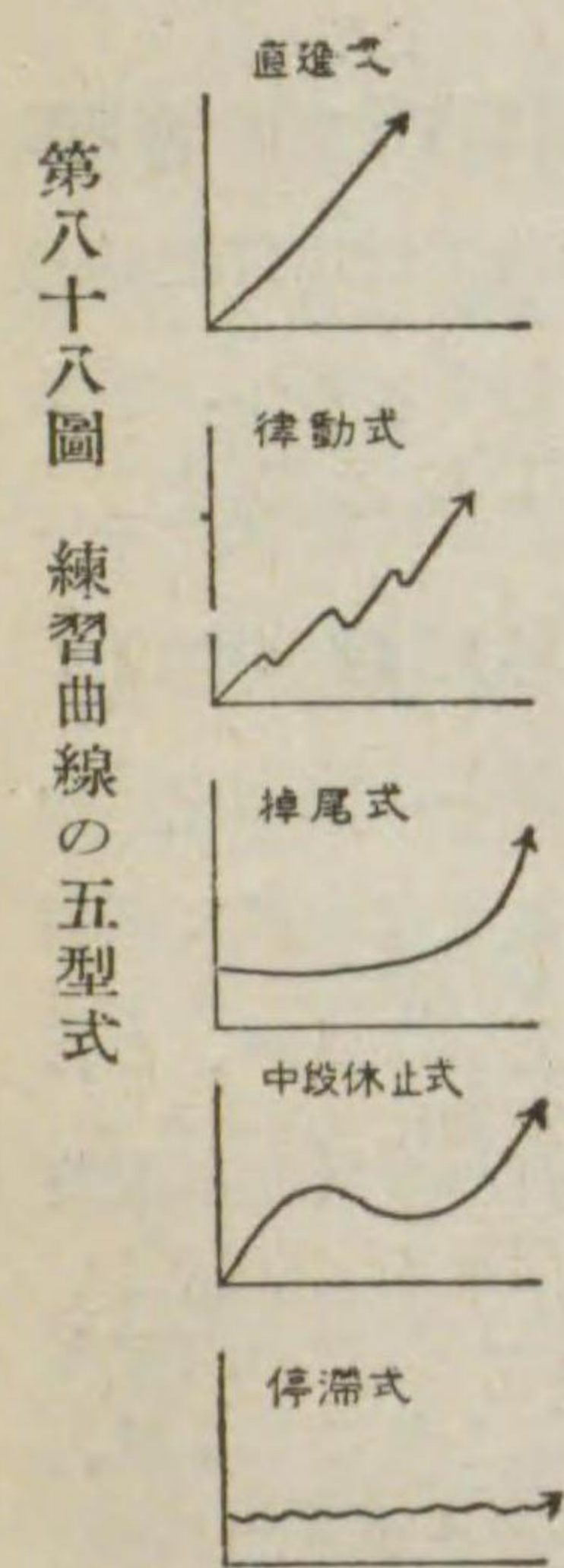
ブライアン(Bryan)及びハーター(Harter)は1899年、電信作業の研究に基いて習慣階級制説(Hierarchy theory of habits)を唱導し要素的下級的習慣が固定し自動的になつて始めて、これを基礎にした上級の習慣形式が起ると考へ、下級習慣が固められて始めて上級習慣の形式に注意が向けられるから高原は注意のエネルギーの方向轉換の時期であるといふ。然るにブック(Book, W. F.)はタイプライティングの學習の結果から高原は或人にとっては興味、努力が減退し、注意の統一が亂れた時期であるが他の人にとっては努力が方向を誤つて、これまで出来た練習が破られる時期である。そして、そこにある困難のために不快嫌悪があるが、これらをすべて除けば高原は現はれないと主張する。この二つの説は何れも反面の理論だけを見てゐる。即ち前者に於ては下級習慣が固定せられて始めて次の習慣形成が起るとするが、事實はさうではない、そしてブックは高原を混亂期と見てゐるが、次の分化の準備期と見ようとする。

練習は、そこに極限がある。どうしてもそれ以上上昇しない極限は生理的極限である。生理的極限は實際には示し難い。これに對して吾々が自分で極限と考へてゐる心理的極限がある筈である。



### 練習曲線の型式

練習曲線の型式は上に述べた諸要因の働き方によつて又作業及び個人によつて必ずしも一様とはいへない。が併し、ほゞ、如何なる型式があるかといふことが問題とされることがある。例へば、松本亦太郎博士の五つの型式の如きはこの代表的なる試みである。即ち直進式、律動式、掉尾式、中段休止式、停滯式これである。(第八十八圖参照)



松本亦太郎著 実験心理學十講参照

### 練習の波及 (Transfer of practice)

一練習が他の動作の能率を促進するものを積極的波及といひ、反對に他の動作能率を減退せしめるものを消極的波及又は干渉と呼ばれる。

積極的波及即ち兩作業間に共通なものがなくても一作業の練習が他作業の能率を促進する場合は屢々見られる、例へば左右相稱部分については右手の練習が左手の能率を高めるやうに普通に見られる場合である。但しこの場合にも、神經中樞の共通の部分が働くことは事實であつて、この事實

以外に波及があるか否かは問題である。

波及は各種の方面に涉つて研究せられてゐるが、最も、論議の多いのは記憶の場合であつて、或人はこれを肯定し或人はこれを否定

する。が併し、一定の態度、心のもち方一定のリズム、ゲシュタルト (Die Geestalt) 等が、類似する場合には波及があることは事實である。これらを若し共通の現象とすれば、それ以外に波及があるか否か問題といはねばならない。

消極的波及即ち干渉 (Interference) は、例へば、或カードを一定の標準で分類することを練習すると、新に別な、標準によつて分類することが極めて妨害されることがある。これ、聯想的又は學習的干渉である。

ベルグシュトレーム (Bergström) は、この種の方法によつて實驗してゐる。

そして、或事を一生懸命に練習すると已によく覚えてゐることの再生が困難になることがあるが、これを再生的干渉として區別されてゐる。

### 【註】

波及の事實に關する研究は**フォルクマン (Volkman)** が觸覺辨別閾について右手左手の波及を研究し、**フェヒネル (Fechner, G.)** が幾何學的圖形及び文字の描寫について研究して以來、多くの人々によつて記憶の方面その他の知的作業等について研究せられるに至つてゐる。消極的波及についても **ミュンステルベルク (Münsterberg)** **ミューラー (Müller, G. E.)** 及び **シューマン (Schumann)** **ベルグシュトレーム (Bergström)** **ベイヤ (Bair)** **ブラウン (Brown)** 等の多數の研究を生じたが、我國では波及一般について **田中寛一** 博士の研究其他が見られる。

(田中寛一著 人間工學 同項参照)



## 第七章 思考論

Theory of thinking; Die Lehre des Denkens.

## 思考一般

## 思考の意味

思考する若しくは思惟するとは、課題と、その解決過程を含めて稱せられる語に外ならないであらう。それ故、思考目的としての課題がもつ意味内容を、その文脈を辿つて具體化し、各種の表象（視覚的、聴覚的、運動的等、圖式、定位、考想から成る秩序ある集團でそれを描き出し、かくして具體化されたものを最初の思考目的に關係せしめ、それを代表さす様な心的過程は思考といつてよい。吾々は、何か不安があつたり、疑問があると、ともすると、それについて考へこむ、考へこむと色々の豫想が起つたり、過去の色々のことを思ひ出したり、少しく見込がつくと「成程」と思つたり、見當がはずれると「はてな」と考へて探つて見たり、こねまはして見たりするのが常である。或時は理づめで終始することもあるが、時によると目くら探しを餘儀なくされるやうな場合もある。が併し、この場合でも、何かの豫想がないとはいへない。そして最後に、「成程」との感が起ると、この過程は終つてしまうのである。かう考へて見ると思考と吾々がいふものは、一種の意志過程に外ならないのである。この

場合に於ける動機は、不安感情を伴ふ疑問、又は問題であつて、これが具體化に向ひ、具體化されたものと問題又は疑問との關係が把握せられ、前者か後者の代表となり得るやうな場合には意味の意識 (Consciousness of meaning; Das Bedeutungsbewusstsein) が發生し合致の感情 (Feeling of agreement; Das Uebereinstimmungsgefühl) の發生となり、然らざる場合には益々疑惑となり、探索的の過程をとる。そして、最後に解決せられると満足之感となつて終るのである。

そこで思考する場合には過去の各種の經驗の再生や將來の種々な豫想や、一致の感や疑惑の感が色々の形をとつて表現されるが、その中心の問題は、常に課題と、その解決に存在すると見なければならぬ。如何にして課題が定立せられ、そして、又如何にして、それが解決に導かれるかの問題こそは思考の心理學に於ける中心の問題なのである。

## 課題の定立

課題が定立せられるには、そこに必ず、疑問となり、不安となり解決への誘惑となるものが存在する。即ち誘意性が、そこに存在し、それに関係して要求水準が一定の程度に達してゐなければならぬ。

例へば、犬の吠ゆるのを聞き、何故かと問ひ、異様な姿態を見ると、その正體をつかまんとし、實驗結果の矛盾に遭遇すると何故かの理路を辿らんとし、學說上の矛盾を見て、更に新しき問題解決の可能を訊ね、宇宙の本性に疑問をもち、これを解決しようとするやう